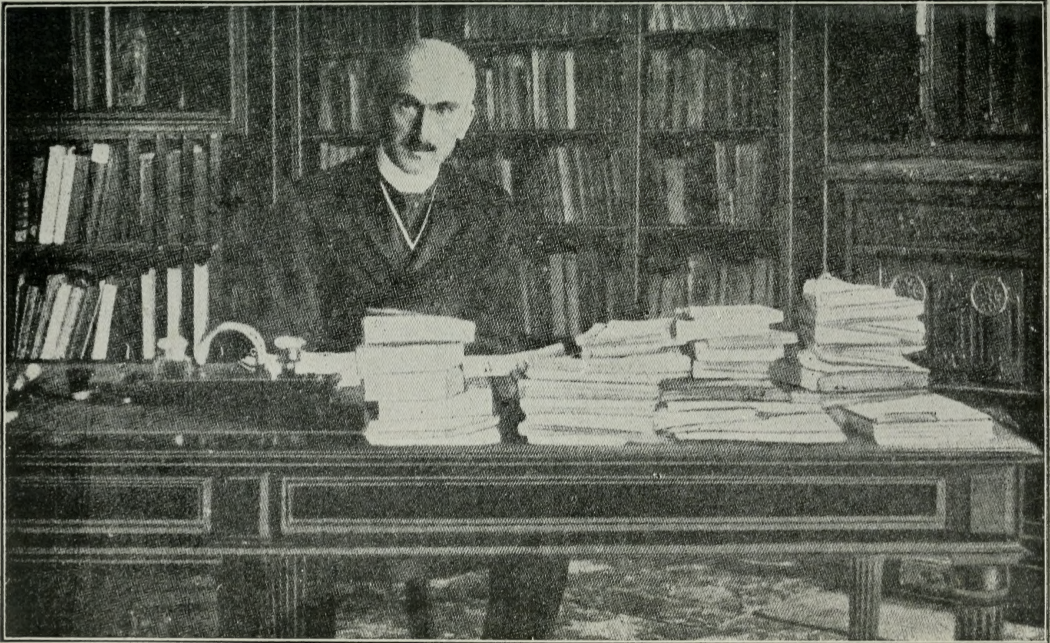
現代叢書

ベルグソン

蘇峰 德富猪一郎監修
伊達源一郎編輯



書齋に於けるベルグソン

ベルグソン哲學の眞價は、今日に於て尙ほ未知數たるを免れず。之を頌して哲學史上罕覯の巨頭となすもの、固より衆しと雖も、時に貶して衒奇誇玄の亞流となすもの、亦決して鮮しとせず。唯十九世紀以降、世を擧げて自然科學の累する所と爲り、物質を以て萬事を律し、精神の崇高なる歸趣を蔑視するの間に介立して、精密なる科學的實證に準據して、人間の靈性を論

證し、吾人をして一切の自負と尊大とを脱するも、猶且つ萬物の靈長たる自信を得せしめたる彼の哲學は、現代唯物的思想の卑俗輕佻に堪へざる者に取りて、亦一服の清涼劑たるを失はず。這般の消息を傳ふるに於て、本書蓋し愆らさるに庶幾からん乎。

近者ベルグソン今次の大戰に關する講演を上梓し、其の原因を物靈の衝突に歸し、祖國佛蘭西の爲に辯すること頗る委曲詳悉。且つ終局に對しては、其の獨得

なる哲學的論理より歸納して大に樂天的期待を抱懷するものゝ如し。斯翁の立場としては固より當に然るへきこと、毫も疑を容れす。然れとも之を讀む者、徒に輕々言辭の末を看て、眞義の本を察せす、所謂精神的方面の修養にのみ沒頭して、物質的方面の準備を忽諸に附することあらは、亦國家存立の大患なり、深く省みさる可けんや。

大正四年八月二十四日

於國民新聞編輯局

蘇峰學人

例言

一、本書の內容は之を三部に分つことを得べし。第一章より第二章まではベルグソン哲學の評釋、第三章より第七章まではベルグソン哲學の解說、第八章より第十二章まではベルグソン哲學の梗槪なり。

一、評釋と解說とに於ては、在來哲學者の所說とベルグソンの所說とを兩々相列記して、成る可く解し易からんと旨としたり。梗槪に至りては、殆ど全部ベルグソンの文章を以て綴り成したるものにして、出來得る丈けベルグソン

ン哲學の大觀を示さんと努めたり。

一、古語に曰く、『天が下には何の新らしき事もなし』(Nihil novi sub cœlo)と。特に哲學の如きは最も古き歴史を有するものなり。ベルグソンの說き方は、勿論新らしと雖、其の取扱ひたる問題に至りては、殆ど皆千古の問題なり。先哲の言に曰く、(Non nova, sed nove)(其の事柄の新らしきにあらず、其の說方の新らしきのみ)と。是れ評釋と解說に於て、在來哲學者の所說とを兩々相列記したる所以なり。然れども或意味に於て、ベルグソンは實際思想界の革命兒にして、哲學界の偶像破碎者なり。其の思想、

其の主義、時に其の言辭までも、在來哲學者のそれと殆ど根本的に相異なり。是れ梗槩に於てベルグソンの所說を殆ど其儘原書より譯載せざるべからざる所以なり。されば難解の箇所は多く梗槩に於て認めらるべし。

一、難解の理由は、飜譯其者の性質に因るべきも、ベルグソンの思想、主義、及び言論の在來のそれと全く相異にして、眞個獨創的なるも亦之が一因たらずと云ふ可からず。編者は成る可く文章の晦澁に由る難解を避けんと努めたれども、純然たるベルグソンの文章を以て、純然たるベルグソンの思想の脈絡一貫したる所を示さんと欲し

たる點に於て、多少難解の譏を逃るゝ能はず。讀者請ふ編者の苦衷を察して之を諒せられよ。

編者識

大正四年七月

目次

第四章　自由問題の解說

第五章　心身問題の解說……………一一九

『附　錄』

目　次　終

ベルグソン

緒言

一 ベルグソンと先哲

佛蘭西に於ては、デカルト以來、歐羅巴に於てはカント以來、ベルグソンの如き大哲學者起らずとは、必ずしもベルグソンを崇拜する者の言とのみ見做すべからず。近世哲學者中マルブランシュは精緻なる心理學者たると同時に、穩健なる論理學者なりと雖、其の事業は多くプラトーンとデカルトの主義を祖述したる迄にして、實在に就ては左程深く研究したるものにあらず。スピノザや、ライプニッツは

觀察の卓絶なると構想の雄大なるとに於て、眞に大哲人の稱に負かずと雖、是れ亦デカルトの機械說を通して見たるプラトーンとアリストテレスを祖述したるに過ぎずと云うて可なり。若夫れフィヒテ、シエリング、ヘーゲルに至りては、單にスピノザとカントの主義をいろ〳〵に結合せしめたるもののみ。玆に舊來の哲學思想を脫却して、超然高踏、直に實在の牙城に肉薄し、生命の核心を解剖し、別に獨創の意見を立てゝ、在來の哲學界に一新紀元を劃したる者あり、即ち是れベルグソンなり。ベルグソンがデカルト及びカントと共に哲學界の大立物なりと稱せらるゝもの、必ずしも過當の言となすべからず。

二　ベルグソンの學說及文才

前世紀に至るまで哲學上唯一の眞理の如く思はれたるものありとせば、そは凡て形而上學的研究は不可能にして且無用の業なりと云ふことなり。當時の學界は宛然群雄割據の有樣にして、中に一方の重鎭と仰がれたる者の議論を擧ぐれば、曰くカントの批判論、曰くコントの實證論、曰くテーヌの觀念論、曰くルナンの懷疑論、曰くスペンサーの不可思議論等殆んど數ふるに遑あらざれども、此等各種の議論も形而上學を排斥するの點に至りては、不思議にも其揆を一にせり。佛蘭西に於て當時の思潮を汲める現代文士學者の言論も亦實に此の傾向あり、例へばアナトル・フランス、シャール・モーラ等の如きも即ち然り。當時の學者は往々科學萬能論に心醉して、『哲學は既に死せり』『宗教は將に亡びんとす』など〻絶叫して、只管科學の全盛に誇りつ〻、『死せる哲學と瀕死の宗教との後繼者は科學なり』

と主唱したり。然るに現世紀の初頭に於てベルグソンは初めて權威ある形而上學者として起り、其の學說は頓て世界的勢威を占むるに至れり。是れ佛國に於ては二百五十年來未曾有の事なり、ベルグソンの最初の著『意識の直接與件論』の世に公にせられてより未だ二十年を出でざるに、現代思想の重要なる表現は、孰れも皆此偉大なる天才の感化を受けざるはなし。哲學は先づ第一着に在來の問題たる『自由論』『心身相關論』『生命論』等に就て嶄新なる解釋を得たると同時に、思想界に於ける根本的革命を見るに至れり。特に理知と直觀、科學と形而上學等に就ては、前人未發の創見に接するを得たり。次に科學の如きも亦、心理學、生理學等に於て、既に氏の重要なる見解を利用するに至れり。哲學科學以外に於ても、ベ氏の新說の爲に多大の影響を被りたるものあり、即ち社會上に於ては氏の

崇拜家たるジョルジュ・ソレル氏によりて、『ネオ・サンディカリスム』なるもの茲に其の面目を一新し、宗教上に於いては氏の祖述者たるエヅアール・ル・ロア氏によりて、『ネオ・カトリシスム』なるもの爰に新しき解釋を得たり。尙藝術界の如きも亦將に氏の感化を受けて、一新生面を開かんとするに至れり。今やベルグソンの名は宇内に洽く、其の著書は各國の語に飜譯せられ、其の文章は『音樂の如し』と稱せられて、文士間に於ても盛んに持囃さる。彼は思想家たると同時に文士若くは詩人として見るべし。されば堅實なる思想を盛るに天下の名文を以てし、哲學者として學窓の內外に愛讀せらるゝ者、昔に在りてはプラトーン、今に在りてはベルグソンなりと、幷び稱せらるゝに至れり。實際プラトーン以來、哲學者としてベルグソンの如く明快にして且純潔なる文章を書きたる者を見ず。元來佛蘭西語

の流暢優美なるは羅甸語に次ぐを以て稱せらるゝが故に、べ氏の文章の流麗なるは、原文の佛蘭西語なること之が一因たるに相違なしと雖、其の主要なる原因は矢張り氏の文才の凡ならざるに歸せざるべからず。由來哲學者は多く其想其文に勝つを以て常とするが故に、佛蘭西の哲學者と雖亦此の常則を脱する能はず。吾人は今日に至るまで佛蘭西に於て文章思想幷び稱すべき者僅にボッシュエ氏一人あるを知る、他は皆或は文を以て勝ち、或は想を以て優りたる者なり。之を古代に求むれば、アリストテレスは大哲學者なりと雖、其想遙に其文に優れり、シセロは文想幷行の哲人として有名なるも、其文の音樂的なるに比して、其想の時に平凡に失することあり、故に哲人と云はんより、寧ろ文豪と稱すべき者なり。爾餘の哲學者に至りては何れの國に於ても單に想のみを以て鳴る者多し、就中獨逸の哲學

者の如きは特に然りとす、其文の見るべき者殆ど一人もなし。ライプニッツやカントの如き大哲學者は、其想に於てこそ感嘆すべけれ、其文に至りては毫も賞讃すべきものあるを見ず。果して然りとせば、文想の共に見るべき哲學者は矢張り昔に在りてはプラトーン、今に於てはベルグソンを推さゞるべからず。文は花の如く、想は泉の如しとは、此の二大哲人に對する適評なりとす。想像の豐贍なる點に於ても、敍述の巧妙なる點に於ても、將又幽を釣り、微を剔る點に於ても、吾人は此の二大哲人の間に優劣を見ず。要するにベルグソンは哲學的思想界に一轉機を與へたると共に、哲學的文章界にも一新機軸を出したる者と謂ふ可し。

三　比喩の巧妙

尙ベルグソンの文章に於て特に注意すべきものあり、そは比喩の絕妙なる事是なり。由來哲學界に於ては比喩は事實を誤るゝと多しとて、之を排する人多し。然るにベルグソンは敍述の巧妙なるに加ふるに、比喩の巧妙なるを以てす、氏の比喩は吾人をして刻々新しき生命に觸れしめ、巧妙なる心象を起さしむ。是を以て讀者は氏の文辭に魅せられて、知らず識らず其の導く所に到達す。勿論氏は比喩を思想表現の手段として使用するものにして、之を以て吾人を眩惑せしめんとするにあらざるや言を待たず。是を以て少しく幽玄の思想が吾人の腦力に超越するの懼ありと見るときは、忽ち自然界の事實を假り來りて、之を活躍せしめ、一見直に其意を了解せしめんとす。ベルグソンの比喩は吾人を魅する力ありと雖、毫も其の說く所の理法を誤まらしむるものにあらず。ベルグソンは吾人を催眠術

に掛けて、思想の迷宮に引き入れんとするものにあらず。否寧ろ在來の舊思想に囚はれたる吾人の精神を開放して、直に思想の水晶宮裡に入らしめんとするものなり。在來の哲學者は多く外部より人に說かんとしたる跡あれども、ベルクソンは吾人自らを内省せしめんと欲し、敍述も比喩も皆此の目的の爲に使用したることを忘る可からず。反對論者は氏の比喩餘りに多きに失するを非難すれども、吾人は寧ろ氏が諄々として人に敎ふるの親切を謝せざるべからず。

四　名聲天下に洽し

ベルグソンは今方に『發達の途中に在り』と批評するものあれども、其の名聲は已に絶頂に達せり。氏は巴里に敎鞭を執り始めたる當時より、早くも其名學界に喧傳せられしが、新聞雜誌と其の著書

の飜譯とによりて間もなく全世界に持囃さるゝに至れり。吾人は「コレージュ・ヅ・フランス」に於て氏の講坐を圍繞する紳士淑女の感嘆に就ては之を語らざるべし。蓋し彼等は氏の學說を聽かんが爲よりは、寧ろ流行を逐うて時勢に後れざらんが爲に茲に集るものなればなり。大學校又は師範學校に於て氏と同窓の友たりし者の中には、氏を稱讃して九天の上に揚ぐる者あり、中にもルネ・ジルアン氏の如きは、ベルグソンを以て世界の大哲學者となし、佛蘭西に於てはデカルト以來、歐羅巴に於てはカント以來、ベルグソンの如き大哲學者出でずと云へり。

五　革命兒としてのベルグソン

ベルグソンは哲學界に於て一大革命を行はんことを企てたり。氏

の革命は先づ第一カント哲學の壓制に對する謀叛なり。其後上はエレアート及びプラトーンの哲學より、下は今日に至るまでの一切の哲學と戰はんと欲したり。彼思へらく、古來の哲學者は孰れも皆眞理を闡明する眞の方法を知らず、彼等の中未だ一人も眞の見解を下す能はざりしは孰れも皆主知論者なるが爲なりと、斯くして氏は先づ第一着に反主知論を標榜して立てり。

古來の碩學が苦心經營の結果、徐々と築き上げたる積年の經驗及び知識を一擧にして排斥せんとするには、如何なる思想界の革命者にも非常の大膽と自信力を要す。昔しはデカルトとカントが既に此の如き行動に出で、前人の議論を排して、獨自の創見を立て、後世の學者に之が先例を示したり。

蓋し革命兒は、其の政治界に於けると思想界に於けるとに拘らず、

必ず先づ此の如く破壞するを以て始む。ベルグソンはカントの主義を排して、其の權勢を奪はんことをのみ夢想したれども、カントは元氏が母讚なるを忘るべからず。氏が「リセー・コンドルセ」又は師範學校に在るや、當時官學の主義は實に嚴密なる『カンチスム』にして、『純理批判』にのみ重を置き、『實踐理性』を蔑視するの傾ありたり。

然るに世人は官學の壓迫に耐へず、年少氣鋭にして、獨立不羈の氣象に富める者は一刻も早く之を脱却せんことを渴望したり、是れ實にベルグソンが破壞の業を畫策したる動機なり。彼は一擧官學の偶像を倒すべき勇氣と膽略を有したれども、先づ愼重の態度を執りて徐ろに朽敗せる偶像に代ふべき本尊を作るに苦心せり。

六　革命實現の順序

是を以てベルグソンは其の處女作の卷頭に於てカントの主義に對して頗る激越の論を試みたれども、其處には同主義の細目のみを狙撃したるに過ぎずして、卷末の結論に至りたる時初めて同主義の根礎を倒壞するの意をほのめかしたり。蓋しカントの主義は人の精神の實在と絕對との領域に入ることを禁じたればなり。ベルグソンの言に曰く、

『カントは自由を時間の外に放逐して、現象の世界と實在の世界との間に踰え難き墻壁を作らんと欲したり、現象界を擧げて悉く之を吾人の理知に托したれども、實在界に至りては到底之に入る能はずとせり。然れども此の如き區別は餘りに截然にして、實際に於ては案外に踰え易きものなり。』（『意識の直接與件論』原書百八十一頁）

ベルグソンが『此の如き城塞は案外に踰え易し』と語りたる所以は、其超主知的直觀の哲學に依據したるが爲なり。是を以て氏は其學說を成立せしめたる時、初めて反カンチスムの信仰宣言を正式に發表せり。其言に曰く、

『吾人は絕對の裡に存在し、活動し、生活するものなり。勿論吾人の之に對する知識は不完全なりとするも、爲に外面的若くは相對的なりと謂ふ可からず。科學が哲學と相結合して漸進的に發展するときは、吾人は之に依りて實在其物の深奧に到達することを得べし』（『創造的進化』原書二一七頁）

大西洋の彼岸に於てウィリアム・ジェームスも亦『純理批判』に對し輕蔑的態度を示せり。佛蘭西に於てもカントの權威漸く地に墜ちたれば、之に對する不敬不遜の言論は何等の反抗をも招かざりき。『哲學

雜誌』の如きは、『是れ殆ど一切の哲學者の當然到達すべき結論なり』と記せり。

何れにしても、ベルグソンは重要なる點に於てカントに反したれども、氏の心の奥底に於てはカンチスムは尚未だ全く除去せられたるにあらず。

尤もベルグソン以前にカントの弟子にして既に此の如き言動に出でたるものあり。シェリング、フィフテ、ヘーゲルの如きも『絕對』に關する一切の觀想を以て手を觸るべからざるものとはせず、却て之を論議の目的となしたることは、世人の知る所なり。

ベルグソンのなしたる所も畧ぼ之れに過ぎざれども、世人は既にカントの爲に『實在』と『絕對』とを論議せずとの說に倦きてベルグソンの『直觀の哲學』を歡呼洋々の裡に迎へたり。是に於て彼が

反主知論は一瀉千里の勢を以て傳播するに至れり。

七　ベルグソンの中心思想とヘラクリトスの流轉説

されば ベルグソンの新哲學の反主知論たることは、言を待たず。ベルグソンの中心思想は、ヘラクリトスの舊思想より轉化したるものなるや否やは、未定問題なり。或者は之を肯定し、或者は之を否定すれども、ベルグソンの言辭を假りて云へば、前者は後者の「繼續」と謂ひ得べく、ヘラクリトスの比喩に擬して言へば、前者は後者の「新らしき流れ」と謂ひ得べし。此意味に於てベルグソンの流動哲學はヘラクリトスの本流に遡源すと云ふも不可なし。ヘラクリトスの言に曰く、「有は無なり、一切は純乎たる流轉なり」と、即ち

一切萬有は時々刻々流轉變化して、一瞬間も止まることなしと云ふに在り。ヘラクリトスの之に就きて提出したる比喩は世に膾炙する所なり、曰く、『人は再び同じ河に浴せず、蓋し一切は流れて止まず、河川も浴者も亦斯の如し、瞬時も同一に留存せず』と。不斷に流る る實在の河には一切萬事新陳代謝して、片時も停止する所なしとは、距今二千五百年前の希臘哲學者（ヘラクリトス）の既に業に唱道したる所なり。

同じ河の流れが流れ流れて、玆に新らしき流動哲學を生みたるは、亦是れ進化の然らしむる所なり。

兎に角此萬有流轉の裡に生命ありと云ふベルグソンの哲學は『流動哲學』なり。故に在來の哲學を以て『化石哲學』と稱す。氏の中心思想は『生の持續』に在り。是を以て在來の舊說を目して、『命の

拔殼」なりと云ふ。

八　ベルグソンの比喩を使用する理由

氏の比喩に巧妙なることは、前に述べたる所なるが、氏の哲學は其の性質上勢ひ比喩を假り來らざるべからず。氏の弟子ル・ロアは之が爲に辯じて曰く、「吾人が論證よりも比喩を多く提供するを見て怪むことを止めよ、比喩は形而上學に於て自然に使用すべき言語なり。斯學の目的は、言顯し難きものを活躍せしめ、精神の働きを以て、超論理的のものを會得するに在るを以て、特に其の然るを覺ゆ」と。ヘラクリトスの河の流れの比喩も妙を極むれども、ベルグソンの比喩も亦實に巧妙にして、人を魅すること太甚し。此點に於てベルグソンはアリストテレスと大に其趣を異にす。ア氏は哲學上の言論に

於ては比喩を以て大禁物とせり。比喩は『謬想の母なり』『人に幻想錯迷を起さしむる魔術者なり』と喝破して、『眞理は此の如きものを必要とせず、眞理は公々然其の面貌を示すものなり』、之に引き換へて『謬論は常に外裝と假相とに待たざれば、人に信ぜらるゝ能はず』と云へり。然れども今日はアリストテレスの時代を去ること既に遠し。時勢は一變せり、思想界の風潮も、讀書界の傾向も亦一新せり、ベルグソンの有名なる講演を聽き其の著書を讀むに、全篇殆ど比喩に充つと云ふも不可なし。比喩が萬事を占領して、論證の入るべき餘地なく、比喩それ自らが、論證に代れるが如き觀あり。『創造的進化』の書に至りては特に其の然るを見る。佶屈聱牙、乾枯無味の哲學的議論も之に依りて色彩を放ち、生氣を帶ぶるが故に、ベルグソンの哲學書は特に此點に於て大に世人の歡迎する所となれり。

九　ベルグソンの使用する術語の新意義

尚ベルグソンの新哲學に於て、吾人の注意すべき點は、術語を新らしき意味に使用する事なり。時としては在來の用語に全く反對の意義を有たしむることとすらあり。今其の一例を擧ぐれば、持續すと云ふ語は、在來の言語に於ては、同一に留存すとの意味に用ゐられたるものなり、勿論其形態に於ては偶發的變化ありとするも、少くも其實在の根柢に於ては同一に留存すとなせり。然るにベルグソンの新哲學に依れば、持續すと云ふ語は、瞬時も同一に留存せずと云ふ意味に使用せらるゝが故に、『不斷に變化する事を失ふものは、其の一事によりて持續するを失ふものなり』と解釋せらる。蓋しベルグソンの見解によれば、『存在』と云ふことは、『變化』に在りと云ふ、

氏の言に曰く、
『心的狀態そのものが既に變化なり……若し心的狀態にして變化するを止むれば、その持續も亦流轉するを止むべし。』(『創造的進化』原書二頁)
是れ舊思想に囚はるゝ者が、ベルグソンの新思想を解すること能はざる所以なりとす。是故にベルグソンの哲學を能く理會せんと欲せば、須らく先づ其の用語の意義より研究せざるべからず。ベルグソンの哲學に於ては思想のみならず、言語までも新らしき意義を有す。ベルグソンの反對論者は之を非難するに、『明快を缺けり』と云ふ言を以てす。然れどもベルグソンの弟子ル・ロアは、『明快なるものは既に興味なし……哲學は晦澁なるべきものなり、常に深く自省し、高く向上すべきものなるが故に、勢此の如くならざるべからず』と。

十 『創造的進化』の意義

舊思想に囚はるゝ者より見れば、先づ彼の『創造的進化』の語よりして既に不明瞭なりとす。一見すれば勿論奇妙なる言辭には相違なけれども、細に之を檢査し、言語以外、直に著者の思想内に入りて、『創造者は何者ぞ』と叩けば、何者にもあらず、進化それ自身が自から創造するが故に、創造者なり。尚進んで『何物に就て創造的なるか』と問ふも、それ自身の外、何物もなし、何となれば被造物なるものもなく、一切が純乎たる進化なればなり。されば創造者もなく、被造物もなき創造なり。『創造的進化』に曰く、

『人は常に創造さるゝ物と創造する物とを分けて考ふるを例とす、蓋し人の知性は斯く考へざるを得ざるなり。然れども斯の如く考

ふるときは、創造の觀念は全く不明瞭なり。』（『創造的進化』原書二六九頁）

凡て此の如く普通の常識にては解すべからざるもの多し、尤もベルグソンは普通の常識の外に、純粹の良識なるものを設け、之を以て眞の哲學に導く楷梯となしたることを記せざるべからず。要するにベルグソンは所謂『結晶して死せる舊來の思想』の排斥者たると同時に、在來の言語をも破壞したる者なり、是を以て『イコノクラスト』（偶像破碎者）を以て稱せらる。舊哲學の偶像、舊思想の偶像、舊言辭の偶像、舊傳說の偶像等一切を擧げて悉く之を粉碎し去りたる者なり。ベルグソンが思想界の革命兒を以て稱せらるゝも偶然にあらざる也。

第一章 ベルグソン哲學の特色及極意

一 ベルグソン哲學の特色

吾人はベルグソンの哲學を部分的に解說するに先だち、ベルグソンの哲學が如何なる點に於て在來の哲學と相異なるか、又ベルグソンの哲學は究極如何なる結論に歸着するかを概括的に敍說せんとす、是れ茲にベルグソン哲學の特色及び極意と題する一章を設けたる所以なり。

ベルグソン哲學の出發點は、アリストテレスの哲學の出發點と多少の類似點あるが故に、茲に其の異同を辨明し置かざるべからず。

アリストテレスの哲學の出發點は運動なり、ベルグソンの哲學の

出發點は時間なり。時間は運動の最も著しき形式なること、猶ほ運動が實在の最も著しき形式なるが如し。（時間と運動との異同は『時間問題解說の章』に詳なり）

ア氏とベ氏の哲學の出發點實に此の如しと雖、其の之を解釋する方法に至りて全く相反す。アリストテレスは單純なる分解法を取りて、先づ第一運動と運動する物とを區別して、之を本質と偶性とに分け、運動を以て能動より現動に移る過程と見做したり。次に運動其のものを二種の對立狀態に區別して、能動狀態と現動狀態に分けたり。アリストテレスの哲學全體は實に此の基礎の上に築き上げられたるものなり。

ベルグソンは之に反して前記二項を綜合し、否、寧ろ混合して、運動と運動する物とを區別せず、運動のみを取りて運動する物を除

去したるが故に、最早アリストテレスの所謂本質なるものを否定して、運動それ自らを實在としたり。

尙ベルグソンは時間と運動とを同一視して、之を唯一の實在（物の本質）の如くに說けり、故にベルグソンの哲學は純然たる現象主義の哲學と云ふ可し。

本質の性質に至りても、アリストテレスは之を物體と精神とに區別したるが、ベルグソンは之を區別せざるのみならず、寧ろ之を混同したり、一切萬有を心靈的（精神的）と見做し、物體までも斯く見做したる觀あり。

其の結果としてアリストテレスの哲學は自然宇宙の多元論に歸し、ベルグソンの哲學は自然一元論に歸す。然れどもベルグソンの一元論は普通唯物論者の所謂一元論とは異なりて、心靈的一元論と稱す

べき性質のものなれば、唯物論者の説くが如き物質的空間を説かずして、精神的時間を説き、其の中に一切萬有を包容せしむ。斯く一切萬有を包容する精神的時間には種々の名稱を附して或は『生命の潮流』と云ひ、或は『生命の衝動』と云ひ、或は『意識』とも云ひ、或は『持續』とも云ひ、十指屈するに遑あらざれども、兎に角靈的時間を指したるや明かなり。此の靈的時間の內面に入りて之を讀み得る能力を稱して直觀と云ふ。詳しき説明は章の進むに從つて之を述ぶべし。

ベルグソンは直觀と稱すれども、氏の所説を推究して、平易に解説せんとすれば創造的想像力と稱して可なり。先哲は之を『室內の狂力』と稱したれども、ベルグソンは實在の奥底に滲透融合し、生命の核心を把捉して、生命を生活する一種の溫かき知的同情力の如

くに見做し、從來宇宙萬有の計量測定をのみ事とせる冷かなる理知をして之に其位を讓らしめたり。ベルグソン哲學の特色否寧ろ眞髓は實に茲に在りとす。

二　ベルグソン哲學の極意

ベルグソン哲學の極意は何處に存するかを推究するに、吾人は一切萬事の否定に在りと信ず。即ち有（實在）を否定し、眞（眞理）を否定し、因果の原則を否定し、理知の主權を否定し、個體及び事物の多數性を否定し、哲學と科學との關係を否定し、理知と信仰との關係を否定する點に在り。請ふ吾人をして少しく之を詳說せしめよ。

(1)　ベルグソン哲學の極意は有の否定に在り　ベルグソンの哲學

は設令實在の語を使用するにしても、在來哲學者の所謂實在若くは有とは大に其の內容を異にして、其の極意は『萬有皆純粹增成なり』と云ふ一語に歸す。（增成の原語は devenir にして、devenir は『成る』の意味なり、ベルグソンの意を推究すれば、『將成』又は『轉化』の譯字を用ゆるも可なれども、ベ氏は『內的持續は現在の中に過去を引き延ばす記憶の連續する生活なり』とて、例を雪達磨に取りたるを見れば增成の譯字寧ろ適切なり。因て本書には多く此の譯字を用る、時に將成又は轉化の文字を使用す）『萬有は純粹增成なり』と云ふが故に、天地間には既成の物若くは完成の物は一つもなし。隨て同一に留存する物もなし、在るものは將成の物のみにして、それは宛も水の流るゝが如く間斷なく流轉して、暫くも停止せず。其の流轉それ自らが取りも直さず實在なりと云ふ。之を在來の哲學より見

れば、隱見出沒しつゝある現象に外ならず、謂はゞ現象の變化し行く流波の如きものなり。隨てベルグソンの哲學に於ては恆在的人格もあるべき筈なく、固定的本質もあるべき筈なく、發動的原因もあるべき筈なし。ベルグソンは生命を解釋するに、流動そのものを以てし、流動即生命、生命即流動の如くに見做したるが故に、之を在來の哲學より見れば、運動する物なき運動、本質なき偶有性、實在なき存在樣式、永久實在するの期なき永久の轉化と云ふべし。『純粹增成』の語茲に於て乎其の意味を解し得べし。然れども若し果して斯の如き意なりとすれば、全く萬有を否定する說なり。されば『萬有皆純粹增成なり』の語は、『萬有皆非有なり』と云ふと異語同義と云ふべし。故に曰ふ、ベルグソン哲學の極意は有の否定に在りと。

(2) ベルグソン哲學の極意は眞の否定に在り　在來の哲學說によ

れば、眞と有とを元來同じものなりとす、即ち有りの儘吾人の智識に知らるゝものを眞と云ふ。此の定義は深き意味あり、吾人をして少しく之を解說せしめよ。先哲は眞を定義するに、常に適合の二字を以てせり、即ち眞とは物と知（人間の智識）との適合なりとす。眞を構成する上に於て三種の要素あるを記せざるべからず。即ち知らるべき物、知るべき者、及び知らるべき物と知るべき者との關係（換言すれば客體と主體と主客兩體の關係）是なり。何となれば物をして眞ならしむるには、知るべき者（即ち智識）に之を適合せしめざるべからざればなり。然れども此時には物が智識を律して、智識が物を律するものにあらざることを記憶せざるべからず。吾人の智識は物を誤解することあるも、物は之が爲に變ずるものにあらず、例へば石を見て人となすも、石は其の爲に人となるものにあらず、

此の場合知は物に適合せざるが故に、未だ眞を構成せず、石を見て石となすに至りて、初めて物知相適合するが故に、玆に眞を生ず。此の如くなるが故に、眞を構成するとき、物は吾人の智識の尺度となるものなり。されば眞とは有りの儘吾人の智識に知らるゝ物それ自らにして、煎じ詰むれば、『有る所のもの即ち是れ眞なり』と云ふ意義深長の言を知り得べし。（先哲は此の定義法を以て一切の眞を定義したり。例へば眞理を區別して論理的の眞、道德的の眞、形而上的の眞となしたるが、物と人知との適合を以て論理的の眞となし、心と言葉との適合（換言すれば言行の一致）を以て道德的の眞（誠）となし、神知と物との適合を以て形而上的の眞となしたるが如く、何れも適合の二字を以て眞を解釋したり。

要するに『有即眞』の事實は以上の解說によりて略ぼ之を知り得

べし。然るにベルグソンの哲學は前條に述べたる如く、有を否定するが故に、そが必然の結果として眞をも否定せざるべからず。ベルグソンの哲學によれば、萬有は永久不斷の流轉の裡に刻々變化しつつありと云へば、眞理も亦萬有と同じ運命に遭遇して、其の永久不斷の中に捲込まれ、不可知の深淵に沈み行かざるべからず。

されば氏の新哲學の中に、『確立一定の道（說）もなく』『確立一定の方法もなく』『單なる傾向あるのみ』『成績と云ふよりも、思考の方向あるのみ』の語の隨所に認めらるゝも、毫も怪むに足らず。

(3) ベルグソン哲學の極意は因果の原則の否定に在り　ベルグソンの哲學は原因をも認めざれば、結果をも認めざるが故に、無論因果律なるものあるべき筈なし。因果律の語は畢竟無意義なり、凡て生起するものは原因なくしておのづから生起する筈なり。

是故にベルグソンの哲學は動かさるゝ物をも、動く物をも認めす、原因なき絶對的原始の觀念を以て一切萬有を解釋せんとするものなり。

(4) ベルグソンの哲學は理知の主權を否定するに在り　ベルグソンの哲學は本能を以て、理知の上に置かんとす、故に超理知的本能の語あり、ベルグソンは理知を以て原始的生命衝動力、換言すれば、本能的生命衝動力の凝結して縮少したるものとす。或は生命の衝動力が進化の際、切言すれば流轉の途次、殘し置きたる沈澱物が即ち是れ理知なりと云ふ。

是を以て判斷、推論、演繹、歸納等凡て理知の作用に屬するものは生命の流動を凝結せしむるものにして、生命の流動を把握する方法にあらずとす。之を把握する眞の方法は、生命流動の內部に滲入

して、其の不斷に變化する方向を受納し、同感的に之を捕捉し得る本能の直觀あるのみと云ふ。

されば此の超理知的本能は一種の先覺的同感にして、吾人をして實在の内面に滲透せしめ、（ベルグソンの實在と云ふは流動なるを忘るべからず）、物の内部に融合せしむるものなりと云ふ（ベルグソンの物とは既成の物にはあらずして、將成の物なるを記せざるべからず、何となれば前にも記したる如くベルグソンの哲學によれば既成の物は存在せず、存在するものはたゞ將成の物のみと云へばなり）、吾人は其處に於て萬有の刻々に流れつゝある新世界を認むべし。持續若くは時間の直觀とは即ち此の如きものなり。

此の直觀は純粹にして言語を以て言ひ表はすべからず。氏の言に曰く『萬有一點（純粹持續）に歸す、然れども此點は非常に單純に

して、驚くべきほど純粹なるが故に、哲學者は斷じて之を語る能はず、一生之を語ると雖、人に解せられざるべし云々』と。

(5) ベルグソン哲學の極意は個體と事物との多數性の否定に在り

ベルグソンの哲學は結局個體と事物との多數性を否定し去りて、萬有一如となすものなり。隨て自我と非自我、主觀と客觀、原因と結果、父と子、物質と精神との區別の如きは、所謂吾人の『片斷』を希望し、『多岐』を好む要求より出づる幻想にして、實際は此等の個體も個性も皆大なる全壹の中に融合すべきものとなすものなり。

然れども此の如く事物の確定性と多數性とを否定し去るときは、最早關係なるものもなければ、法則なるものもあるべき筈なし。即ち萬法空幻となる譯にして、論理學、倫理學、物理學、形而上學等の法則等一切渾沌たる底知れぬ深淵に沈み入りて、人の精神は其の

深淵に於て何等の事物をも識別すること能はざるに至るの恐あるが如く思はる。

(6) ベルグソン哲學の極意は哲學と科學との關係の否定に在りベルグソンの直觀哲學は、反對論者の言によれば、畢竟創造的想像哲學にして、早晩實驗科學と關係を絶ちて、破鏡の嘆を見ざるべからずと云ふ。げにベルグソンの哲學は一切の先天的研究法に反對して起りたるものにして、理知を重んじ、理知に基く在來の哲學及び科學に反抗し、實在の内部に滲透し、生命の核心を把捉するが爲には、實際本能と直觀を除くの外好適の方法なしと斷言するものなり。

蓋し在來の哲學者、特にアリストテレス派の哲學者の說によれば、哲學なるものは其の出發點を實驗科學の實證的與件に取るものにして、之を抽象し、之を普遍化し、深く之を研究して以て實驗科學の

業を繼續するが爲に努力する學問なりと云へば、哲學的理論なるものは凡て皆普通の科學的實驗より出で來るものなり。所謂吾人の思想は悉く感覺（五感）より入り來るものなりと云ふ基本的原則を應用するものなり。是れ實に在來哲學者、特にアリストテレス派の哲學者の唱道しつゝある所なり。

然るにベルグソンは之に反して、哲學は科學に內在的にはあらずして、超科學的なりと云ふ、何となれば哲學と科學とは二種の異質的學問にして、全然相異なるものなりとし、哲學は直觀によりてのみ、能く實在の內部に滲入し、生命の核心を把捉し、內的生活を生活し、所謂全我を燃燒せしむる生の焦點に觸れ、刻々進化して暫くも停滯せざる生の流轉に入ることを得べしと說けばなり。

ベルグソンの說によれば、科學は實在の外面と物體をのみ取扱ふ

に過ぎず、科學者は自然界の生命の核心に融合すること能はずして、眞甲より之を切伏せざるべからず、自然界の生命を一種の敵の如く見做し、日常生活の實際的要求に應ずる爲には飽迄も征伏せざるべからざるが故に或は之を解剖し、或は之を分折し、或は之を切開し、生命を殺さずんば止まずと云ふ。

是に由りて之を觀れば、ベルグソンは哲學と科學とを生と死との如く全く相異なる二個の世界の如く見做し、之を研究するに當りては全然其の方法を異にせざるべからずとするものなり。ベルグソンの言に曰く『科學の法則はベーコンに依て提出せられたり、自然を制御するが爲に之に服從すること是なり。乍然哲學は制御もせざれば、服從もせず、之に同感せんことを求むるものなり』と。

されば哲學と科學は、ベルグソンが最初之を結合せしめんとした

るには拘らず、氏の說の結果、當然離緣せざるべからざるものなり。ベルクソンの所謂哲學は科學と啻に其の性質を異にするのみならず、其の硏究法をも、又其の目的をも全く相異にするが故に、離緣沙汰は所詮免るべからず、勢ひ別居して各々其根城を守らざるべからず。勿論ベルグソンの哲學は昔の配偶たる科學を否定するまでには至らざれども、少なくとも絕交狀を提出するに至るや必せり。

退て他の一方より考ふれば、科學も亦飽迄も自己を主張し、直觀哲學の反主知主義なるを快とせざるが故に、有名なる科學者ポアンカレは「科學は飽迄も主知主義ならざるべからず、否らずんば科學なし」と言明せり。勢斯の如くんば兩者の絕交は竟に免るべからざる也。

要するにベルグソン新哲學の極意は、理知と離れて哲理を談ぜん

とするものにして、意志の大努力を以て智識を排斥し、飽迄も直觀によりて生の核心を攫み、生の大道に立たんことを主張するものなり。

此は吾人の極端の言にはあらずして、實際ベルグソンの意なりしことは、ベルグソンの感嘆者なるウィリアム・ジェームスの言に徵しても知るべし。ジェームスはベルグソンの內的生命界の改革は由々敷き事件にして、論理の顚覆なりとなし、而して其の改革の號音に應ずべき者は甚だ少數ならんと推測しつゝ自らは其の少數者の中に列して同じく理知を排し、論理を斥くる哲學に與したり。

然るにベルグソンの所說に反對する哲學者は、這の革命的哲學に奇怪なる現象あるを指摘して、曰く、ベルグソンの時間論若くは持續論なるものは一種の理論より出發し、理知の抽象力によりて之を

組立てながら、而も最後に至りて反主知主義の論結を下し、理知の客觀的知識を悉く否定し去らんとするが如きは、出發點と歸着點との相反するのみならず、ベルグソン哲學それ自らの自殺なり云々と。

そは兎も角もベルグソン哲學の極意は、哲學と科學との關係を否定するに在る事は、以上述ぶる所によりて略ぼ知り得べし。

(7)　ベルグソン哲學の極意は理知と信仰との關係の否定に在り、ベルグソンの哲學が科學と相背き、理知と離緣したる以上、宗教的信仰、特に基督教的信仰と破鏡の嘆を見るに至るべき事も、亦呶々の言を待たずして瞭なり。

蓋し之を證明する引證は枚擧に遑あらず、吾人は其中より最も意義深長なる證言を取りて、玆に之を掲げんとす。マリテン氏はベルグソンの進化說に對して千九百十一年九月發行の佛國『哲學雜誌』

に記して曰く、
『理知を冒瀆する哲學は、斷じて加特力教のものにあらず。』と、然り、基督教の信仰は斷じて合理的ならざるものを承諾せざるべし。換言すれば、理知に基かず、理知の與件に正證せられざるものを斷じて承認せざるべし。基督教界の所謂教父學者の格言には『知識を求むる信仰』の語あり。尙使徒ポールの信徒に對する教命の中には『汝等の信仰は合理的ならざるべからず』の言あり。

實に基督教に於ては愚夫愚婦の信仰と雖、全然迷信にはあらずして、少くも其の信ずる理由の幾分を究めざるべからずとす。勿論彼等の信仰理由なるものは外部的にして、識者より見れば取るにも足らざるが如く思はるべしと雖、兎に角彼等は天啓に對する一種の確知を有して、自己の信仰より出づる行爲を正證するそれ相應の理由

なくんばあらず。況んやアウグスチヌスや、トマス・アクイナスや、ボッシュエ等大哲の信仰に至りては、理知一切の光に照らされて、堅實なる論理的證論に證明せられざるべからざるや言を俟たず。蓋し此の二聖一賢は信仰と理知との調和的企業を試みて、千古の大作雄篇を遺したるものなり、トマスの『神學大全』の如きは特に然りとす。

實にトマスの『神學大全』は加特力教的信仰の金城鐵壁なり、加特力教の某教敵が『トマスを取れ、吾れ教會（加特力教）を覆さん』Tolle Thomam, delebo Ecclesiam）とまで叫びたる言に徴しても知らるゝ通り、トマスの神學は實に加特力教會の難攻不落の城塞なりと云はざる可からず。彼の羅馬法皇レオ第十三世が啻に宗教問題のみならず、一切の社會問題までも巧に解決して、一時全歐に其名を轟したることは、今仍人の能く記憶する所なるが、此は法皇がトマスの弟

子を以て自ら任じ、トマスの神學によりて現社會を解決せんとしたるに因ると云ふ。然れども玆に記せざるべからざる事は、トマスの神學及び哲學は全くアリストテレスの哲學より出でたるものにして、トマスは單に之を祖述し、之を完成したるものなり、謂はゞ基督教の洗禮を受けたるアリストテレスの哲學と稱して可なり。是を以てトマスの哲學及び神學は天啓を重んずると同時に大に理知を重んずるものなり。要するにトマスは天啓の光と理知の光とに照らして宇宙萬有を解說し、超然高踏、直に造化主までに肉薄して、人知の力の及ぶ限りを盡したるものなり。トマスの基督に就て論述したる所も亦實に至れり盡せり。されば加特力教會にては基督自らトマスに示現して『トマス、汝の我に就て記したるや善し』(Bene scripsisti de me, Thoma) と稱讃したりとかや。是故に加特力教會は之を以て加特

力敎的信仰の堅塞として、玆に根據を据ゑ、理知と天啓とを兩ながら尊重し、保全し、擁護して、唯理論者と唯信論者との極端なる主義言論に反對しつゝあり。此の職責は加特力敎會が昔より盡し來りたる所にして、今後も永久に盡し行かんとす。

然れども加特力敎の思索家の中には之を解せずして、時勢の變遷に伴れ、時代の要求に應じて、ベルグソンの哲學に其の研究法と其の議題とを假り得べしと信ずる者あり、即ち彼の現代主義者と稱する者是なり。（現代主義者に就ては、『ベルグソン哲學流行の理由』の章參看）

兎に角ベルグソンの哲學は時勢の傾向に從ひ、現代の風潮に伴ふて、時人の好尚に投ずるに相違なしと雖、現今文弱の弊風を矯正すべき理知の力と人生終局の目的を指示する天啓の光とを認めざる事

は明なり。されはベルグソンの哲學によりて『理知を求むる信仰』、『合理的なれと云はるゝ信仰』は、當然否定せらるべき運命に屬するものなり。

論じ去り論じ來りて爰に臻れば、ベルグソン哲學の極意は殆ど一切萬事を否定するに在りと云はざるべからず、即ち實在を否定し、眞理を否定し、因果律を否定し、理知の主權を否定し、個體と事物との多數性を否定し、其上に哲學と科學とを離婚せしめ、理知と信仰とを絕緣せしむるものなり。此點より見てベルグソンの哲學は否定哲學、離婚哲學と稱するも可なり。

第二章　ベルグソン哲學流行の理由

一　斯國にして斯哲學の流行するは一見不可解の現象

ベルグソンの哲學は主知主義に反し、常識に悖りたる哲學なることは、苟もベルグソンの著書を讀む者の直に看取する所なり。元來佛蘭西の哲學界一般の傾向は孰れも皆理知と常識とを尊重し、思想の明快を喜ぶの風今尚同國の思想界を左右しつゝあるにも拘らず、理知を排して直觀を叫び出でたる非常識主義の哲學者（ベルグソン）が、忽ち茲に思想界の流行兒として、天下に喧傳せられ、一世を風靡するに至りたるは、果して何故ぞや。然り斯の如き哲學者が、斯の如き國に歡迎せらるゝは、實に、一見不可解の現象と云はざるべ

からず。故に吾人は本書に於て此の哲學者の主義言論を解說し、敍述するに先ち、先づ第一に此の不可思議なる現象を解說せんと欲す。惟ふに此の現象には幾多の理由あるべきは言を俟たず。但し歐米の新聞雜誌が牽強附會して其周到を誇らんとするが如きは勿論學者の一顧にも値せず。吾人は、極めて妥當なる理由として、之を（第一）哲學界より、（第二）宗教界より、（第三）特に無宗教社會より（第四）尙文藝界より觀察するに留め、國の內外を問はず雷同者流が過當溢美『ベルグソンの著書中には斷じて店曝しや、古物無し』などと吹聽する讚辭などは一切省くことゝなしたり。

二　哲學界に於けるベ氏哲學流行の理由

ベルグソンの哲學が佛國に於て歡迎せらるゝ第一の理由を索むれ

ば、即ち新哲學が、在來の哲學者等の徒らに勃萃理窟空論のみを事とせる反動として起りたるに因るものなれども、就中佛蘭西の思想界が既に倦厭を催ほしたるカンチスム（カント主義）に反して、ベ氏の猛然として起りたるに原因す。思想界の風潮が漸く形而上學に向ひたると同時に、天下の氣運、人心の趨勢も亦益〻生命問題に傾きて、カントの『純理批判』の如き乾枯無味なる哲學には最早飽果てたるに、同國の官學のみは依然カントの哲學を宗として天下の人心を壓せんとするが如き傾向を示したるが故に、年少氣鋭の哲學者は憤慨に堪へず、ひそかに之が復仇の策を講じ居たり。自由!!! あゝ汝の名は美なる哉、友愛、平等と共に汝は我國の三位一體なり。政界は既に幾回か汝の爲に改造せられたり、學界も、哲學界も亦汝の爲に改造せられざるべからず、とは是れ昔より自由に飢ゑたる國（佛

蘭西」の青年哲學者等の叫びなりき。『カルダゴ亡ぼさゞるべからず』(delenda est Carthago) のそれならで、『カント倒さゞるべからず』(Il faut renverser Kant.) の語は、絶えず彼等の口を衝いて起りたり。機の漸く熟するや、『然り、カントを貫かざるべからず』(Oui, il faut traverser Kant.) の一語最も力強くソルボンヌ校に叫ばれたり。かくて哲學界革命の機運愈ゝ熟して、茲に新時代の預言者新哲學の創設者一人を得たり、即ち是れベルグソンなり。實にアルカン書肆發行の哲學書目を見ても知らるゝ如く、同國の大學に於て幾多哲學者の反對あるにも拘らず、斷乎として形而上學問題に沒頭したる者は、實にベルグソン一人なりとす。

是に於て乎ベルグソンは頓に頭角を顯はし、その名聲日に月に加はり、其の講演は滿場立錐の地なき盛況を呈し、其の著書は洛陽の

紙価を高からしむるに至り、未だ哲學のＡＢＣをも解し得ざる巴里流行界の紳士淑女まで先を爭うて聽講に趨り、氏の講堂は此等社交界の人々にまで滿たさるゝことゝなりたり。思想界に於ける流行兒の名偶然にあらず。

然れどもベルグソンは其の初め尙未だカントに因はれ居たり。何となれば、彼はカントの主義に反對して起り、カントが悟性の獨立を誇張し、形而上學と精密科學とに對して甚大の打擊を與へたるを攻擊しながら、彼も亦矢張りカントの如く、理知の形而上的效果を否定し去りたればなり。是を以て彼は哲學者として形而上學を建設せず、藝術家として形上學を建設するに至れり。哲學界の革命兒として斯の變態の形而上學者を見る、また異とすべし。

三　宗教界に於けるべ氏哲學流行の理由

ベルグソン哲學の歡迎せられたる第二の理由は、此の新哲學者の公然天下に標榜して起りたる一見如何にも高尚らしく又雄大らしき精神主義的言論が、宗教界の一部人士、就中現代主義を唱道する宗教家輩を魅せしめたるに在り。彼れの哲學は如何にも人生を超越したる絶大努力の結果らしく思はれ、人心をして觀念以上に卓然高踏せしむる不可抗的生命の潮流を取扱ふもの丶如き觀を呈したるが故に從來地上の生命、蜉蝣の生命、朝露の如く、風前の燈の如き生命をはかなみ居たる人々をして、忽ち玆に一の新らしき生命界に引き上げられたるが如き心地をなさしめたり。特に彼が宗教家をして熱狂せしめたる所以は、彼は初より自由の好文字を翳して、宿命論に

反對し、精神主義の擁護者として、粗笨なる唯物論を排したるが爲なり。實に彼は現代の二大謬論たる宿命論と唯物論とに對しては極力之が駁撃を試みたり。彼が著書の中には隨所に之が駁論を見るべし。是に於て乎日頃精神主義の教育を受け、精神主義の宣傳に務めつゝある宗教家等は、ベルグソンが此の如く精神主義の爲に盡す所あるを見て、如何にも己等と同じ精神主義者なりと思ひ、『是れ亦吾黨の人なり』と叫び、大早計にも拍手喝采して彼れの精神主義を歡迎するに至りたり。其の結果直に彼れの主義を採りて以て新カトリシスムを呼號せんと欲する現代主義者をさへ出すに至れり。是れベルグソンが宗教界に於ても其名を博したる理由なりとす。

然れども仔細にベルグソンの主義を檢覈すれば、彼れが一元論的先入は彼れの思念を支配して、動もすれば精神と物體、自由と必至

必然性）との本有的區別を消失せしむるに至りたり。即ち彼の普遍的生命潮流の一大海に之を沒入せしめて、其の涓滴をも識別することと能はざるに至らしめたり。

他の一方に於て彼れが反主知論的先入も、亦彼をして漸次に精神を毀損して、物質の名譽回復を計るが如き言論に出でしめたれば、早計にも彼によりて唯物論の破産を期したる宗教家をして事の意表に出づるを見て、徒に茫然たらしむるの滑稽を演出したり。

實際ベルグソンの主義言論は、人間の高尚なる要求（渴仰）を推奬すれども、人間の理知（智識）を卑下するの嫌あり、然るに宗教社會に於ては理知を以て其の宗教的信念の基礎及び支柱となし來れり。是故に『信仰は智識を求めつゝあり』の語あり（Fides quœrens intellectum）。彼の信仰の力を力說せんが爲に、故さら人知の薄弱なる

を示さんと欲し、『微弱なる理知、默せよ』と叫びたるブレーズ・パスカルの語すら、弱き信仰の徒をして躓かしめたるほどなりしかば、ベルグソンの反理知主義の言論の如きは、此種の弱信者をして倘一層失望せしめたり。

然れども、宗教社會の一部人士に失望を來したるベルグソンの主義は、他の一部人士の歡迎を受くるに至りたるこそ奇怪なれ。蓋し佛蘭西には內心宗教的信念を有するに拘らず、成立宗教の形式を採らずとの名の下に、信條をも、定理をも、禮拜をも遵奉せざる漠然たる宗教信者頗る多し。此等の人々は理知を離れて、單に感情的及び神秘的直觀寧ろ想像に任せて、信じたき者のみを信じ、一種のプラグマチスムを奉じて、放縱不羈の生活をなしつゝあり。而してベルグソンの直觀哲學は、此種の人々に今倘大に歡迎せられつゝあり。

四　無宗教社會に於けるベ氏哲學流行の理由

ベルグソンは高尚なる精神主義を鼓吹する裡にも、或無宗教的思想を混ず、其の思想は神を信ぜざる精神主義、即ち佛國宗教家、特に出世間的宗教家の所謂俗化精神主義なるものに外ならず。而して此思想は平素極端の議論を吐きて現時社會に多數を占めつゝある俗化精神主義者の議論と吻合する處あるを以て、ベ氏哲學は遽然として天下を風靡するに至りしなり。

ベルグソンがプラトーンの神、アリストテレスの神を蔑視したる態度のみにては、未だ氏の意見を明に知るを得ずと雖、深く其批判の眞意を尋究し、言外に髣髴せる思想の奧底を推定して論斷する時は、氏の宗教なるものは――但し宗教の語を以て氏の主義に冠するを

得べしとせば―略ぼ之を推知するを得べし。吾人は漫りに氏の心を忖度するを欲せずと雖、氏の宗教は、一見誰にも解り易き語を以て言へば、生命教なり。之を從來の宗教的名稱を以て言へば、萬神教又は神祕教なり。昔の萬神論者は一の大靈が世界の中心に潛伏して、之を運動せしめたりと信じたり。故に『精靈大塊を動かす』の語あり、(Mens agitat molem)。粗笨なる萬神論なりと云はゞ云へ、兎に角正直なる萬神論なり。其の質朴なる言、其の天眞爛漫の語、眞に愛すべし。後世に至り、精靈に代ふるに、生命の語を以てし、其の生命が、或は花となりて開き、或は鳥となりて歌ひ、或は動物となりて動き、或は人間となりて考ふと云ふが如くに解釋したるが、ベルグソンに至りては、多少之を新らしく解説して、『生の流れ』、『生命の衝動力』などの語を用ゐたるが、其實際の内容に於ては、同工異曲

の言論と稱して可なり。此種の思想を喝采する人々古來甚だ多きを占む。漂渺たる想像を樂しみ、雲煙糢糊の空想を辿りて、如何にも大思想なるかの如くに思ふもの、世上比々として是なり。彼等は精密なる科學的知識を嫌ひ、儼然たる理論を忌み、一切の智識作用を蛇蝎視して、春宵朦朧の中に生活せんと欲す。此種の人々より見て、ベルグソンの直觀の哲學、反理知主義の哲學の歡迎せらるゝ、毫も怪むに足らざるなり。生命は思索すべきものにあらず、生命は生活すべきものなり、理知は其の取扱ふ一切のものを固體化するの嫌あり、宜しく直觀によりて實在に滲透融合せざるべからずなどゝ說く所のベ氏の哲學は、彼等の好餌なり、宜なる哉此の新哲學の彼等に激賞せらるゝや。因に曰ふ、吾人は萬神論者を以て無宗教社會の部類に列したるは、深く理由の存するあり。今玆に之を詳しく說明す

るの遑なければ、單に其宗教學者の知言を掲げて、讀者の熟考に委せんとす。そは他にあらず、『萬神論者は頓て是れ無神論者なり』と云ふ言是なり、吾人は之を以て意義深長の言とす。

若夫れベルグソンの哲學の說くべき新道德に至りては、吾人は未だ之を聞くを得ず。道德的危機に瀕しつゝある今日、彼は『イスラエルのドクトル』として、否、『イスラエルの救濟主』として仰望せられつゝあれども、彼は未だ之に就て其の抱懐を發表せず。道德の基礎を築かざるのみならず、未だ其の輪廓をも示さゞるが故に、吾人は固よりやがて出で來るべき道德の如何なるものなるかを知る能はずと雖、氏の新哲學の主義より推論すれば、人格的の神を認めざる新哲學の說くべき道德は無論宗教道德なるべき筈はなし。科學をして眞理の觀念より脫去せしめ、宗教をして神の觀念より離脫せし

めたる彼れの哲學は、道德をして義務の觀念より逸脫せしめんことは、鏡に懸けて睹るよりも瞭なりとは、某出世間道德家の推測しつつある所なり。然れども刻々に進化し行く生命の哲學なれば、如何なる道德を現出するやも知るべからず。されば吾人は之を將來に徵するより外なし。吾人は只だ無宗教社會に歡迎せらるゝ哲學より演繹し來る氏の道德說も、亦無宗教社會に歡迎せらるべきことを一言したるものなり。

五　文藝界に於けるベ氏哲學流行の理由

ベルグソン哲學の流行の理由を文藝界に就て求むれば、彼れが現代の哲學界をよろこばすべき思想を盛るに、艶麗人を魅する文章を以てするに歸せざるべからず。吾人は彼れの文章に就ては緒言の中

に既に其の一斑を述べたれど、尚ほ少しく遺を補はん乎。彼れの文章を通讀するに、時としては堂々たる學者の風丰ありて、俗耳を驚倒するの概あることあり。此點に於て彼は嘗て卓絶したる科學者たりし當時の遺風を存して、今猶科學的色調を示すものと云ふべし。時としては又嚴正なる理解力に長け、徹底したる批判力に富みたる鉤幽剔微の筆致を示すことあり。此點に於ては彼は最初卓越したる數學者たりし時の俤を留むるものと謂ふべし。然れども彼れの文章は常には艶麗愛すべく、清婉喜ぶべく、春華の如く燦然章を成す所もあれども、絢爛の極平淡に歸する所も亦多し。彼が比喩に妙を得たる事は、吾人既に之を語れり、彼が詩才に長けて詩人的哲學者の稱ある事も、他に屢々之を記せり。要するに彼れの文章は藝術家の文章なり。彼れが文章の誘引的にして暗示に富み、人を魅する强大

なる力あるもの、實に之が爲なり。『音樂の如し』とか、『鳥の歌の如し』などの讃辭も之より出づ。宜なる哉彼れの哲學が婉麗なる文に盛られて、文藝社會の大歡迎を受けつゝあることや。

昔の學者は文學的哲學を排したり、之と同時に美術的觀念を哲學に混ふることを太く嫌棄したり。然るに今日の學者は多く叙述を事とし、描寫を主とするが故に、巧に畫かれたる物象をよろこぶの傾向あり。佛蘭西の如く明確雄健なる文章を貴び來れる文界に此の如き傾向の生じ來りたるは、確に墮落なりと叫ぶ者あり。墮落か向上かは知らざれども、兎に角今日の文藝社會一般にはベルグソンの文章のよろこばるゝことは爭ふ可からざる事實なりとす。

尤も彼は獨創の妙思と天來の奇想と婉曲の筆致とを以て故さら讀者を引きつけんとする跡なきにあらず。彼れの辯も亦此の妙趣を具

ふるが故に、彼れの講堂が常に傍聽者を以て滿たさるゝ一因も亦茲に在りと云ふ。

然れども彼れの文を以て徹頭徹尾絕妙なりと謂ふべからず。中には隨分不透明の文章もあり、難解の箇所も少からず、眠氣を催ほさしむる節もありて、『時にホメロスも眠れるか』と思はしむることもあり。往々系統理知を缺き、空漠にして捕捉し難き點あるを見るに至りては、所謂論理家の文章にはあらずして、藝術家の文章と云ふべし。

さりながら藝術家として想像の奔るが儘に空想の世界を展開し、超然實驗世界の上に高踏せんと欲する人々の憧憬を滿足せしむるは他に比倫を見ず。是れ亦人を魅する力の存する所なり。

佛國に於ける時代文藝が此の如き方面に傾き來れるは、論理學と

實體學との素養を缺くが爲にして—學校に於て之を敎へざるが爲なりと云ふ—之が爲に天馬空を駈けるが如き想像の文を見て、直に之れ天地の至文なり、是れ千古の妙文なりなどと絶叫するに至るは、是れ亦デカダンの兆なりと言ふ者あり。

兎に角今日の文壇は明瞭的確なる擬古的文章に飽き、雲烟漂渺たる想像的文章をよろこび、輕浮なる想を逐うて、昔時の定理や、信條や、永遠の眞理（宗敎上の眞理）を排し、詩人の夢を辿りて、科學的及實驗的證論を斥け、自家撞着の議論も、前後不調の文章も之を奇論と稱し、之を妙文と讚しつゝある者多く之あるは、實際當眼の事實なり。而してベルグソンの反主知主義の哲學は之を矯正せずして、之に投合するも、亦爭ふ可からざる事實なりとす。ベルグソンの哲學は此のデカダンスの原因たると同時に結果なりと云ふ議論

は別問題として、兎に角これが現時の文藝界に歡迎せらるゝ理由なる事は、拒否すべからず。

以上四種の理由によりてベルグソン哲學が何故今日の社會に歡迎せらるゝかは、略ぼ之を推知するを得べし。

第三章　時間問題の解說

一　ベルグソンの所謂時間の觀念

ベルグソンの所謂時間の觀念は、ベルグソンの哲學全體を解する上に於て極めて必要なり。何となればベルグソンは時間を以て其の新らしき哲學主義の中心點となし、樞軸となしたればなり。

一見すれば哲學全體と宇宙萬有の解釋とを時間の觀念に基かしめんとするが如きは、弄巧に過ぎて、逆說とも思はるれども、退て深く考ふれば、殊に彼の逍遙學派が其說を『運動』の觀念に築き上げたるを思合はすれば、ベルグソンの說は毫も怪むに足らず、何となれば前者の運動の觀念は、後者の時間の觀念と酷似すればなり。但

だ精密に兩者の區別を點檢すれば、運動は吾人の官能を以て容易く感識し得べしと雖、時間に至りては自然界の現象中最も不明瞭にして又最も不可思議なるものゝ一なることは先哲も之を認めたり。そは兎も角も、吾人は今玆に出來得る丈け明瞭的確にベルグソンの時間に關する研究の結果を解かんと欲す。

時間は空間の對偶なれば、其の意義を明に究めんとするには、二者の觀念を對照するを必要とす。在來の哲學によれば、時間も空間も連續せる可測的分量なりとすれども、空間の部分を以て同在的及び共存的となすに反して、時間を以て繼續的及び流動的なりとす。

然るにベルグソンの哲學に於ては、空間を定義するに、分量と等質性と、隨て可測性とを以てす。之に反して時間を定義するには、純粹なる特性と異質性とを以てす、即ち、一切の分量と等質性とを

排除するが故に、不可測性のものなりと云ふ。

ベルグソンの時間の觀念は啻に在來の哲學思想に反するのみならず、實驗科學と吾人の常識と共に相容れず。何となれば先づ第一測定すべからざる純粹時間は、到底の常識にて意識することを得ざればなり。次に時間を測定するは愚か、精確なる計算によりて之を豫言することさへ、或る科學は日々ベ氏の觀念と反對の事實を示しつつあればなり。

然れどもベルグソンは科學や常識の所謂時間なるものを以て迷想なり、空幻なりと斷じ、飽迄も眞の時間は測定し難きことを力說す之に關するベルグソンの說は『意識の直接與件論』にあり。吾人は之を闡明するが爲に、左に分量と特性（性質）、數と空間、空間と等質、時間と運動、特に時間と異質との異同を辨明して以てベルグソ

ンの時間問題の解說に資せんとす。

二　分量と特性の問題

ベルグソンの時間の觀念が如何なる點に於て在來の諸說と相異なるかを解說せんが爲には、在來學者の分量と特質とに關する觀念を簡潔に敍說するの必要あり。

分量とは、文字上の意味より云へば、斯々の物の大きさは如何、其の數量は幾個幾許ありやなど、目標となるもの、即ち寸法又は數量に於て、其の大小と多少とを決せらるものなり。

分量は普通之を定義するに、等質若くは同種類の部分に分割し得べきものを以てす。若し此等の部分が、分割前既に差別的のものなれば、之を不連續量若くは數と云ふ、例へば十人、林檎十二個の如

き是なり。若し又此等の部分が、分割前に無差別的のものなれば、之を連續量と云ふ。空間に於ても、時間に於ても。

吾人は同種類の部分に分割し得べきものと云へり、何となれば水の酸素と水素とに分け得べきは、分量を語るものにあらず、馬と騎士の總合は、數を成すものにあらざればなり。

特性は之に反して、物を或は其の本有に於て、(例へば美に於けるが如く)、或は其の作用に於て、(例へば德に於けるが如く)、完全にする存在樣式なり。例へば力は物質の特性。健康は生物の特性。理知は精神の特性の如き是なり。

是に由りて之を觀れば、分量と特性、如何程と如何樣との間には、如何に深大なる區別あるかを知るべし。特性は似不似を決し、分量は等不等を決す。

然るに一方より考ふれば特性にも程度あることを記せざるべからず、換言すれば強度の差あるなり。而して凡て強度は増減し得べきものと思はるゝが故に、之を計量することは、自然の事なり。既に計量することを得べしとせば、分量のあるや明なり。

若し又直接に計量すること能はずとせば、少くも間接に之を計量することを得べし、即ち物體の上に顯はるゝ著しき結果を見て計量することを得べし。例へば溫度ならば其の膨張力の寒暖計の水銀に及ぼす結果によりて之を計り得べきが如き、其の一例として見るべし。學者は他の精巧なる方法によりて自然界の力の強度をも計ることを得たり。(光、音、磁氣、電氣等即ち是なり)

特性は強度なれば、同種類の他の強度と比較して之を計ることを得べし、例へば二力相平均すれば、之を見て相等しと云ひ、其間に

優劣あれば、優れるものを大なりと云ひ、劣れるものを小なりと云ふが如き類是なり。

尚變化ある強度の特性ならば、特性それ自らの間に比較を立てゝ之を知ることを得べし、例へば現在の苦痛は先に實感したる苦痛の程度に比較して之を知り得るの類是なり。此の測知法は之を前記の諸法に比すれば、多少精密を缺くの嫌あれども、苦痛の如きは人多く此法によりて測知す。故に初期の苦痛に比して數倍強度を增したりとか、減じたりとかと云ふを常とす。

由是觀之、可計的特性、即ち分量を具する特性あるが如く思はる。隨て分量には延長あるが如く、強度もあるべき筈なり。さればベルグソンは如何にして強度が大きさと同化するかの方法を忖度して曰く、

『此の困難を避けんが爲に、普通の例に從ひ、分量に二種あるを區別す、一は延長ありて計量し得べきものにして、他は強度ありて寸法なしと雖、他の強度と之を比較して、大なりとか、小なりとかと云ひ得べし。蓋し之によりて此の二形式の大さ（人は常に此の二者を大さと稱するが故に斯く云ふ）に何等かの共通點ありと認めて、等しく增減し得べきものと言明すればなり。然れども大さの見地より觀れば、延長と強度、延長物と非延長物との間には何等の共通點もあり得べからず。何となれば、一が他を包容する時、前者を後者より大なりと言ふを眞とすれば強度の如く最早包容者も被包容者もなきに至りて尙分量とか大きさとか言ふこと能はざればなり（『意識の直接與件論』二頁）

然れども常識も哲學も共に其間に共通點ありと云ひ、その共通點

可分性是なりと云ふ、(少くも思想の上に於ては可能なる潛勢的可分性是なりとす)、何となれば可分性に數種ありて、分量の種類は可分性の種類によりて數へらるればなり。

然り而して可分性は、如何なる樣式に於て表はさるゝも、(即ち實際に於て分けると思想の上に於て分けるとに拘らず)、之を分量そのものと見做し得べしと云ふ、是れ在來の哲學者の皆共に承認する所なり。

是に由りて之を觀れば、實際連續量には二種の別ありて、一は延長的分量と云ひ、(時間若くは空間に於て延長する分量)、二は強度的分量(特性に於て強度ある分量)と云ひ得べしとは、是れ亦在來哲學者の說く所なりとす。

然るにベルグソンは後者即ち強度的分量を否定したり、此は特性

を以て單純にして、一切の分量を排除するものと見做したるが爲なり、隨て純粹に特性的のものたる時間の可分性をも否定するに至れり。

勿論時間の特性的なることは、疑を容るべからず。例へば時候の良否、人生の快不快等に徵すれば、直に之を知り得べし。此の如く、凡て持續中の諸瞬間は極めて變化多き内的特性によりて區別せらるるものなり。然れども之が爲にベルグソンの如く『時間は特性なり、故に分量にはあらず』と論結し得べきや否やは、尙大に硏究すべき問題なりと思はる、何となれば見地を異にして之を觀察すれば、特性とも云ひ得べく、分量とも云ひ得べきが如し、勿論本有的には特性たるに相違なきも、偶有的には分量と稱し得ざるにあらず。

吾人は今玆にベルグソンの說を批評する意はあらざれども、氏の

說を解說する上に於て、在來の哲學者の說と之を對照するの必要を感じたるが故に、特にこゝに之を對照したるものなり。尙以下にも之と同じ解說法を取らんとす、何となれば時間問題はベルグソン哲學の中樞なればなり、ベ氏は之を鍵として自由意思問題をも解決し、物心相關問題をも解決せんと欲したればなり。

三　數と空間

ベルグソンは數と空間とを同視し、數の觀念と空間とを離るべからざるものとなすが如し、即ち人の精神は空間によりて數を構成し、空間の中に數を置くと云ふ。

吾人は之を解說するが爲に、常識より議論を立て、ベルグソンの說が如何なる點に於て吾人在來の觀念に異なるかを知らしめんと欲

す。

先づ兒童の初めて物を數ふるが如く、球や若くは他の物具を用ゐて數ふるとせば、如何にも人は空間を以て數を構成すると云ふを得べけれども、然しながら非延長物を數ふるときには、人の精神は此の如きものを離れて、物體外に超然たるを記せざるべからず、例へば東洋の道德にては、七情を說き、西洋の宗敎にては七祕蹟（機密）を敎へ、アリストテレスの哲學にては十範疇を立つるが如き是なり。七情と云ひ、七祕蹟と云ひ、十範疇と云ひ、之を數ふるに當り、果して空間と關係ありや。人が其の生存し來りたる年數や、月數や、日數などを數ふるときには、此等の數を空間には置かずして、時間に置くを常とす、設令此の時間が人の生存し來りたる方處や空間を貫いて流るゝと雖亦然りとす。

尚一歩を進めてベルグソンが數を押込めんとする空間が、實際數を包容するとするも、そは空間が其の包容する物體の分量や、容積や、廣袤などに之（數）を假り取るよりも、寧ろ觀測者の眼に物と物とを著しく區別せしむる特性の對照や變化などに之を假り取るが爲なり。何となれば空間より此等の特性的區別を除去して、形や、色や、音などを取り去れば、空間は直に變化なき一様の空漠たる世界と化し去りて、其中には最早數を見分けることさへ叶はざるに至るものなり。果して然りとせば、人は延長に依るよりも、寧ろ形狀其他の特性に依りて數を數ふるものなりと云ふべし。然るに特性物を數ふるには、必ずしも之を空間に押込むの必要なし、少くも之を投じ入れたる空間を計るの必要なきものなり。例へば吾人は植物や動物の種屬を數ふるには、如何なる場所をも測るの必要なし。若夫

れ苦や、樂や、思想や、志望などを數ふるに至りては、尙更に空間に待つの必要なし。故に普通の常識と在來の哲學とによれば、數は如何なる方面より見ても空間を逸出するものなり、分量よりも特性を司配し、空間よりも時間を司配し、物體よりも精神を司配するものにして、ベルグソンの閉込めんとする狹隘なる囹圄を脫去せんとする傾向あり。

以上在來の解說に照らしてベルグソンの說を見れば、ベ氏の說は容易に吾人の理解し得ざるものなるを知るに難からざらん、例へば、『吾人は必ず數を空間に局限す』（數をして必ず空間の場所を占めしむ）とか、『諸ろ〳〵の單位はそが空間に在るが爲に分明となる』とか、其他『意識の直接與件論』六〇頁より六八頁に至る間に吾人の耳聰れざる言頗る多し。今一々之を掲げて解說するに遑あらず。

四　空間と等質

ベルグソンの説に曰く、『若し空間を等質なりとせば、之を逆にして凡て等質にして且無定限なる中間物は皆空間なりと云はざるべからざらん。何となれば等質性は一切の特性を缺如するものなれば、等質に二形式を區別すべき謂れなければなり。然るに一般の説によれば、時間は空間と異なれども、而も之と同じく等質にして且無定限なる中間物の如くに見做せり云々。』（『意識の直接與件論』原書七五頁）ベルグソンはこれより論結を下して、『科學及び常識の所謂時間なるものは等質の時間なり、故に空間に外ならず、眞の時間にはあらざるなり』と云へり。

此の説を解説するには矢張り在來の定説を掲げ、ベルグソンの説

が何れの點に於て在來の定說と相異なるかを研究せざるべからず。

在來の定說によれば、等質的分量とは、不連續量（數）をも、連續量をも指す語なれども、前節に於て不連續量（即ち數）の空間と同一視すること能はざる事を敍說したれば次に吾人研究の對象とすべきは、連續量の一つあるのみ、茲に連續量とは、全然無差別的部分より成るものなり。

日常經驗の示す所に據れば、等質的連續量には二種ありて、一を倶在的連續量と云ひ、一を繼起的連續量と云ふ。前者は混同せる不決定的狀態に在りながらも、其の成分を悉く同時に具するものにして、後者は間斷なく流れ行くに從つて徐々と其の成分を備へ行くものなり。倶在的連續量は空間と同一なり。

かく在來の定說は空間を以て等質的連續量と同一なりとすれども、

不連續量と同一なりとするものにあらず。（ベルグソンの論結の在來の定說と相異なる所正に此點に在り）之を證明するが爲には、時間、移動、（轉位）辯論などに關する日常の經驗に徵するを以て足れりとす。

抑々時間とは定まれる二つの瞬間に流るゝ中間的瞬間より成るものなり、移動とは通過したる距離より成り、辯論とは口より發する言葉より成るものなると論無し、而して此の如き繼起的分量の部分は斷じて之を俱在的に（同時に）見ること能はざるものなり。同一なる空間の二ツの部分ならば、一眸の下に俱在的に展開すれども、同一なる時間の二ツの瞬間や、同一なる移動の二つの行程や、同一なる辯論の二つの言葉などは、斷じて之を俱在的に見聞すること能はず。而して此の如き多くの部分の俱在的に存在するの能否は、決

して空間や、時間や、移動や、辯論等の偶有性のものにはあらずして、實際其等の本有性のもの（本質的のもの）なり、是に於て乎倶在的分量と流轉的分量即ち空間と時間との相異なるを見るべきなり。果して然りとせば、等質的及び繼起的分量は空間にはあらずして、空間とは本來其性を異にするものなるを知るべし。是れ實に在來の哲學及び科學の說く所にして、日常の經驗の吾人に敎ふる所なりとす。

之をベルグソンの說く所に對照すれば、氏の論結の何れの點に於て日常の實驗と相異なるかを知り得べし。

五　時間と運動

在來の哲學より見れば、ベルグソンは時間と（時間と共に行はる

る）運動とを同一視するが故に、分と全を混同するが如くに思はる。ベルグソンの說に據れば、意識的運動のみ時間を表示するものなりと云ふが故に、心理的運動若くは生命の運動なるものと時間とを混同し、頓ては物質界の時間をも否定するに至らんとするが如き觀あり。

勿論在來の哲學に於ても、運動なければ時間なしと云へども、爲に時間と運動とを同一視するものにあらず。單に時間は運動の尺度なりと云ふのみ。

茲にベルグソンの哲學が如何なる點に於て在來の哲學と相異なるかを示す解說として、アリストテレス以來の同派哲學者の時間と運動とに關する所說を簡單に紹介せん。

（一）運動は同一の時間内に在りて遲速の別あり、故に先づ此點に

於て時間と相異なり。

（二）時間は運動の尺度なり、何となれば其の持續を計ればなり、然るに計るものと計らるゝものとはおのづから別あり。

（三）時間が尺度となる爲には、須らく一樣にして、運動の如く遲速の別あるべからず。

（四）運動の反轉性（其の出發點に復歸する事）は之を意識することを得べきも、時間の反轉性は不合理なり、何となれば時間は一たび去つて復た歸らざればなり。

此等の區別に照らして時間と運動とは同一にあらざることを知り得べし、然れども時間は運動に隨行するものなれば、時間と運動とは相伴的なりと言ひ得べし。

されば或一定の時間內に於て時間の分量と運動の分量とを相離す

べからさる二面の如く想像に浮ぶることは、必ずしも爲し難き事にあらず。

兎に角時間は運動を計るものにして、計るものと計らるゝものゝ區別ある如く、時間と運動とは同一視すべからざるものなりとは、在來の哲學の說く所なれば、時間と運動とを混同するベルグソンの說が何れの點に於て在來の哲學の說に異なるかは、以上の言に徴し略ぼ之を知るを得べし。

六　時間と異質

ベルグソンは時間を定義するに異質的特性を以てす、切言すれば、純粹異質性を以て時間を定義せんとす。

ベルグソンの時間に就ての觀念を記せば、左の如し。吾人の意識

より『時間』なる要素を拔き去ること能はず、眞の精神生活は『時間』その物より成り立つものなり、玆に謂ふ時間は數學的の時間や、空間の觀念に感染したる時間などを指すにはあらずして、實生活其物の要素たる現實の時間を云ふ、而して此の如き時間は異質的なりとすと。

ベルグソンば此の如き時間を稱して『持續』と云へり。故に『純粹時間』『純粹持續』の語は屢〻氏の口より繰返さる。

ベルグソンの說を仔細に考察して、前後を對照するときは、初め時間は計量することも、分割することも叶はざる純粹特性として意識せられ、後に異質的特性即ち一切の類似性を脫去する永久的及び本然的變化として意識せらると云ふ。

そは兎も角、吾人は今玆に此等の議論を詳しく解說するの意なし、

何となれば餘りに纖細に亙りて、專門家の智識を具するにあらざれば、容易に解し得ざればなり。然れどもベルグソンの所謂『時間は異質的なり』の語だけは、一と通り之を解說せざるべからず。

抑〻異質性とは何ぞや、ベルグソンの說によれば、各瞬間は新たにして、前瞬間と何等の類似點をも有せざるものなりと云ふ、常識によれば、此の如き觀念は容易に意識すること能はずとす。何となれば吾人の生命の各瞬間より一切の類似點を除き去れば、頓て時間より持續をも取り去るに至ればなり、蓋し普通の見解によれば、持續と云ふ語は『同一に繼續す』との意味なり、而して刻々に新らしく變り行くと云ふことは、變化なり、持續にはあらざるなり。然るにベルグソンの所謂時間には何物も同一に繼續するものなし。本質的根柢が種々樣々の樣式を以て同一に繼續すと解釋することも能は

ず、何となれば彼は恒久的の本質其ものを否定すればなり。故に所謂持續すとは、間斷なく變化し、刻々に變化し、全然變化すと云ふに在りて、常識より見れば正しく是れ持續せざる事なり。ベルグソンの說の普通人に解し難き所以實に玆に在り。

第四章　自由問題の解説

一　ベルグソンの自由問題解決法一斑

ベルグソンは時間若くは持續の新定義を提げて、形而上學上の難關たる人生の自由問題を解決せんと試みたり。

ベルグソンは吾人の自由の動きつゝある心理的持續より、時間の裡に連續的に展舒する可測的數量を一切排除したる後、實に左の如き解決法を取りたり。

ベルグソンは先づ自由意志論者と非自由意志論者とを比較したり。時に後者は主張して曰く、吾人をして選擇に躊躇せしめ、最後に意を決するに至らしむる諸ろ〳〵の理由の戰ひの中に、勝を制するも

のは、必ず其の最も強き理由なりとす。故に曰ふ、自由は有り得べからずと。前者は之に反して曰く、斯る理由戰に於て所謂其の最も強き理由も、畢竟吾人の自由の選に依らざれば、然ること能はず。故に曰ふ、自由は依然留存すと。

ベルグソンは兩者の意見に對して斷案を下して曰く、此兩様の言論は孰れも道理に合はず。何となれば彼等は問題の提出法を誤れり『一は之を數に於て他は之を空間に於て提出すればなり。』諸ろ〱の理由の相錯綜すと稱するは、是れ數となすなり。理由戰の相繼で起ると稱するは、空間を豫想するなり。

又心理的持續は單純性のものなるが故に、其裡には理由（動機）の多數性もなければ、各種要素の可分性もなし、隨つて兩論者の理由戰は迷謬なり、隨つて彼等の自由肯定論も、自由否定論も共に空

幻なり、迷謬なり。

ベルグソンは此の如き判決を下す理由の中には、必ず左の如き有名なる原則を掲ぐるを常とす、『物ならば、之を解剖することを得べきも、過程は之を解剖すること能はず、廣袤は之を切斷することを得れども、持續は之を切斷すること能はず』(『意識の直接與件』原書一六七頁)

ベルグソンは古來の哲學者の懸案たる自由問題が、甲論乙駁、一是一非中に永く解決せられざるを見て、玆に巧妙なる方策を取り、常識の耳に新らしき定義を案出して、之が解決を下さんとしたり。

以上はベルグソンの自由問題解決法の解說としては甚だ簡單に過ぎ、殆ど圖解的の觀なきにあらずと雖、其の大要は實に此の如し、細目に亙りては、請ふ之を左に紹介せん。

二　ベルグソンの自由辯護論

ベルグソンは人間の自由を承認し、自由の擁護者を以て自ら任ずる者なり。此點に於て精神主義者も大に氏を稱讚すれども、氏の自由の定義は精神主義者と大に其趣を異にするが故に、精神主義者は氏に對して『自由の名を存して、自由の實を排せり』と云ふ。

遮莫、ベルグソンが吾人の稱讚に値ひするは自由の存在を證論せんが爲に、意識をして之を證明せしむる點に在り。此點は現今の精神主義者多く之を遺し、加特力教學者も亦之を遺棄すれども、實際は却つて剴切適當なること明なり。

之をベルグソンの流麗なる文章に就て見るに、實に左の如き快心の文字あり、『吾人は力なるものを意識の證明に依りてのみ意識す、

而して意識は未來の行爲の絕對的決定を肯定せず、否、理會せず、是れ實に經驗の吾人に敎ふる所なり、而して吾人若し經驗の敎ふる所に止まらば、吾人は自ら自由なるを感識すと言はんとす。』(『意識の直接與件論』原書一六五頁)『故に自由は一種の事實なり、而して人の檢し得べき事實の中に、自由の如く明瞭なるものはなし。』(同書一六九頁)

尙茲に注目すべきは、ベルグソンは自由を承認して、後カントの如く之を敬遠して『近づき難き實體』と爲さざる事なりとす。ベルグソンは公然カントの說を反駁して曰く、『カントは自由を祭上げて高く之を實體界に奉安せり、而して彼は持續(時間)と空間とを混同したるが故に、實際空間に關係なき自由なる本來の自我を、亦持續にも關係なき自我となし、隨て吾人の知力の企及し難きものとせ

り。然れども事實は之に反して吾人は強き反省の努力に依りて、吾人に隨伴する陰影より眼を轉じ、吾人の內部を省察する每に必ず此の自我を覺識す。」（同書一七九頁）

要するにカントは自由を人知の近づく能はざる神祕界に祭り上げて、超時間的境地に鎭坐せしめたるに反して、ベルグソンは自由を以て吾人の意識の把握し得べき自我となし、此の自我は不斷に現象と混和するが故に、吾人は絕對的に之を意識し得るものとせり。（同書一八一頁參看）

此の信仰宣言（意見公告）は實際明快にして、自由の爲には異論の亂麻を斷却したるものと謂ふ可し。宜なる哉氏の解決に慊らざる論者と雖、此點に於ては雙手を擧げて歡迎するに吝なるざるや。

三　宿命論の誤謬

吾人はベルグソンの自由辯護の方法として、先づ其對偶たる宿命論を論駁し、吾人の意識は決して宿命論が說く如き形式と性質とを有するものにあらざることを明にしたり。

ベ氏は冒頭より自由問題に關して相對陣せる二種の宇宙觀即ち機械論と活動論を述べ、尚自由意志論に對しては宿命論を掲げ、宿命論には物理的宿命論と心理的宿命論とあるを說きたり。此等の證論は、興味あるに相違なけれども、自由問題の結論としては餘りに長きに過ぐる嫌あり、特に勢力不滅論の叙說や、批判の如きは、更に此感あり。

故に吾人は直に心理的宿命論の解說に移らんとす。ベルグソンの

言に據れば、同主義は最も嚴密なる又最も輓近なる形式に於ては、精神に關して、聯想說的の觀念を含有するものなり。蓋し現在の意識狀態は初め既往の諸狀態に强要（制扼）せらるゝものと思惟せらるゝを以てなり。然れども此の强制が例へば合成力と其成立要素とを結ぶが如き幾何學的必然にあらざることは直に識認せらる、何となれば繼起する意識の諸狀態間には性質の差異ありて、彼等の一を其前行狀態より歸納せんことは到底不可能なればなり。之に對するベルグソンの意見に曰く、「吾人は意識の現狀態と意識の推移する新狀態との關係を容易に承認すと雖、其關係なるものは、推移の原因となすべからず。」と（『意識の直接與件論』原書二〇頁）

ベルグソンの意見は極めて適切なり、何となれば心理的現象は吾人の意識面上に相繼で生起すと雖、之が爲に必ずしも相互に原因と

なるものにあらず。例へば飢渇の意識と滿腹の意識は相次で起る意識なれども、互に相原因するものにあらざるが如し。

從來の學說によれば諸〻の意識狀態は、その實際相互に原因すると若くは單に相互に條件となる（條件に隨て作爲する）とに拘らず、依然多數性のものにして全く差異あるものなり。ベーンの言に曰く、『凡て思考は數の法則に從ふものなり、吾人の精神的生活は鼓動と推移とを以て行はれ、吾人の感情は中止してまた復起するものにして、此の一事に徵しても、其の數なることを知る、此の如く凡て意識は數に屬するものなり』と。然るにベルグソンは正さしく持續中に於ける此の多數性を否定したるものにして、之は聯想說の迷謬なりと云へり。氏の言に據れば、『同說は其の立脚する見地に於ても、自我と意識狀態の多數性とに關して誤れる觀念を附帶するものなり。而

して吾人の意識狀態の多數性を觀取するには、之を等質的仲介物の表面へ展舒せざるべからず、此仲介物は、世に或は之を持續と稱すれども其實は空間なるなり、其上に並列する各要素は自他全く相關せざる抽象的諸概念に過ぎず、『然れども吾人の理智が空間の觀念と象徵を創造する能力とを具して、此等多數性の要素を一完體たる意識狀態より引出すの故を以て、此等多數性の要素がその完體に包含せられたりと論結すべからず。何となれば完體の裡に在りては此等要素は空間をも占めず、又象徵を以て表明せらるゝことをも求めずして、相互に滲透し融合したるものなればなり。されば聯想說の誤は精神裡に行はるゝ具體的現象に代ふるに、哲學者の人爲的再構成を以てすると、「事實の說明」を「事實其物」と混同するとに在り。』（「意志の直接與件論」原書一二一、一二四頁參照）と論斷せり。

例へば常識にても、愛、憎、悔の意識狀態を以て並置的意識、即ち原子の如くに分離せる不連續の意識となさず、矢張りベルグソンの說の如く、完全なる連續性を辿りて展舒するものと思惟すれども、但だ之を區別して數的に算する點に於て、ベルグソンと見解を異にす。他の例を以て示せば物理學者は日光の各色が不可見的色彩によりて相互連續するを承認しつゝも尚ほ之を七色に分つて論ずるが如く、心理學者も亦心的狀態が設令互に相連續するを信ずと雖、之を區別し、之を列次し、之を計算するを常とす。例へば歡喜の情と苦痛とを明に區別するが如き類即ち是なり。世に七情說あるが如きも亦其の一例として見るべきか。

ベルグソンも亦吾人の各種の心的狀態を描寫するに『ミュルチプリシテ』(多數性、多樣性、多元性、多性)の語を使用すれども、之と

共に『品質的多數性』の新語を案出し、『多數性』を『多樣性』の意味に解したり、氏は尙『融解若くは相互滲透の多性』の新熟字を發明して、之を『幷置の多性』に對立せしめたり。要するにベルグソンの說に據れば、吾人の意識狀態は可算的數量にはあらずして、滲透融解して持續する一種の異質的特性と見做したるものなり。

是に於て乎、結論は當然左の如くならざるべからず、自由の制限即ち或る先行意識が後來の意識を制扼强要すと假定するは根本的に誤れり、何となれば吾人の意識は之を個々の要素に分つこと能はず、隨つて先行の意識若しくは後來の意識と稱するは、全然無意味なるを以てなり。

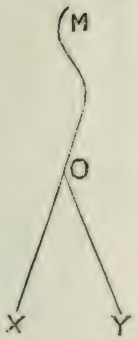
四　ベルグソンの自由辯明の圖解

普通自由の意識と云ふときは、幾多の方向中其の何れをも選定することを得、且つ實際選定したる以外の方向をも選定することを得べかりしとする意識を指すものなるに、ベルグソンは之を以て無意義となしたり。

スチュアート・ミルは『自由意志の意識を有すとは、決定するに先つて、他の決定をもなすことを得たりとの意識を有することなり』と曰へり。是れ實に自由擁護論者の唱道する所にして、同論者の斷言する所によれば、吾等が一つの行爲を自由に遂行するとき、他の行爲もまた等しく可能的なりとするに在り。ベルグソンは之に對てし曰く、

『我はXとYとの二つの可能的行爲の間に躊躇して、兩行爲の方向に交々去來す。此意味は我は一系列の意識状態を通過し而して此

の意識状態は、我のXの方向に傾くか、又は他の方向に傾くかに從て、二つの集團に分岐し得べしと云ふことなり、即ち行爲を象徴化したる一種のシムボリズムなり、然れども實際は二つの傾向もなければ、二つの方向もなく、但だ一つの自我が躊躇することによつて生長し、發展し其終局に於て自由行爲が宛も熟せる果實が樹端より落下する如く躊躇より脫落するまで進展しつゝあるに過ぎず。』（『意識の直接與件論』原書一三四頁）



若し果して二つの可能的傾向もなく、二つの可能的方向もなしとすれば、選定なるものゝあるべき筈なければ、從來信ぜられたる自由の定義はベルグソンの言ふが如く實際『無意義』なりと

謂はざるべからず。而してベルグソンは此の二つの可能的傾向と方向とを否定するが爲に、圖を以て之を解說し、過去を示すにMO線を以てす、此線はOなる分岐點まで到りOX及びOYに分る。二つの分岐線は二つの可能的方向に向ふ二つの可能的傾向を象徴す。此の如く圖解を掲げて後、此の象徴主義を反駁して曰く、＝此の如き圖は吾に進行中の行爲を表示せずして、既成行爲を表示するものなり。さればMOの途を辿りてXに向はんと決定したる自我が、Yに進むことを得たるや否やを問ふが如きは謂れなし。吾は曰はんとす、此の如き問題は無意義なりと、何となれば實際にはMOなる線もなければ、O點もなく、またOX、OYなる途もなければなり。此の如き問題を掲ぐるは、空間を以て時間を、同時發生を以て繼起を適當に表明し得べしと承認するものなり……此の如き圖は物を示して

進歩を示さず。」（「意識の直接與件論」原書一三六、一三七頁）

要するに此の如き圖の不適當なるは、「其線は流れつゝある時間を示さずして、流れ去りたる時間を示すが爲なり」と云ふに在り。ベルグソンの說によれば、吾人の意識の持續は異質的狀態の不斷の流れにして、二度と再び繰返されざる歷史の瞬間的繼起なり。然るに象徵主義は運動と時間の進展とを初より既に固定せしめ、記憶を以て之を結晶せしむるが故に、刻々變化して暫くも停止せざる吾人の意識狀態の眞相を表明すること能はざるものなり。換言すれば、自我の間斷なき自由活動は、幾何學的象徵主義の能く說明し得べきものにあらずと云ふに歸す。

吾人の自由行爲は宛も稔り落つる熟果の如く進展すと云ふ觀念が、普通の常識を滿足せしむること能はざる所以は、「常識は截然たる區

別を愛するものにして、その區別が文字上の定義や空間內の位置を以て表示せられんことを好むが爲なり、是を以て前掲の圖に示すが如く、自我がMOなる意識事實の系列を經過したる後、O點に達すれば、OXとOYの二方向がひとしく眼前に開けあるが如くに想像するが故に、此の方向を意識の大道の極限する眞の道の如くに見做し、その何れの方向に進み入るも自我の任意なるが如くに思惟し而してOXに進みたる時にはOYが、OYに進みたる時にはOXが殘留するものゝ如くに誤信するが故に、前記の如く一の選擇をなしたる際に他の選擇をも亦爲すことを得たるなりと云ふ想定を設くるに至りしなり、此れ持續を空間と混同するが爲に生ずる迷誤なり、何となれば、吾人假にOXを選びたりとすれば、既にOYなる意識の傾向も其中に滲透融合したるものなればなり。要するに吾人は自我の

活ける間斷なき活動に於て、單に想像の上より二つの反對なる方向を區別したるまでなるに、その活動に代ふるに方向其物即ち死物化して之を目するに吾人の選擇を待ちつゝあるが如きものを以てせんとするものなり。

五　意識狀態と豫見

自由論者も宿命論者も自由行爲を定義するに、『設令そが一切の條件を豫め知悉するとするも、猶且つ豫見し得べからざる行爲なり』と云ふ。然るにベルグソンは此の定義をも『無意義』なりと云ふ。

ベルグソンは之を證明せんが爲に、未來の豫見を二種に分てり、一は蓋然的若くは推測的豫見にして、他は正確若くは不可誤的なる豫見即ち是なり。

『或友人が、或場合に於て、多分確に此の如き行爲に出でんと言ふことは、是れ吾友の未來の行動を豫言すると云ふよりも、寧ろ其の現在の性格に、否、結局其の過去に判斷を下すことなり……然るに宿命論者は更に進んで斷言して曰く、吾人の解決の疑はしきは、吾人が問題の一切の條件を悉く知悉せざるに起因す……若し一切の先行條件を一つも殘らず完全に圓滿に知悉するを得ば、豫見をして誤りなく事實ならしむるを得ん。』(『意識の直接與件論』原書一四〇、一四一頁參照)

ベルグソンは之に答へて曰く、此の如き豫見は不可能なり、何となれば意識狀態の問題に於て豫見すると云ふことは、畢竟見ると云ふことなり、自ら行ふと云ふことなり、『深き心理的事實の領土に於ては豫見すると、見ると、行ふとの間には著しき差別なし。』(同上一

五一頁

ベルグソンの豫言に對する有名なる比喩はポール及びピエールの例なり。(詳しきは第十章參看)、ポールがピエールの歷史中の或瞬間に於ける心的狀態を的確に豫言し得るが爲には、左の二方法の中其一に出でざるべからず、卽ちポールは小說家が其の書中の主人公の如何なる經路を辿り行くべきかを知れると同じく、ピエールの終局の行爲を豫め知悉するか……若くはポールが想像ならで、實際己れ自ら此等の心的狀態を經驗するか、(二者其一に出でざるべからず)。此の假定の中第一は之を排せざるべからず、何となれは先行條件のみを與へられたるとき、ポールが終局の行爲を豫見し得べきや否やと云ふことは、正さしく是れ研究問題に屬すればなり。是に於て乎吾人はポールに就ての考を一變せざるべからず、ポールは最早、吾

人の先きに考へたる如く、未來を洞察する明を有する觀測者にはあらずして、ピエールの役割を豫め演ずる所の役者なり……然れどもピエールとポールが同じ感情を同じ順序に經驗して、二人の心が同じ歴史を有するとせば、如何にして兩者を區別することを得べき……されぱピエールとポールは同一の人物にして、行ふときには、之をピエールと稱し、豫言する爲に其の歴史の要點を復說するときには、ポールと稱することに決定するの外なし……果して然りとせば、先行條件一切を與へられたるとき、行爲は之を豫見することを得たりや否やと云ふが如き問題は、無意義の問題なり。何となれば此等の先行條件を歸一する方法としては動的方法と靜的方法の二つあるに過ぎず。第一の場合に於ては知らず識らず推移して關係中の人と合致し、同じ系列の狀態を經驗するに至るべし……此の如くなれば

最早豫見問題は消失したる譯なり。若し夫れ第二の場合に至りては單に前行狀態の性質的說明と、其分領的計算とを綜合して豫め終局の行爲を前提するものなり……。」（同上一四三、一四四頁）

六　意識狀態と因果律

ベルグソンは尙進んで宿命論者の因果の法則論を反駁し、是れも亦無意義の謎題なりと云へり。實に因果律によれば『同一の原因は、同一の條件の下には、必ず同一の結果を生ず』と云ふ。此の法則を心的現象に應用すれば、或自由行爲の心理的先立行爲は更にまた時を異にして同一なる自由行爲を復起することを得べしと云ふことを前提するものなり。然れどもべ氏の說によれば、實際に於て此の如き事のあるべき筈なし、何となれば同じ意識狀態は、その反覆せら

るゝと云ふ一事によりて、全く新らしき狀態となるものなり、隨て最早初めの狀態の單なる繰返にはあらず。ベルグゾン曰く、『同じ内的原因が同じ結果を生ずと云ふことは、同じ原因が意識の舞臺に屢〻出現し得べしと假定することなり。然るに持續を吾人の言ふが如き性質のものとせば、深き心理的狀態は根本的に各自異質性なるものにして、彼等の二つが相互相類することは全然不可能なるものなり、何となれば此等の心理的事實は一の歷史の二つの異なれる瞬間を組立つるものなればなり……此の場合に於ては同一の條件と稱するものは存在すること能はず、何となれば同じ瞬間は二度と再び現はるゝことなければなり……深き内的原因は其の結果を一たび生じて、決して再びせず。』（同上一五二、一五三頁）

實に此はベルグソンの持續に關する觀念の系論と謂ふべし。ベルグソンの持續論によれば、過去の現在に『接合』するは、宛も『雪球』を作るが如く、自我は未來に進み行くに從つて、過去を加ふること益々多く、否益々豐饒となり行く過去の爲に增大し、間斷なく變り行きて、決して同じものにあらず、故に曰く『同じものは此の場合に於て同じものとして留存せず、そが一切の過去の爲に益々強くなり、益々大となる。』と。

要するに因果律は物質界に於て之を承認し得べきも、之を移して以て心理界に應用すべからずと云ふに歸す。

七　結論

ベルグソンは此の如く宿命論者も自由論者も共に議論の對象たる

意識の本質を解すること甚だ不精密なりし爲め、其論述も竟に全然無意味になりたることを述べ、從來の自由に關する定義を排斥し去りたる後、偖自らは如何なる定義を以て之に代へたるかは、人の聞かんことを欲する所なるべし、然るに、ベルグソンは之に對して如何なる定義をも與へずして。『自由は定義すべからざるものなり……自由を定義するは、自由を否定するものなり』と曰ひ、『具體的自我と其の遂行する行爲との關係を以て自由と稱す、而して此の關係は定義すべからず、何となれば吾人は自由なればなり。蓋し物ならば之を分析するを得れども、過程は之を分析すること能はず、延長ならば、之を分解するを得べきも、持續は、之を分解する能はず。然るにも關らず强て之を分析せんと欲すれば、知らず識らず過程を物に變じ、持續を延長に變ずるに至らんとす。具體的時間を分解せんと欲すれ

は、その各瞬間を等質的空間に展舒せしめ、遂行中の事實に代ふるに既成の事實を以てし、又謂はゞ自我の活動を固結せしめんとするが故に、自發性は惰性に變じ、自由は必然性に變ずるを見るべし、是を以て自由の定義は凡て皆宿命論を道理なりとして、其の勝利を資くるものなり』と曰ひて、自由を定義するとの不可能なるを切言したり。

然れども強てベルグソンの書中より自由の定義らしきものを求むれば、之を左の言に求むべし。

『同情、反感若くは憎惡等を以て精神を壓する力の如きものとし、精神が之等の爲に決定せらると云ふが如き心理論は、極めて淺薄なる心理論にして、言語の爲に欺かるゝものと謂ふべし。此等の感情は充分の深さに達すれば、各ゝ精神それ自らの全體を示すも

のなり。即ち、凡て精神の內容は此等各感情に反映すと云ふ意味に於て然りとす。精神が此等の感情の何れかの影響の下に決定せらると言ふは、兎に角精神それ自らの決定することを認むる議論なり……自由決裁は精神より出づるものなり云々。』（『意識の直接與件論』原書一二六、一二八頁）

尙ベルグソンは論結を下して曰く、

『要するに、吾人の行爲が吾人の全人格より出づるとき、全人格を表顯するとき、全人格と彼の言語を以て說明すべからざる類似、即ち藝術家と作品との間に時々認めらるゝが如き類似の點を有するとき、然りそのとき吾人は自由なり。其時には吾人は吾人の性格の有力なる影響の下に壓伏せらるものなりと云ふが如き議論は、空論なり。吾人の性格と云ふものは、是れ亦吾人それ自らなり。

思考する自我と、行動する自我とを抽象して、交〻之を考察せんが爲に、人格を二つに分けんと欲すればこそ、自我の一つが他の自我を壓すると云ふが如き兒戯的結論を生ずるなれ……一言以て之を蔽へば、凡て自我なり、然り、自我のみより出づる行爲が自由なりと稱するを得ば、吾人の人格の徵候を有する行爲は、眞に是れ自由なり、何となれば吾人の自我即吾人の人格を生み出す所以のものなればなり。(同上一三一、一三二頁)

如上の言論を煎じ詰むれば、吾人の全人格を顫動せしむる行爲は、自由の行爲なりと云ふに歸す、換言すれば、自由行爲となるには、全精神の感情及び能力の琴線に觸れざるべからずと云ふことに歸すべきなり。

第五章　心身問題の解説

一　唯物論と唯心論に對する駁撃

ベルグソンは時間の新定義によりて吾人は啻に自由問題を解決し得るのみならず、心身相關問題をも解決し得べしと云ふ、是れ實に其著『物質と記憶』の取扱ひたる主要問題なりとす。

題して『物質と記憶』と云ふと雖、實は『物質と精神』と云ふと異ならず、何となればベルグソンは、追て後條にも記す如く、記憶を以て精神若くは精神の發現なりと云へばなり。尤も別名として『心身關係論』と云ふ題目をも掲げたるを見れば、心身相關問題、即ち古來哲學者の所謂靈魂肉身の配合問題に就て研究したるものたるや、

疑を容るべからず。

氏は先づ唯物唯心兩論を共に駁して曰く、

『吾人は精神を物質より出でしめんと主張する唯物論を排斥したり、然れども物質は單に精神の構成に過ぎずと唱道せんと欲する唯心論にも左袒する者にあらず。吾人は唯物論に反對しては、知覺は頭腦狀態の到底包容し得る範圍に限らざることを主張す、されど觀念論に反對しては、物質は何れの方面に於ても吾人の之に就て心像の中に浮ぶる表現を超越すと立證したり、その表現なるものは、精神が一種の巧妙なる選擇によりて物質中より摘採したるものと謂うて可なり。此の唯物唯心の二論中第一は身體に、第二は精神に眞の創造力を歸せんとするものにして、前者は吾々の頭腦は表現を生ずと唱道し、後者は吾々の悟性は萬有の圖象を畫くと

唱道す。』(『物質と記憶』原書一九九頁)

而してベルグソンは解決問題を積極的に言明して曰く、『此の問題は心身結合問題に外ならず。同問題が吾人の面前に急切に提出せらるゝ所以は、吾人は物質と精神とを根本的に區別するが爲なり。而して吾人が之を不可解と見做すこと能はざる所以は、吾人は精神と物質とを定義するに、積極的特性を以てし、否定を以てせざるが爲なり。』(同書一九八頁)

ベルグソンの此の如き精神主義的信仰宣言は決して偶有的にもあらざれば、間歇的にもあらず、氏は唯物論に對しては一切の形式の下に之を駁撃するの機會を逸せず、時としては甚しく之を痛罵して完膚なからしめたることあり、而して、彼自身の精神主義を極端まで力說せんとしたり。實際其著『物質と記憶』の裡には之に關する

極端の議論少からず、例へば『身體は知識狀態を生起することも、誘致することも能はず』或は、『知覺に伴ふ頭腦狀態は、其の原因にもあらざれば、其の副本にもあらず』と言ふが如く、一見恰も故意に心身の間に踰ゆべからざる溝渠を劃し、而して後除ろに兩者を結合せしむる手腕を示さんとしたるの觀あり。

二　ベルグソンの身體觀

兎に角心身結合の問題が、氏の著『物質と記憶』中の重要なる問題たるや、明白なる事實なり。而して氏が此の問題を解決するに當りて、先づ第一實證的研究法を取り、彼の形而上學的解決をして實驗と心理學とに基かしめざるべからずと道破したるは、實に吾人の意を得たり。蓋し吾人の心身に關する問題に就ては、實驗と生理學

はそが唯一の研究法なればなり。氏の言に曰く、『吾人に物質と精神との區別を示したる心理的觀照は、同じく吾人に二者の結合をも知らしめんとす。』（『物質と記憶』原書一九九頁）

既に此の如く研究法の定まりたる上は、氏が如何にして之を適用したるかを研覈せざるべからず。心身の結合問題を解するに當りては、須らく先づ身體と精神との何物なるやを定義して之が概念を示さゞるべからず。ベルグソンは物質と精神とに關する一切の形而上學は深く之を研究するの要なしとして、身體と精神との定義を避けんとしつゝも猶且つ一種の見解を立てたることは明かなり、

身體とは何ぞや。氏は開卷第一此の問題を解決せんと欲して、常識にては一見解し難き命題を提起して、曰く、『身體は形像なり』と、爾後氏は此語を屢々反覆すれども、卷頭に於ては其意を明に示さず

して、漸く同書五十頁に至りて、初めて其意の在る所を知らしめたり、即ち「形像」と云ふは矢張り眞の『實在』なることを示したり、されば此の場合に於ける氏の言辭は全く觀念論的なれども、其の思想に至りては實體論的なることは注目すべきことなり。

『吾人は姑く、諸ろ〳〵の物質論や、精神論や、外界の實在性又は觀念性に關する理論などに就ては、毫も知る所なきものと假定せん。然るときは余は玆に最も漠然たる意味に於ける所謂形像に接す、その形像は、吾感覺を開けば、忽ち現出し、閉づれば、忽ち消失す、此等の諸形像は其の要素的部分に於て、自然法と稱する恒定律に從て互に相作用し、反動す……然るに玆に一の形像あり、我は啻に知覺を以て之を外部より知り得るのみならず、感情を以て內部よりも之を知り得べしと云ふ點に於て、他の諸形像と截然

區別せらる、卽ち是れ吾身體なり。』(『物質と記憶』原書一頁)
『求心神經は形像なり、腦髓も形像なり、感覺的神經を通じて腦髓に傳達せらるゝ刺戟も、亦是れ形像なり。』(同書三頁)
『我は形像の總體を稱して物質と云ふ、而して此等の形像其物を或一定の形像卽ち吾身體の可能的作用に歸するとき、之を物質の知覺と云ふ。』(同書七頁)

然れどもベルグソンは時として此等の『形像』を稱するに他の言辭を以てすることあり、例へば『物質的對象、』又は『發光中心』などの語卽ち是なり、氏は之によりて形像は吾人の想像に關係なき獨立的實在なることを知らしめたり。故に曰く『形像は知覺せられずと雖、存在し得べきや、言を待たず』と。又曰く『吾人が、形像は吾々の外部に存在すと言ふは、吾々の身體の外部に在りと云ふ意味

なり……故に吾人は斷言す、吾々の身體は消失しても、知覺せられたる形像の全體は依然存續すと』（同書四九頁）

是に由りて之を觀れば、ベルグソンの所謂形像の客觀的實在に就ては、最早疑を容るべからず。即ち吾人の所謂意象若くは心象とは相異なりて、觀念論者の想象とは沒交渉なり。蓋し同論者の說によれば、一切の實在は知覺せらるゝに依つて存在すとなす、故に曰く『存在するとは知覺せらるゝの謂なり』と。

然れども吾人は玆に、ベルグソンが何故初より『形像』の語の同義語として、嚴密なる意味に於ける『現象』と云ふ語を使用せざるかを怪まざるを得ず。實際現象とは實在が外面に表顯する意味にして、換言すれば外部に作用し、發光する意味に於ける實在それ自らと稱して可なり。然り而して作用は、動作者の表顯なり、隨て其

形像なり、何となれば作用は實在の後に起るものなればなり。此の作用が受動的に受容せらるゝとき、若くは官能に印刻せらるゝとき、之を『印象』と云ふ、されば形像は官能に受容せらるゝ前には、物的形像として存在し、感覺せられ、知覺せらるゝときは、心的形像となる。果して然りとせば『物質的形像』の語を身體に當篏むるときは、極めて深き意義あり。吾人はベルグソンの所謂『形像』の語を用ゐたる眞意那邊に存するやを知らざれども、如上の解釋或は不穩に庶幾からん乎。

三　ベルグソンの精神觀

心身相關問題に於て既に第一項（身體）を定義したる上は、第二項（卽ち心靈、若くは精神）を定義せざるべからず、精神とは何ぞ

や。ベルグソンは之を定義せずして、直に之を心理的觀照に委し、精神の到底物質に還元す可からざる卽ち物質と全然反對なる點、並に兩者が結合する點とに於て精神を實驗せしめんとしたり。

然らば吾人は何處に於て精神を把握し得べきか。官能の覺識に於てか、記憶に於てか、將た知識的作用に於てか。而して知識的作用は當初より眼中に措かざるが如し。ベルグソンの如き反主知論者としては固より斯くあるべき筈なり。在來の哲學者は、人獸の區別を智識に在りと云ひて、常識を以て判斷、推理、選定及び自由等の泉源となし、人靈の無形性を證明する盡藏の富源の如くに見做したれども、ベルグソンは全然之に反して、精神の無形性を立證するには、記憶の無形性を以てするの遙に之等に優れるを說きたり。

さればベルグソンの精神に關する見解は實に左の言に在り、曰く

『純粋意識は既に精神を豫告し之が準備となれども、精神を發現するものは、記憶なり。』(原書二六二頁) 請ふ少しく之を詳解せん。ベ氏先づ吾人に語て曰く、

『吾人が感覺と純粋知覺とに止まる間は、精神とは殆んど沒交渉なりと謂うて可なり。勿論吾人は之によりて、副現象的意識論に反對して、頭腦狀態は知覺と頭尾對應するものにあらずと斷言す。又勿論一般形像中より知覺を選擇することは、精神を豫表する辨別力の一結果なり。』(『物質と記憶』原書二六二頁) 然れども未だ以て精神となすべからず。

其故如何と云ふに、純粋知覺は吾人を物質と同位他に置くものなり。勿論『吾人は唯物論者に反對して、知覺の範圍は頭腦狀態の範圍を超越する萬々なることを主張す』と雖、(同書二六二頁參看)、官

能の知覺に於ては精神は其の物質的對象と合致して、未だ全く其中より蟬脫せずと云はざるべからず。『一物象の視覺の場合に於ては、頭腦、神經、網膜及び物象其物も一種の聯絡ある完體、一種の存續せる過程を形成す』(同書三一頁同二四〇頁參看)、果して然りとせば、外界に於ける物象の知覺は、吾人の內部に在りと云ふよりも、寧ろ吾人の外部に在りと云ふべく、單純にして靈的(無形)なりと云ふよりも、寧ろ延長的にして物的(有形)なりと云ふべし。

何となれば其の職能は外界の物象に適合するに在りて、記憶と其の強弱の點に於てのみ相異なる一種の內的及び主觀的視覺の如きものにはあらず。吾人の知覺は間斷なく空間に向はんとしつゝあり、是を以て之を非延長的意識狀態の如く見做すは、大なる誤なり。客觀的知覺は、之に伴ふ主觀的感覺の如く、心靈的狀態にして、孰れ

も延長的なり、そは性質上然るものにして、偶有的に然るにあらず、その發生の始より然るものにして、終に於てのみ然るにあらず、これは吾人の意識の觀照に基く主要なる眞理にして、ベルグソンは屢々之を反覆細説して、之と反對なる先入見が一般に支配するにも不拘、深く之を人の精神裡に徹底せしめんとしたり。

『感覺は―混亂せる努力を包含するが故に―其の所在往々曖昧なり、世の心理學者は此の事實を見て、直に之を非延長的のものと斷定し、之が爲に一般の感覺を或る單純なる要素なりとし、凡ての外的形像を把握するは、此要素を組み合すとによるものとす。然れども實際は之に反して、感覺は知覺を構成する主要の材料にあらずして、寧ろ知覺に混入する不純性なり。感覺そのものも、初より或一定の延長的局所を有す』(『物質と記憶』原書五〇、五一

頁）――『是に於て予感覺を以て浮動的及び非延長的狀態となし、そが延長を獲得して、身體に團結するに至るは、偶然の結果に依るのみと云ふ謬論を生ぜり、此の謬論は、前にも述べたる如く、大に外的知覺論を蠧毒し、物質に關する各種の形而上學の間に幾多の未定問題を惹起す。故に吾人は決然左の如く斷定せざるべからず、曰く、感覺は本來の性質上延長的にして且局所を有すと。』（三、物質と記憶』原書五一頁）

約言すれば『知覺と感覺は空間に展舒するものにして、畢竟有機的能力に外ならざれば、純乎たる精神は之を外に求めざるべからず』と論結することを得べし。

然り而してベルグソンは之を記憶に求め得たりと主張す、而して記憶を二種に區別したり、『自發的記憶と本來の記憶』即ち是なり。

『此の二種の記憶の中に、一は想起し、他は反覆す。後者は前者を補充し、往々之と混同せらるゝことあり、……通常心理學者の研究する第二の記憶は記憶そのものと云ふよりも、寧ろ記憶により て說明せらるゝ習慣なり。』（物質と記憶＝原書七九頁、八一頁）

『記憶には二種ありて根本的に差別あり、その一は有機體に固着して、種々あり得べき要求に適合する反應を確保する所の、巧妙に（頭腦及び脊髓に）組立てられたる機制の總體に外ならず。此の記憶は吾等を現在の境遇に順應せしめ、吾等の受くる作用は之によつて反應となるまで存續す、而して此の反應は、或は完成せらるることあり、或は單に端緒的なることあれど、孰れにせよ必ず適宜なるものあり。此の記憶は記憶と云はんより、寧ろ習慣にして、吾等の過去の經驗を現在に行ふ迄にてその心象を呼起すものにあら

す。他の一は眞の記憶にして、意識と共に延長し、吾等の一切の心的狀態を保持して、各〻之を生起の順序に從て列次し、各の事實に其の場所を遺し、隨て其の日附を示し、實際決定的過去の中に動く所のものにして、第一の記憶の如く、過去が復歸更始したる現在に於て動くものにあらず。」「二、物質と記憶」原書一六四頁）

然れども此の二種の記憶は各〻相分離するものにあらずして、互に相倚り相扶くるものなり。過去の記憶は、感覺運動の機制に一切の記憶心象を提供して、同機制の作用を指導し、其の運動的反應を有益に引率す、是に於て予或は接近性により、或は類似性によりて心象と運動との聯合成立す。他の一方に於て、感覺運動の機制は、其の習慣によりて、潛伏的即ち無意識的記憶心象に形體を取りて、物質化する方法、換言すれば再び現實に活躍せしむる

方法を提供す、吾人は此の調和が心象と運動との間に堅實に成り立つと及び其の正確性の完全なるとの多少に依りて、能く平衡を持せる精神、即ち實際生活に適する人の特色と、衝動の人の特質とを認むるものなり。』（『物質と記憶』原書一六六頁參看）

本來の記憶も亦之を細別して記憶心象と純粹記憶の二種とす、前者は其名の示す如く、貯藏せられたる心象の再現するものにして、後者は之を認識するものなり。

ベルグソンの言に曰く、『想像することは記憶することゝ相異なり。勿論、記憶は、現實化するに伴れて、心象となりて活現する傾向ありと雖、之を逆にして考ふるときは即ち然らず。純粹記憶の吾を過去に携へ行くは、實際吾之を過去に求むる時に限るものなり。』（同上一四六頁）

然るにベルグソンの說によれば、此の二種の記憶は何れも有機的にして純粹精神は乃ち此の二者より成立つと云ふ、其言に曰く『純粹記憶は精神の發現なり。吾人は記憶によりて眞に精神の領域に入る』と。（同上二六九頁）但し此の二種の記憶の相異なる唯一の點は、記憶心象は、前に記したる運動機制の作用として、『物質化する傾向ある』に反して、純粹記憶は自ら茲に出づる能はずと云ふに在り。是に於て予純粹記憶と記憶心象と知覺との三者の間に多少の階段を生ず。第一、純粹記憶は心象として出現する傾向あり。第二、記憶心象は現在知覺と相結合して之を補足する傾向あり。第三、知覺そのものは動作となりて物質化するの傾向あり。

ベルグソンが精神を記憶に求めて、その記憶を如何に解釋したるかは、前項に詳述したり。吾人は是より氏が精神と物質との結合、換言すれば、心身の結合を如何に解決したるかを解説せんとす。

ベルグソンの意見に據れば、心身結合問題は今日まで其の提出法を誤まれり。即ち同問題は之を時間の上より攻究すべき筈なるに、今までは之を空間的に攻究したりと云ふ。

實にデカルトは、身體を定義するに延長を以てし、精神を定義するに非延長の思考を以てしたるが故に、其の結合は無論接近と云ふことさへも不可能ならしめたり。延長非延長の區別は根本的なれば、其間に階段を樹つること能はず、又之を結合し得べき仲介者をも容れ難し。故に若し物質は空間に在りて、精神は空間以外に在りとせば、兩者の間に聯絡もなく、交渉もなく、一切の接近は實際不可能とな

るなり。

既に二者を結合すること能はざるときは、その共存平行を前提するより外なし。茲に於て乎心身平行論起る。其狀恰も正確なる二個の時計が、各〻時間を違へずして、進行しつゝ而かも相互の間には何等の影響を及ぼすこと無きが如し。是に於て乎物心の間に（カントの言によれば、感性と悟性との間に）、何等かの豫定調和を假定せざるべからざるに至るなり。

此種の議論は難問の鋒を回避するまでにして、之を解決するものにあらざるが故に、ベルグソンは悉く之を排斥し、平行論の假説は科學的に精確なる解釋にあらずと爲したり。

然るに他の一面に於て、氏はデカルトに贊同して心身の對立は延長非延長の對立なりと云ふ。加之、更に他の新らしき對立を加へて、

益々之を複雑ならしめたり。第一は身體の特徴を示す等質的分量と心靈的現象を表顯する異質的特性との對立。第二は物質を確定する必然性（必至性）と精神を表顯する自由との對立即ち是なり。

此の如く故意に物心間の溝渠を鑿ちて問題を難解ならしめたる後例の天才的創見を以て之が解決を試みて曰く、『要は問題の提出法を轉換すれば可なり、即ち之を時間との關係より攻究すべく、空間との關係より攻究すべからず。』と。其推論實に左の如し。

『吾人は本書の始に於て、身體と精神との區別を立つるは之を空間の關係に於てせずして、時間の關係に於てせざるべからずと言ひしは、至當の言なりと信ず。普通の二元論の誤謬は、空間的見地に立脚して、一面には物質及び其の變化を空間の中に置き、他の一面には非延長的感覺を意識の裡に置くに在り。如何にして精神

が身體に、身體が精神に作用を及ぼすかを理會するの困難なるは蓋し茲に出づ。單に事實の僞證に過ぎざる又到底此域を脱するを得ざる假定說、即ち心身平行論の觀念や、豫定調和論の觀念なども亦こゝに出づ。同時に記憶の心理學や、物質の形而上學を成立せしむるの不可能なるも、亦これに職由す」（「物質と記憶」原書二四七頁）

ベルグソンは、二元論の内容を改造することによつて此難問を通過したり。即ち主觀と客觀とが合致する所の純粹知覺より出發して、物質、精神兩項が其持續に伴ひ發展する跡を迪り行けば、「物質は、之が分析を益〻深く押し進め行くに伴れて、益〻非常に迅速なる諸瞬間の繼起に外ならざるの傾向を示す、此等の瞬間は互に相推引し、隨て自他同等くなるものなり。而して精神は、知覺に於て旣に記憶な

れば、益々過去が現在の中へ延長するもの卽ち一種の進歩、一種の眞正なる進化として說明せらるべし。』

果して然りとせば、記憶によりて事物の間斷なき推移を過去と現在との間に聯結せしむるもの、謂はゞ之を『固結』せしむるものが卽ち精神なり。精神はまた之によりて己の持續の繼起的各瞬間を聯結して、身體にも作用を及ぼすものなり。

然れども身體と精神との關係は、此の如き解釋によりて果して尙一層明瞭となるべきか。若しも時間的區別に代ふるに空間的區別を以てせば、果して之が爲に二者を尙一層能く結合せしめ得べきか。――此の問題に對してベルグソンは直に答へて曰く、『吾人は玆に第一の區別（延長と非延長との區別）は、程度を容るさゞることに留意せざるべからず。物質は空間に在り、精神は空間外に在りて、二

者の間には何等の可能的推移もなし。之に反して若し精神（記憶）の極めて微細なる職能も、事物の持續の継起的各瞬間を結合するに在りとせば、又若し此の作用に於て精神は物質と接觸し、又之によりて、先づ第一着に物質と自ら區別するならば、物質と完全圓滿に發展したる精神（記憶）との間に、無數の程度あるを見るべし。」

『斯の如く頑冥無覺なる物質と極めて反省力に富める精神との間に、記憶の有らゆる可能的強度あり、換言すれば、自由の有らゆる程度あり。精神と身體との區別を空間の點に於て表明する第一の假定說によれば、身體と精神とは、互に直角に交叉する二筋の線路の如き觀あり。第二の假定說によれば、其の線路は曲線を描いて相接合するが故に、人は知らず識らず一方の線路より他方の線路に移り行くの觀あり。」（同上二四八、二四九頁）

以上の問題に對するベルグソンの解答は實に此の如し。

五　ベルグソンの身心結合論（下）

ベルグソンは心身結合問題に關して尙他の解決を試みたり、吾人は先づ氏が身體と精神との間に立てたる三種の對立論を想起せざるべからず、氏の言に曰く『一般の二元論に於ける二原理の對立は、之を左の三種の對立に歸するを得べし、非延長物と延長物、特性と分量、自由と必然性卽ち是なり。』（同上二七三頁）

然り而してベルグソンは此の三種の對立を撤去して、否、寧ろ緩和せんが爲め中間物を發見し、之によりて以て對立物の合致を謀り以て從來假定せられたる性質的反對を程度の相異に歸せしめんことを策したるものなり。

第一の對立は、前にも記したる如く、延長物と非延長物との對立なり。ベルグソンは先づ假に此の對立を以て全然不可還元的相反と斷定し置きしが、是に至り例の婉轉自在なる得意の辯證法を以て兩者の仲介物を案出するに至れり。氏は先づ吾人の謬想を預防して曰く、『吾等の悟性は、其の日常の謬想に司配せられて、凡て物は延長的ならねば、非延長的なりとの双關論を掲ぐるを常とす』と、次に此の謬想は如何にして之を避くることを得べきかを示して曰く、『若し吾等は一面に於て、例へば眞個微分子に分割せられたる延長を假定し、他面に於て、意識を空間に投射する非延長的性質の感覺とを假定すれば、無論斯る物質と斯る意識、身體と精神との間に何等共通的のものを認めざるべし。然れども此の如き知覺と物質との對立は、悟性が其の習慣と其の法則とに從て事物を分解し

又は再構成せんとする人爲的作用の結果にして、直觀に與へられたるものにあらず。與へられたる所のものは非延長的感覺にはあらざるなり。非延長的感覺は如何にして空間と結合して、そこに場所を占領し、そこに並列して以て普遍的經驗を建設することを得んや。尚現實的のものは、獨立的分子に分割せらるゝ延長にもあらず……與へられたるもの、現實的のものは、被分割的延長と純粹非延長との或何等かの中間物なり。吾人は之を名けて擴張のものと言へり。』（『物質と記憶』原書二七三、二七四頁）

此の如くベルグソンは既分的延長と可分割的なる非分割的延長とを區別して、後者を擴張的のものと云へり。既分割的延長は、多くの延長を形成すれども、非分割的延長は唯だ一つの延長なり。

第二の對立は、特性と分量（質と量）との對立なり。然れども此

の二種の對立を接近せしむる事は、ベルグソンの説に於ては最早不可能にあらざるが如し。又此の二者を同一なる中間狀態の兩極の如くに考察し得べしとせば、兩者の間の溝渠は能く之を塡充することを得べし。また實際此の如くなるべしと思はる、何となれば異質的特性は、多數の同質的狀態の記憶によりて行はるゝ一種の集結、一種の收縮に外ならざればなり。此の等質的分量と異質的特性との間に於ける中間狀態は、ベルグソンの哲學に於て之を『緊張』と稱す。

『純粹知覺の分析は、延長の觀念に於て、延長物と非延長物との間に接近の可能的なるを吾人に推知せしめたり。之と同樣なる道に於て、吾等の純粹記憶の觀念は、吾人を導きて第二の對立、即ち特性と分量との對立を緩和するに至らしめざるべからず……吾等の具體的知覺に於て互に相繼起する異質的特性と科學が空間内に

於て此等の知覺の背後に在りと假定する等質的變化との區別は果して何處にか在る。前者は非連續的にして、互に相推引さるゝ能はず、後者は之に反して計算に上るものなり。然れども之を計算に上らしむるが爲には、必ずしも之を純粹分量となすの必要なし。此の如くせんとするは之を無に歸せんとするが如けん。吾人の眼より見て實際遺棄すべきものとするが爲には、その異質性を充分稀薄ならしむるを以て足れりとす。然るに若し一切の具體的知覺は、如何に短きものとするも、既に記憶によりて行はるゝ無數の繼起的純粹知覺の綜合なりとする以上は、可感的特性の異質性は、記憶中に行はるゝ同特性の收縮に屬し、又客觀的變化の相對的等質性は、同變化の自然的弛緩に屬すと考ふべきにあらずや。されば分量と特性との間隔は緊張の觀念によりて之を減少し得ること、

宛も延長物と非延長物との懸隔を擴張の觀念によりて減少し得るか如くにあらずや。」（物質と記憶」原書二〇〇、二〇一頁）

是に由りて之を觀れば、分量と特性、等質と異質は緊張と云ふ同一狀態の收縮若くは弛緩に於ける程度に外ならずして、宛も延長物と非延長物は擴張と云ふ同一狀態の程度及び兩極の如きものに外ならざるが如し。

第三の對立なる必然と自由に至りても亦此の如きものなりや、矢張此の二者も稀薄となりたる同一物なるや、請ふ之をベルグソンの言に徵せん。

第三の對立「此の如き見地より延長物と非延長物、特性と分量との關係を考察すれば、第三の最後の對立、即ち自由と必然性との對立は之を理會するに困難を感ずること少かるべし。絶對的必然

性は持續の繼起的瞬間相互間の完全なる等價を以て之を表明するを得べし。物質世界の持續も亦此の如きなるものなるか、各瞬間は前瞬間より數學的に之を引出すことを得べきか、……抑も生物體の過程は先づ其を發生せしめ尋いで刺戟を流通せしめ、動作を整成せしめ得る神經系統を漸次複雜に赴かしむる機能の分化より成り立つなり。是故に高等中樞が愈〻益〻發達すれば、同一の刺激によりて動作の爲め選擇作用の行はるゝ運動の路は愈〻益〻多樣となるものなり。空間に於ける運動も亦之が爲に愈〻益〻擴張する範圍を供せらる、……是に於て乎自由は愈〻益〻動作を創造する能力を獲得し、その動作の內的非決定は、無數の物質の諸瞬間に分岐するに伴れて、益〻容易く必然性の網の目を通過するに至るべし。斯の如く、自由は、之を時間に於て考察しても、又之

を空間に於て考察しても、常に其の根柢を深く必然性の中に投じて、之を密接に織り成さるゝが如き觀あり。」（「物質と記憶」原書二七八、二七九頁）

ベルグソンは此の如く解釋して、その心身間に設定したる三種の對立を能く排去し得たりと思惟したり、否、寧ろ能く緩和し得たりと思惟したり。

要するにベルグソンの解決法は延長と非延長、等質的分量と異質的特性、必然性と自由との各對立を接近せしめんとするに在りて、其間に程度若くは多小稀薄となれる狀態のみを認めんと欲したるものなり、特に氏が對立物の間の中間物を設けんが爲に苦心慘憺したる跡を見れば、尚更に此感あり、然れども心身の二元論を極端まで力說したる後、此の兩對立をして最後に合致せしめたるにあらずや

と思はるゝ節あり、(引證は姑く之を略す) 少くも物心は其の根柢に於て其の性質を同うすと云ふ意見なるが如し。然れども本書の目的は氏の哲學を解説するに止まれば、之が批評は一切之を避けんとす。されば氏の新説がデカルトの手より受け取りたる心身結合問題を果して能く解決したるや否やは、之を賢明なる讀者の判斷に委せざるべからず。

第六章　増成問題の解説

一　増成(轉化)と反主知主義

ベルグソンは時間若くは持續の新定義を提げて、自由意志問題を解決し、物心相關問題を解決せんと欲したれども、未だ牛刀能く其の骨節を開て砉然たりと謂ふべからず。然れども増成問題に至りては、突如進轉して、吾人の從來生息し來り、思考し來れる世界と全く其性を異にせる新世界を現出するの觀あらしむ。ベルグソンは實に此の問題に於て啻にカントのみならず、ペリクレス時代より今日に至るまでの哲學者と全く反對の位地に立つに至れり。

惟ふに時間の新觀念の種子の中に包まれたる此の新世界は、讀者

には勿論ベルグソン其の人にも初めは斯く想像せられざりしならん。何となればベルグソンは其の初期の著書に於ては常に實在の哲學を唱道せるが如くなりしが是に至りて倐忽非實在の哲學を主唱し且つ反主知主義の眞相を赤裸々に露出するに至りたればなり。

此の豹變の理由は吾人之を尋究せざるべし、ベルグソン自らも『生命及び思考の運動は豫見すべからず』とて、之が尋究の無用を豫め吾人に示したり。故に吾人は唯だ純粹增成と反主知主義の不可知的世界に入りて、其の大要を解脫するに止まらんとす。

二　運動と增成(轉化)の意義

凡て基礎を觀照の事實に置き、以て議論の空中樓閣となるを避けんと欲する所謂自重の哲學ならば、宇宙萬有の全體を司配する世界

的事實なる運動に其の出發點を置かざるべからず。アリストテレスの言に曰く、「宇宙は動きつゝある物象の集合なり……之を知らざれは、宇宙全體を知る能はず」と。

ベルグソンも亦夙に、「哲學的思索は運動より出發すべきものなり」と道破したり。勿論氏のこゝに謂ふ運動なるものは、單に轉移（變位運動――位置の變化）を指したるのみにあらずして、變態（形態の變化）を指したるものなるや、言を待たず。前者は「表面上の運動」にして、後者は「深き奧底に行はるゝ運動なり」されば玆に謂ふ運動は單に或る物が位地を轉ずるが如き現象を指すものにはあらずして、内外一切の觀照、彼の意識的内省までも包含するある普遍的現象、換言すれば位地にも、特性にも、分量にも、又彼の宇宙間に動きつゝある萬有の本質にも作用を及ぼす變化の現象を指して

云ふものなり。因て運動の語は（特に本章に於て）轉化若くは增成（將成、能成――若し此の如き熟字ありとせば）の意味なりと知るべし。

三　運動に關する先哲の三大解說

然れども哲學者の任務は單に運動と云ふ大現象を承認し若くは點検するに止まらず尚進んで之を解釋し、其の合理なることを吾人に示さゞるべからず。

古來之を解釋したる學說の中に、主要なるものは唯だ三種あるのみ、今之を敍說して以て、ベルグソンが其の何れに左袒したるかを示さん。

第一の解釋はエレア派の解釋にして、その最も有名なる註解者は

ツェノーンなり。同派の說は不可能と幻想との事象を取扱ひたるものにして、運動の客觀的實在を否定したるものなり。古來或種の哲學者に取りて、幻想は、彼等が解する能はざる事象の好箇の解釋となりたるものなり。然れども彼等は幻想そのものを解釋せざるべからざるに至りて、他の困難に逢著するに至れり。乃ち不可解更に不可解を生じて窮極する所を知らず、遂には祕義を解釋するに、尙更に深き祕義を以てして、不明瞭の點を益〻不明瞭ならしむるに至りたり。

アリストテレスはツェノーンの運動に對する有名なる四大論證を詳しく敍述し、其の詭辯の取るに足らざることを巧に論駁し進んで此の如き論證を鼓吹したる先天的方法に對して一大打擊を加へ、且つ論證のみを事として、感覺（官能）の明證を蔑視するが如きは、知

慮の偏狭なるを示して、堅實なる學者の事にあらずと附言したり。
是に由りて之を觀れば、單純なる思索主義を打破して、觀照の研究法を開きたる哲人（アリストテレス）の説の如何なりしかは、未だ之を叙説せざるうちにも略ぼ推知するを得べし。

第二の解釋はヘラクリトスの解釋にして第一の解釋と正反對なり。ツェノーンは運動の實在を否定したるに引き換へて、ヘラクリトスは運動のみの實在を主張したり。ツェノーンは理知の證明を強むる爲に感覺（官能）の證明を拒否したるが、ヘラクリトスは反主知論の嚆矢にして、感覺の實證的觀照のみを事とし、理知の證明を當時既に疑問に附し初めたり。前者は轉化の道中に在る一種の非實在なる運動を否定して、隱見出沒する現象の渦中に留存する實在を尚一層明に肯定せんと努めたるに反して、後者は留存するものを否定して、

經過する運動のみを承認せんとしたり。ヘラクリトスは實在なるものはなくして、單に運動あるのみ、增成あるのみと主張したり、換言すれば、將に成らんとする道中に在りて、永久成ることなき一種の非實在あるのみと主張したり。是れ實に永久變化して、到底捕捉すべからざるものゝみを承認したるものなれば、明に非實在の哲學と謂うて可なり。

此の極端なる兩解釋の「中に位せるもの」は、即ち是れアリストテレスの解釋にして、一種の折衷說の裡に如上二種の說を融合せしめんと計りたり。ア氏の說に曰く、感覺をも、理知をも共に採用するを得べきに、何故感覺をのみ、若くは理知をのみ採用するか、此の二種の知識機關は天がひとしく之を吾人に賦與したるものにあらずや、何故運動と運動する實在とを同時に承認せざるや云々と。

運動と實在との二種の觀念は、互に排除せざるのみならず、寧ろ相俟ち相扶くるものなり、動作する者なき動作、運動する者なき運動、變化する者なき變化等は、意識すべからざるものなり。されば現象は實在の表現に外ならず、流動若くは運動は靜物又は固定物の放射に過ぎず、經過する果は留存する因の結果なりとは、アリストテレスの唱道したる所にして、常識の最も入り易き言なりとす。

さればアリストテレスは實在を二種の狀態に於て意識したり、一は其の動的展開の狀態に於て、一は其の種子に包含せらるゝ狀態に於て。前者は現動的、後者は能動的にして、能動より現動に移る過程を運動又は變化と稱したるが、即ち是れ進行中の增成なり。

此の如くにして運動の解釋は完全となれり、何となれば問題中の二要素の何れをも遺失せざればなり。動く者は、ヘラクリトス之を

否定し、運動は、ツェノーン之を否定したれども、此の二ツの與件をひとしく承認して、之を合理的綜合の裡に合せたるものは、即ちアリストテレスなり。

四　ヘラクリトスの說とベルグソンの說

以上三大說の中ベルグソンの左袒する所のものは何ぞや、勿論第一の說にあらざるや言を待たず、第一の說はツェノーンの說なると同時に、デカルト派の機械論者の說にして、其說に據れば世の始より『萬事は皆與へられたり』と云へば、世には新らしきものは起らず、單に新らしき結合を見るのみと云ふ說なり。此說は言ふ迄もなく觀照の事實に戻るものにして、ベルグソンが極力之が排斥に努めたるは、當然なり。機械論と原子論との反駁は、恐くはベルグソンの議

論中最も光彩を放てるものならん。
然らばベルグソンは第三の說即ちアリストテレスの說に贊同したるかと云ふに、然らず。ベルグソンはアリストテレスの現動能動の說を詳しく攻究せざりしものゝ如し。何となれば現動能動の說を解すること甚だ粗笨なればなり。（『創造的進化』プラトン、アリストットの條參看）且つアリストテレスの素材を形而上學に於ける零と誤解したり。

『此の零（形而上學に於ける零）が觀念に合すれば、恰も數學的の零が一と合したるときの如く、之（觀念）を時空（時間と空間）の內に增加す……されば變化を生ずる爲には何等か消極的のもの、少くとも零を觀念に添加せざるべからず。』（『創造的進化』原書三四二頁）

變化又は連動を此の如く解釋するは、如何にも粗笨にして、ベルグソンにもふさはしからざる事なり。アリストテレスの所謂能動より現動に、種子より植物に、卵より雛兒に轉化する事は、ベルグソンの所謂零を觀念に添加する事と毫も類似する所なし。此の如く誤解したる、ベルグソンが第三の解釋に贊同せざりしは、怪むに足らず。

さればベルグソンの採用すべきものとしては第二の解釋即ちヘラクリトスの説あるのみ、此説は古來思想史上には餘り重要視せられず。有力なる祖述者を得ざりしかば、其の説も之が爲に殆ど湮滅に歸せんとしたりしが纔にヘーゲルに至りて之を復興せんと試みたれども亦其效果を見ることなくして了れり。ベルグソンが再び之を企圖して成功したる程度は左の解説によりて之を知るべし。

五　ベルグソンの增成說(轉化說)

ベルグソンの說がヘラクリトスの說にして、ベ氏の創造的進化の哲學がヘ氏の純粹轉化の哲學に酷似する事は、否定すべからざる事實なり。而してベ氏の說は實在の否定にその基調を置くもの即ち固定物、恆久物を否定し、之に代ふるに永久の流轉と不斷の增成(轉化)とを以てせんと欲するなり。

『物質にせよ、精神にせよ、實在は吾人の眼には永久の增成(不斷の轉化)として映ず。實在は斷じて現實に於ける既成の或物にはあらず。吾人は吾人の意識と吾人とを遮る被障を取除くとき、吾人の精神に就て直觀する所のもの實に此の如し。理知や感覺(五官)が利害の觀念と離れて端的に物質を直觀するとき、此の二者

の物質に就て吾人に示す所のものも、亦實に此の如し。』（一）創造的進化』原書二九五頁）

ベルグソンは『創造的進化』の巻頭より既に其の主義を明に言表せり、即ち、『存在すと云ふ精確なる字義』に關し、自ら之に解答を下して曰く、『存在するとは、變化する事なり、絶えず變化する事なり』と、『若し心的狀態が變化を缺くに至れば、その持續は流轉を止むるに至らん』（二）『實際は人は間斷なく變化しつゝありて、狀態そのものも既に一種の變化なり』、是故に左の如き語句はベ氏の書中到る處に散見す、『吾人の存在の流動、（三）物の間斷なき流動、（三）實在は流動なり、『實在は單なる潮流、不斷の流れ、一種の增成に變ず、（三）實在は永久の增進なり、終りなく繼續する創造なり、（三）實在は物と云はんよりも、寧ろ一種の流れなり、（三）一種の過程なり、（三）一種の運動なり、（三）物はなし、

作用あるのみ。』

是故にベルグソンの說は確にヘラクリトスの說なり、ヘラクリトスの說に曰く『萬有は流轉して、一物も留存せず』と、現代主義者も亦之を採りて『存在は運動なり』と唱道す。

果して然りとせば、此種の論者は孰れも皆ヘラクリトスの有名なる例を承認せざるべからず、卽ち、人は同じ川の流れに再び浴せず、何となれば此の如き永久の增成（轉化）に於ては、何物も留存せずして、河川も、浴者も、皆刻々に變化すればなりと。

ベルグソンの說も亦此の如くなりとせば、常識と、在來哲學者の諸說とに比して、頗る極端に失するものなりと云はざるべからず。勿論萬有の動きつゝある事は事實なれども、煎じ詰むれば、動きつゝある物に於て、その一半は變化すれども、他の一半は留存すと云

ふ意味に於て眞なる也。而してその變化する部分は、常に物の偶有的及び表面的部分にして、その深く且大切なる部分にはあらず、例へば形狀を變ずるとか、若くは空間に於て位置を轉ずるとかに過ぎず。若夫れ物それ全體が同時に變化すと云ふに至りては、最早無意義の言と云はざるべからず。若も物の持續なるものが、その何れの部分も同一に留存せずと云ふ意味ならば、隱見出沒しつゝある一種の幽靈の如きものとならん。此の如き隱見出沒は或は新らしき現象を生ずべけれども、古き物の持續若くは恆在を意味するものにあらず。

されば物に變ずる方面と變せざる方面との二面ありと云ふ事は、變化を有意義ならしむる第一の條件なり、是に於て乎アリストテレスは實質と形式との有名なる說を立てたり、げに此說によらざれば

吾人は變化を解釋すること能はざるなり。

六　ベルグソンの増成(轉化)說と吾人日常の實驗

ベルグソンの増成說は之を物質界に徵して、その何れの點に於て實際の經驗と相異なるかを點檢すること、左程難事にあらず、されば吾人は物質界の事は語らざるも、讀者自ら之を理會することを得べし。然れども之を精神界、切言すれば、意識界に徵すれば、ベルグソンの說と日常の實驗との距離を識別する事は、容易の業にあらず。ベルグソンは精緻なる心理學者なり、其の觀察は深く心理の奥底に透徹して微に入り、精を穿つ。氏が純粹増成說の主唱者として獨得の才を發揮したるは、正に此の方面に在り。故に吾人は先づ氏

が『意識的生命の流れ』に關する有名なる分析論を聽き、然る後日常の實驗に照らして、解說すべし。

ベルグソンは『創造的進化』の劈頭に道破して曰く。

『諸ろ〳〵の感覺、感情、意欲、觀念など、是れ實に吾が存在を區劃して、交々之に色彩を與ふる變化の諸相なり。故に吾は間斷なく變化しつゝあり。然れども、斯く言ふのみを以て足れりとすべからず。此の變化は、普通人の考ふるよりも尙一層根本的なり。……余は吾の變化しつゝあるを語れり、然れども此の變化は一の狀態より次の狀態に移る行程に存するが如くに思はる。各狀態を別々に考察すれば、其の生起する間は其儘に（變化せずに）留存するが如く思はれざるにあらざれども、少しく注意して觀察すれば、如何なる感情も、如何なる觀念も、如何なる意欲も、刻々に變化

せざるものなきを見るべし。若し心的狀態が變化を缺くに至れば、その持續は流轉を止むるに至らん。試に最も固定せる內的狀態、即ち彼の靜止する外物の視覺に就て考察せんに、外物は同じく留存するとするも、又吾は同一側面より、同一角度、同一光度に於て之を眺むるとするも、吾腦裡に映ずる物象は一瞬間前に映じたるものと早や既に相異れり、その映象の經過すること僅か一瞬轉に過ぎずとするも亦然りとす……實際人は間斷なく變化しつゝありて、狀態そのものも既に一種の變化なり……されば精神生活の一見斷續的に見ゆるは、吾人の注意が斷續的作用の系列に於て之に集中するに起因するものにして、實は一種の緩やかなる勾配に外ならず、而かも吾人は吾が注意作用の斷線を辿りて、楷子の一楷段宛を望見するが如き感をなすものなり。勿論吾人の精神生活

には豫期し難き事の多きや、言を待たず……此等は合奏の調音中に時々際立つて高まる太鼓の響に外ならず。吾人の注意の此響に集中するは、吾人の注意を喚起すること最も著しきが爲なれども、實は此等は各々吾人の感覺し、思考し、欲求しつゝある一切、結局、吾人の各瞬間に存在しつゝある一切を包含する一種の流動圏中最も著しき一點に過ぎず。此圏の全體こそは實際吾人の心的狀態を形成するものなれ。而して心的狀態を此の如く定義すれば、その決して個別的要素にはあらずして、寧ろ相互に間斷なく流轉して繼續するものなりと謂ひ得べし。」（「創造的進化」原書一頁——三頁）

此の心理的描寫は實に巧妙を極めたるものと稱すべし。然れども日常の實驗に比して、仔細に之を點檢すれば、尙批評の餘地なしと

せず。

例へば畫家がそのモデルを凝視するとき、その凝視は一瞬間を經過するうちに早くも既に相異なれりと云ひ得べきや、その内には畫家それ自らが、若くはモデルそのものが既に一瞬間を經過するものなれば、その爲に凝視も亦相異なれりと云ひ得べきか。凡そ物はその變化が偶有的に止まる間は、依然同一に繼續するものなり、就中その偶有的變化が感知せられざる程極微極小になるときは、尙更に然りとす。試に思へ、吾人は歩くが故に若くは散歩するが故に、人格を變化すと思はるべきや。

是故に實在に於ても、存在の樣式に於ても、須らく先づ本有的のものと偶有的のものを區別せざるべからず、ベルグソンは此の區別を忘れたるが故に、その精緻なる議論も、遂に肯綮に中らざること

あり。

吾人は感覺も、感情も、意欲も、觀念も、その變化が偶有的にして、特に感知すべからざるほど微小なりとするときは、其等は矢張り同一に留存して繼續すと結論せんとす。之に反して一瞬間も經過せざるうちに早や既に變じて同一のものにあらずと主張するが如きは、其等の存在をも不可能ならしむる議論なり。何となれば如何なる感覺又は感情と雖、幾分かの時間若くは幾分かの持續を要するものにして、分秒の差をも容れざる絕對的同瞬間の感覺若くは感情なるものは、殆ど不可能なればなり。

吾人は變化しつゝも、尚同一に留存する者なり。即ち人には過ぎ去る所のものあるも、その全體が皆過ぎ去るものにあらず。その過ぎ去る所のものは、人間の中に於て決して本有的のものにもあらざ

れば、大切なる所のものにもあらず。その證據には先づ第一生の方針を定むるもの、即ち幸福、完全、生殖等に向ふ傾向は普遍的法則にして、此の法則は、生命進化の如何なる程度に在りても、永久不變なり。然れども尙深く吾人の意識の奧底に入りて考ふれば、吾人に吾が人格が何れの年齡に於ても、又如何なる變遷に際しても、同一に恒在するを看取するに難からず。此は實に現象の間斷なき流轉と相反的に對立する部分なりとす。是に由りて之を觀れば、變化は表面に止まりで、根柢は同一に留存することを知り得べし。

要するに變化しつゝある現象の下に、固定しつゝある一の實體(若くは本體)ありとするは事實に近きが如し、而して羅甸語の『シュブスタンシア』(Substantia)の語はよく此の事實を語れり、『シュブスタンシア』は『スブ・スタンシア』(Sub-stantia)にして、『スブ・スターレ』(sub-

stare）と云ふ動詞より出でたる言葉なり、「スブ・スターレ」とは「下に定立す」換言すれば、變化しつゝある現象の下に依然同一に固定する實體の意味なり、蓋し眞に庶幾からんか。

第七章　進化問題の解說

一　在來の進化論に對する駁擊

凡そ進化論に對する反駁者中、最も勇健にして興味あるを恐くはベルグソンの右に出づる者なかるべし、批判の峻嚴なること、彼等をして殆んど顏色なからしむるものあり。

就中スペンサーを批評すると、最も苛酷を極め、序論よりして既に一大痛棒を之に加へたり、『此の虛妄なる進化論は既に進化したる現實在を幾多の斷片に分解して、後再び此等の斷片を總合し、因て以て進化其物を說明せんとするに在り』と曰ひ、卷末に至りてスペンサーの採りたる方法を嘲笑的に兒童の遊戲に比して、『出來上り

たる繪をカードに貼付け、其儘それを裂きて若干の斷片となし、然る後其の斷片を接ぎ合せ、此の如くにして出來上りたる繪を如何にも己れ自ら造り上げたるが如く思ふ兒童に似たり』と曰へり。

フィヒテの主義に對しては曰く『フィヒテの試みは、事物の眞の秩序を重んずるの點に於て、スペンサーに比すれば多少哲學的なれども、吾人は之によりても理知の發生に就て殆ど何事をも知る能はず。フィヒテは思想より出發してその實在の凝縮したるものを理知なりと言ふ。然れども二者何れの場合に於ても理知は初より與へられたるものと見做せり』とて、理知の發生の由來を明にせざるを非難したり。

ダルウィンの進化論も、ラマルク派の主義も一々批判の俎に上せたるが、煩冗を避けんが爲に其中より最も趣味ある特殊の評論のみを掲げんと欲す。

『四圍の境遇に順應することが、進化の必要條件なることは、吾人も亦之を承認す。種屬がその生活條件に順應すること能はざるときは、當然消滅すべきことは明瞭なり、然れ共、外部の境遇を以て進化の必要條件なりと認むることゝ、之を以て進化の指導的原因なりと主張することゝは、其間におのづから區別あり。後者の說は卽ち機械觀の所說なり。機械觀は絕對に原始的衝動の假定說を排除す、(玆にいふ原始的衝動とは、生命をして、次第に複雜となる形態に於て、益々崇高なる歸趣に向上發展せしむる內的衝動を謂ふ。)然れども此の如き衝動の存することは、明々白々たる事實なり……順應は進化運動の曲折を說明することを得べしと雖、その運動の一般的方向を說明すること能はず、況や運動そのものをや。一都市に達する街道は、丘陵の起伏によりて曲折し、地面

の偶然的事變に順應せざるべからざれども、地面の偶然的事變は決して街道の原因にあらず、之に一定の方向を與へたるものにもあらず。

是れベ氏が在來進化論者の所謂環境順應說の不充分なるを論評したる一節にして實に其要を盡したる決裁的批判なり。第二の遺傳說に對する評論も亦之に讓らず。茲には煩を避けて其言を引用せざるも、要するにベルグソンの進化論に對する批評は、實に肯綮に中れり、然れども破壞は易く、建設は難し。吾人はベルグソンが在來の進化論を倒して、その代りに自ら何を建設したるかを攻究せざるべからず。

二　新舊進化論の異同

ベルグソンの言に據れば、須らく先づ第一に證明せざるべからざる事柄を證明せずして、豫め之を假定するが如き世の所謂進化論は虚妄なる進化論なり。眞の進化論は實在そのものゝ發生の由來と生成の理由とを説明せざるべからずと云ふ。然らばベルグソンの所謂眞の進化論は如何なるものなるかと云ふことが、本項解説の主要問題なり。吾人は成るべく之を明確に解説せんが爲に、直接ベルグソンの思想そのものを把握紹介するを旨として、必要なる場合の外は氏の言を一々引證するの煩を避けんと欲す、(但し後の第十二章生命進化論は全章ベルグソンの言を以て組立てたるものなれば、玆に解説する所は、一々之を同章に參照するの勞を取られんことを讀者に請はざるべからず。)

先づ第一ベルグソンは一切萬有に共通する普遍的進化の原則を探

用したることを記せざるべからず。（然れ共吾人の目撃する實際の事實は、動物や植物などの幾多原型の部分的進化を示すものゝみにして、無機體の分子より高等動物なる人間迄に人間の智識（理知）迄に發展すと云ふ普遍的進化の假說を肯定せしむべき事實の如きは吾人未だ知らざる所なり、科學的實證も亦皆此說に反對す）

然れどもベルグソンは飽迄も此原則を主張して止まず、果して然りとせば、普遍的及絕對的進化の假說は、宇宙創造の歷史より神を放逐せんとする議論を主張するか爲に止むを得ず標榜せざるべからざる、謂はゞ一種の看板の如きものなると之をベルグソンの言に徵して明かなり。

三　上來吾人（ベルグソン）は諸ろ〳〵の樣式の進化論を吟味し、此等の進化論が孰れも同一の困難に逢着して、之を解決すること能

はざるを證明したれども、吾人は之が爲に此等の進化論を全く排斥するの意にあらず云々』(「創造的進化」一九二頁)

由來觀之、ベルグソンは一種の新假説を立て、氏の所謂眞の進化論なるものを主唱し、以て、從來の進化論の逢着したる困難を排除するに努めんとしたるものなり。

然らば其困難とは如何なるものなるかと云ふに、第一は理論と事實とを合致せしむるの困難是なり。此の困難は進化に關する史料缺乏の爲、詳しく動物進化の跡を明にすること能はざるより出づ、(同書一四一頁參看。)故に此場合精確を旨とする科學の代りに、一般の原理を取扱ふ哲學に訴へて、之が解決を求むるの外なしと云へり。

第二の困難は理論と因果律とを合致せしむるの困難なり。在來の論者は多く皆、凡そ物の進化するや、豫め伏能的(潜在的)に包含

せるものにあらざる時は、何物をも生起せしむること能はずと假定したり。されば進化の始に於て、一切の状態は既に伏能的状態（潜在的状態）に於て、與へられたるものなりと前提したり。例へば猿と人との如き相類の種屬は、未だ人にもあらず、猿にもあらざる未定形狀態に在りたる一種の共通的祖先より出で來れるものにして、唯だ其の進化の經路（切言せば進化の方向）を異にしたるまでなりと假定したるが如き其一例にして、種は伏能的に類を包含したることを假定するものなり。故に種の起原が精確ならざるより、隨て各種屬進化の經路に關する解釋一定せず、異論百出今日の科學にては到底之を解決すること能はざるなり。

されば因果律などの爲に拘束せられて萬有の進化は、皆て其内に包含せられたる種子より發展し來りたりと云はんよりは寧ろ素材の

如何を問はず一切の萬有を創造するを得たりと假定するの簡單なるに如かずとは、是れベルグソンの意見なるが如し。何となれば、ベルグソンの所謂進化は、單に進化にはあらずして創造的進化なり、一種の原始的運動の力によりて永久に生起作用を行ひ行く創造それ自らなり、『創造的進化』の語は自家撞着するが如くなれども、極めて有意義なり。既に創造的進化なる以上は、共通的祖先の如きものを設くる必要なし、類の因て出づる種的原型を立つる必要もなし、不斷の進化、永久の創造の假説によりて『萬有が萬有より生起し得る』譯なり。

此の如くベルグソンは從來の進化論者の撞着したる難關を打破し、地球は勿論、太陽系裡の遊星界に至るまでも（『創造的進化』二七八頁參看）隨處去來し得る行動を取らんとしたる者なり、吾人は左に

項を分けて更に之が詳論細説を試んと欲す。

ベルグソン「進化論」の詳説（一）

『太初に時間あり、時間は活動力を具する靈的元氣なりき、』此はベルグソン一人の創世紀なり、ベルグソンが時間に活動力ありとしたるは、活動力なきものは、何物をも創造せず、何物をも創造せざるものは何物にもあらずとの意見なればなり。而して此の如き時間の定義は『不可能』なりとしたり、蓋し彼に據れば時間は直觀の結果なれば、如何なる理知の範疇にも入らず、然ども時間が過程に於て遂行する作用は、或は之を『意識』と呼び『超意識』と稱し、時には之を『生命』『生の飛躍』（生命の衝動）『生命の流れ』『不斷の創造』、『創造の要求』『創意』『選擇』『自由』『直觀』『意望』、などと稱したるを見る。（此等の語を記憶して、ベルグソンの著書を讀まば、之を解する

に大なる利便あるべし）

兎に角時間は一種の宇宙的勢力なり、若くは一種の進化力なり。然らば此の原始力の進化は何等の原因もなきに、如何にして突如發現するを得たるかと云ふに、『或時或處に或一種の著しき流れを生じたり、是れ即ち生命の潮流にして、此の潮流は交る〳〵造り上げたる諸生物體の間を貫通して、年代に年代を重ねつゝ、遂に幾多の種屬に分れ、又幾多の個體に散じ、而も其力毫も衰へず、寧ろ流れ進むに從て益〻強まり行きたり。』（同書二八頁參看）

『此の進化の進展は決して單純にはあらざりき。砲丸の如く單一の彈道を辿らずして、さま〴〵の方向に分岐したれば、其の進み方は之を爆彈に譬ふべし、突然爆發して幾多の碎片となり、その碎片も亦矢張り爆裂彈たるの故を以て更に細かに爆裂す、かくて之を繰返

して永劫盡くる期なきが如き觀あり……爆彈の爆發するや、その如何に碎くるかは、其中に在る火薬の爆發力と金屬の之に對する抗抵力とによりて之を說明すべし。生命の分裂して或は個體となり、或は種屬となりたるの狀も亦此の如し、惟ふにこれには二種の原因あり、無生物が生命に及ぼす抵抗力と生命が其內に具する爆發力と即ち是なり。」（同書一〇七、一〇八頁參看）

吾人はベルグソンの所謂無生物の抵抗に就ては、本書第十二章「生命進化の分岐」の條に詳しく之を述べたり、（其條參看）、兎に角生命の衝動若くは生の躍進なるものは、假令單一のものなりしにも拘らず、進化の二大本線に分れて發展を遂げたり、植物界と動物界即ち是なり。而して『進化の路がさま〴〵に分れ、分れたる要素はそれぞれ單獨に進化し行くにしても、而も全體の運動の繼續する所以は、

それ等が皆唯一の全體より別れたるものにして、いづれも全體の原始的衝動力の幾分づゝを具へ、各部分が其中に何れも、原始的全體の幾分を保存するが爲なり、而して斯くそれ〴〵單獨なる諸部分の間にも尚共通の要素ありと云ふことは、例へば甚しく相異なる生物と生物との間にても、尚同樣類似の器官ありと云ふ事實によりて明に證せらる云々』と。(同書五八頁)、果して然りとせば、さま〴〵の岐路の間にも原始的衝動力は尚依然として繼續しつゝあるものなり。

斯かる根本的類似性の例證として、ベルグソンは曰く『生殖作用は植物に取りて或は一種の疣贅に過ぎざるかも知れざれども、動物に取りては心要缺くべからざりき、動物を驅りて生殖作用を營ましむる衝動力は、動植兩界の分岐以前より存したる原始的及び本源的衝動にして、植物も亦此の衝動力に驅られたるに相違なし。植物の

繁茂して益〻複雜に赴く傾向の如きも、亦實に此理に因ると謂ふべし。動物は絕えず活動の範圍を擴めて、益〻其の活動を有効ならしむる必要に迫らるゝが故に、此の傾向は本來動物に必須的のものなれども、固着性と無覺性とに處せられたる植物が、尙動物と同じく此の傾向を示す所以は、畢竟最初同じ衝動力より出發したるが爲に外ならず。」（同書一三〇頁）

ベルグソンの論證の價値如何は姑く之を措き、兎に角吾人は生命の原始的衝動力が動植兩界に分岐したりと云ふ事實を解說せざるべからず。

之を理會するが爲には、先づ植物と動物の類似と相違とを知らざるべからず。而かも兩者を確定的に區別する特徵はなきも少くも左の數個事實によりて之を區別するを得べし。

第一營養法。植物は其の養料を、就中、炭素及び窒素を、直接礦物質より攝取するに引き換へて、動物は植物より之を攝取す。然れども此の法則にも例外あり、何となれば植物にして動物の如き營養法を取るものあり、例へば毛氈苔の如き是なり、尚其外にも蠅取草の如き食蟲植物のあることも、吾人の常に耳にする所なり。

第二營養法の結果として植物には固着傾向、動物には可動傾向あり。植物は自ら養ふが爲に、地を換へる必要なし、必要なる養料は直に其地の水分より吸收するが故に千秋萬古其地に固着す。動物は之に反して養料を他に求めざるべからざるが故に、勢ひ身を動かして地を換へざるべからず。植物性細胞が纖維素の膜を以て蔽はるを見、又動物が餌食を認むる爲には知覺機官を備へ、之を把捉するが爲には運動機官を具するなどを見れば、這般の消息を語りて餘りあ

り。最も高等なる動物に至れば運動と知覺とを連絡せしむる神經系統を具備し、最も劣等の動物に至るまで、例へばアミーバの如きは、水中の有機物質を捕へんが爲に便りなげに僞足を動かす等、亦以て之が例證として見るべし。此の法則にも亦例外ありとするも、兎に角特徴の一般性を妨ぐるものにあらず。

然りと雖此固着傾向と可動傾向は、未だ以て表面的徴候に過ぎず、尚他にこれより深き傾向あり、意識の覺醒狀態と睡眠狀態是なり。

第三可動性と意識との間には確に一種の關係あり。意識は可動性の原因なるか、將た結果なるかと云ふに、原因と云ふも可なり、結果と云ふも可なり。運動を起すものは意識なれども、意識を奬勵して之を發展せしむるものは運動なればなり。ベルグソンは此の見地より觀て、動物を定義するに感覺性と覺醒意識とを以てし、植物を

定義するに無覺性と睡眠意識とを以てせり。（第十二章『植物と動物』の條參看）

ベルグソンの意見によれば、『地上に固着する植物は意識的活動の方面に發展すること能はざれども、之が爲に意識なしと云ふべからず、意識は單に昏睡の狀態に存するまでなり。而して植物として意識のある例を見出さんとせば、彼の藻類の游走子の如きものに就て之を見るべし。

兎に角生命の衝動力は二筋の潮流に分れて、一は起動的活動の方向に進展し、隨て其意識益〻强度を加へ、他の潮流は之と反對の方向を辿り。後者は植物界を生じ、前者は動物界を生じたりと云ふ。

然れども此の如く分岐したる理由は如何。殊に動物植物の二界に分岐したるのみに止まらず、各界に於ても尚幾多の個體に分岐した

る理由如何と云ふに至りては、ベルグソンと雖、創造の神秘に參して之を解決する能はず、されば其解答の如きも、寧ろ奇說と稱すべきもの也。

『そは原始的衝動力が漸次にさま〲の傾向を生じ、此等さま〲の傾向は相互に扞格を來たして多種多樣の進路に分れざれば發展すること能はざりしが爲なり』と云ふ。『然るに此等の傾向の中に、二つの相反せる根本的傾向ありたり、一は活動に向ふものにして、一は靜止に傾くもの、隨て前者は『勤勞』に傾くものにして、後者は『遊惰』に傾くもの、第一の傾向は動物界を生じ、第二の傾向は植物界を生じたり』とぞ。

『未だ進化せざる生物に於ては、此二傾向は互に確執することなくして共存したれども、そが次第に生長するに伴れて遂に分裂を來

たしたり。是に於て乎一方には固着性と無覺性とを具したる植物現はれ、他方には可動性と意識性とを備へたる動物出づるに至れり。何故此の二傾向が分裂を來たしたるかを說明するに於ては、必ずしも之を神祕力に待つの必要なし。元來生物は自然に己に最も都合好き方に傾き、植物と動物は其必要とする炭素と窒素とを得るが爲に各自都合よき方道を選びたりと言ふを以て足れりとす、同一の衝動力が動物には神經と神經中樞とを具せしめ、植物には葉綠素的機能を具せしめたるものなり。』(同書一二三、一二四頁)

此の說明の當否は別問題として、其奇警なるを見るべし。尚ベルグソンは此の生命の衝動力につき說明して曰く、

『畢竟生命は出來得る丈け多く活動せんとする傾向あれども、個々の種族は出來得る丈け最少量の努力を以て進まんことを欲す。……

生命は勿論無限に發展せんとする活動なれども、生命の貫通する個々の種族は己れ一個の利便のみを計り、最も勞力の少き方面に進むものなり……されば生命の働きと個々形態の働きとは全く相異る、否往々相矛盾する二種の活動なり。云々。』（同書一四〇頁）而して同一の生命衝動力が、此の如き反對不調を來たす原因を解釋して曰く、

『生命そのものの努力とその個々の表現とが互に相調和せざる所以は、畢竟兩者の節奏の全く相異なるが爲なり、全體の生命は活動性其のものなれども、個々の表現は容易に此の活動性を容れずして絶えず躊躇す。前者は飽迄も前進せんとするに反して、後者は好んで其場に足踏みせんとす。全體の進化は直線的なるに引き換へて、個々の進化は一種の循環的進行なり。個々の生物體は恰も

彼の塵埃が疾風に煽られて渦巻きかへるが如く、生命の大風に煽り立てられて、同じ所を回轉す。故に個々の生物は比較的に固定するものなり、又一見不動と見えるが故に、吾人は動もすれば之を一種の物と見做して、進歩と見做さゞるの恐あり、然れども此は其形態の不動そのものも運動の輪廓なることを忘るゝの然らしむる所なり。』（同書一三九頁）

要するに生命そのものと個々の表現との不調原因は律呂の相異なるに起因すと云ふ說明なり。然れども生命の大衝動力は遂に萬障を排して進化に進化を重ねたる結果、高等動物なる人間までに進展し來れりと云ふ。（此等に關する詳說は第十二章に於て述ぶべし）

ベルグソン「進化論」の詳說（二）

進化はこれのみに止まらず、生命衝動の有機的及び可見的發展の

背後に、最初その生命衝動の裡に混同したる二種の不可見的能力の兩々相並行して發展したるを見る。卽ち是れ本能と智識(理知)是なり。

而してベルグソンは此の二種の能力の定義を不可解なりとし、その代りに此の二力進展の方向を描寫せんことに努めたり。

『アリストテレス以來多數の自然哲學者の大迷妄は、植物的生命、本能的生命、及び理知的生命を以て、同一なる傾向の繼續的に發展する三階段と看做したる點に在り、然るに實際此等は一活動の生長するに從つて互に分岐したる三方向を表明するに過ぎず。此の三者の區別は强度上の區別にもあらざれば、程度上の區別にもあらずして、性質上の區別なり。』(同書一四六、一四七頁)

ベルグソンの說は眞に近きが如し。先哲が多く誤りて、智識と本

能とを以て同じ性質の活動と見做し、前者を以て單に後者より程度の一段高きものとなしたる理由を考ふに、こは此の二者の活動がひとしく凡ての動物に通じて認めらると云ふ點に在りたるが如し、何れにしても、謬想はたしかに謬想なり。

二、智識と本能とは一面に於て反對的なれども、他の一面に於ては相補的なり、此の二者は本來互に融合的なりしが爲に、今尚多少共通の起源の痕跡を留め、決して截然獨立して存在したる例なし。植物と動物との二傾向が本來融合的なりしが爲に、其間に截然たる分離の起らざる如く、智識と本能との關係も之と同じく、本能の俤を少しも存せざる智識は之なく智識の縁暈に圍繞せられざる本能も亦之なし、然れども此の智識の縁暈が種々の誤解を來たしたり。本能が常に多少知識的なるの事實より本能と智識とは同性

質のものにして、兩者の差は程度のみに過ぎずと思はるゝに至れり。然れども實際は兩者互に相補ふものなるが故に、互に相伴ひ、又互に相異なるが故に、相補ふものなり。』(同書一四七頁參看)

尚ベルグソンの說によれば、智識は人工物、特に器具を製造する能力にして、その製造を無限に改造し行くものなれども、本能は有機的機官を利用し若くは構成する能力なりと云ふ。(智識と本能との類例及び長短に就ては、第十二章に詳なり)、

ベルグソンが人獸の根本的區別を感知したる事も特筆に値す。(然れども吾人は『感知したり』と云ひて、『精確に證明したり』云はざることを記憶せよ) 又人間の腦と猿のそれとを研究し、意識は腦より生ずるものにあらざるを論じ、人獸の知識の根本的に區別あることを示したる事も亦敬服すべき創見なり、(詳しきは第十二章參看)

最後にベルグソンは智識が人間に到りて初めて完全となり、意識もたゞ人間に至りて、始めて自由を贏ち得たることを述べたる上、實に左の如く論結して曰く、

『要するに地上一切の生命活動は、人間を目的とすと云ふも差支なし。但し斯く言へばとて、畢竟は一種の比喩に過ぎず。生活現象に於ては目的と云ふが如きものなし。實際在るものは、たゞ存在の潮流と之に反抗する潮流（物質の潮流）のみ。此の二大潮流の衝突より生命全體の進化出づ。』（同書二〇〇頁）

第八章　ベルグソンの反主知論

ベルグソンの哲學と在來の哲學と大に其趣を異にする最も著明なる點は、其の反理智論（反主知論）に在りとす、然れども氏の反理知論は一種特別の性を帶び、哲學史上唯一無二にして、彼の經驗派は勿論、ブラグマチストなどゝは大に相異なり。之を明に知らんと欲せば、氏の理智に對する批判より入らざるべからず。

一　主知論者の感覺世界と知識界

抑々理智論の完全なる型式は、吾人之をプラトーンの哲學に於て見る、プラトーンは流轉する感覺界の種々相を以て思索すべからざるものとなし、殆ど實際に存在せざるものゝ如く見做したり、而し

て實在の圓滿性は單に之を永久不變なる知識界に在りとなし、此の思想を以て哲學的觀想唯一の對象となしたる事は、人の能く知る所なり。感覺界と知識界とを區別したる議論と、認識の方法として純粹思索をのみ重じたる議論とは、爾後一切の哲學的觀想を支配したり。勿論後年實驗科學の進歩發展が、感覺の重要なることを知らしむると同時に、知識を獲得する上に於て經驗の職能の極めて大なるをも知らしめて、多少純粹思索の專横を制限したりと雖も、大體の傾向としては依然として、知識把捉に於ける唯一の利器として繼續し來れり。カントの如きも、初めは兩界の區別を立てゝ、實驗界に對する思索の正當なる使用を極限したれども、其後に至りては實驗界全體を擧げて之を思索に委し、宛も其が特別固有の領域なるかの如くに見做したり。

二　ベルグソニズムの物質界と生物界

古來の哲學者が感覺界と知識界とを區劃し、萬有の原理を認識するには、知識界の主動力、即ち理知を以てせざるべからずと主張したるに反して、ベルグソンは感覺界の內部、否寧ろ實驗界の內部に於て、無機體と有機體、換言すれば、物質界と生物界とを區劃し、前者を闡明するは實驗の總結果たる理知の業にして、後者を認識するは他種の知識の事なりとせり。カントに對しては理智の使用範圍を制限して、(但し深さに於て增大して)、之を物質と無機物との知識に對する手段と爲せり、然れどもカントが『此の知識は永久に相對的に止まる』と說きたるに反して、ベルグソンは絕對に到達し得べし、となして、其對象の全體を知悉し得るものなりと說き、『理智の

業なる科學は、そが領域なる物質界に於て、今後形而上學の有害無益なる攝政を離れて、獨裁的に君臨するに至るべし』と云へり。之に反して、『生物界と心靈界は、生命の連續にして且其の至上表現なれば、其の本有に於て、又其の深さに於て、科學的知識に關せずして、一種特別の知識即ち本然の哲學的若くは形而上學的知識に屬すべし』となせり。此の知識は一切の知識と同じく、理知より其の形式を受くれども、最早科學上の意味に於ける實驗より其の實質を假り來らずして、生の核心を直接把握し、若くは生に同情する精神の能力なる直觀より之を假り來るべしと說けり。直觀も亦自家の世界に於て、科學的知識の如く、否、科學的知識よりも尚直接に、又尚完全に絕對を把握すべければ、科學と哲學が相共に提携して進歩發展するときは、『吾人は絕對に於て其の生命、其の活動、及び其の存

在を有す」と云ふ語の實現せらるゝを見るに至るべしとは、是れベルグソンの意見なり。カントは科學を建設したれども、知識ならざる「信仰」を樹立せんが爲には、科學を破壞せざるべからずと思へり、然るにベルグソンの解決に至りては遙に輕便にして、單に科學の應用範圍を制限して、之に別種の知識を添加したるに過ぎず、斯くして此の二者に絶對性を與へたり。請ふ尚此の二點に就いて其の詳しきを語らん。

三　在來哲學の三假設とベルグソン哲學の第四假設

理智は自生的に物質に適合し、幾分か物質と迎合するの觀ありとは、ベルグソンの知識に關する持論の主要命題なりとす。從來の哲

學に於ては此の適合の事實を說明するが爲に、三種の假定說をのみ設け得べしとせり、即ち精神（知性）が事物に律せらるゝと云ふは、經驗論者の假定說。精神と事物との間に既成の調和ありと云ふは、ライプニッツの主義の假定說。事物が精神に律せらると云ふは、カント哲學の假定說なり。然るに此等三種の假定說は各々他の二說を攻擊するに便なるのみにして、獨立的の地歩を防守するに困難なり。是に於て乎ベルグソンは進化論の事實の與件を深く研究したる結果、第四の假定說を揭ぐるに至れり、此の假定說は前記三說の衝突する難關を避くることを得たるものにして、其說實に次の如し、『物質は理智の形式を確定するものにもあらざれば、理知が物質に其の形式を强要するものにもあらず、さりとて物質と理知が神祕なる調和の法則に服するものにもあらずして、理知と物質は徐々と相互に順應

して、遂に共通の形式に留まる』と云ふに在り。而してべ氏は此の大膽なる說を左の如く歷史的に立證したり。

四　理知の歷史的研究

人類の地上に出現せる時期を何れの年代に遡源せしむべきかと云ふに、武器や器具の始めて製作せられたる時期に遡源せしめざるべからず。ブシエ・ヅ・ペルツ（佛國博物學者、一七八八年――一八六八年）がムラン・キニオン（佛國ソム縣アッブヴィル城外の地にして、同地の土砂中に人骨の發見せられたるを以て有名なり）の石工場に於ける發見に就て起りたる記憶すべき論爭は、今尚世人の忘れざる所なり。論爭の問題は、發見せられたるものは當時使用せられたる眞の斧なるか、又は偶然破碎せられたる燧石の破片なるか

と云ふ點に在りたり。而して手斧なりと想像して、吾人は當時既に理知、更に精確に言へば人間の理知の發現し居たる事を、疑はざりき。飜て動物知識の諸逸話を觀るに、吾人は模倣若くは物象の自發的連想作用を以て說明し得べき幾多の行爲以外に疑ひもなく知識的行爲と言明し得べきもの之あるを見るべし。先づ第一には製作と云ふ觀念を證明するものあり、そは動物自から粗末なる器具を造るに至るものもあれば、人間の製作したる物具を己の爲に利用するものもあり。猿や象は知識の方面より見て、直に人間の次位に班せしむべきものなるが、彼等は時によりて器具を利用することを知る。彼等よりやゝ劣れるものゝ中に、人間の製作したる物具を認識し得るものあり、例へば狐の如きは明に罠の罠なることを知る。疑もなく推測作用のあるものには、必ず知識あり、

然るに推測作用は、過去の經驗に照らして現在を推知するに在れば、是れ既に一種の發明の端なり。發明は製作せらるゝ器物に物體化するとき、完成す。動物の知識は此點に向て進展しつゝ、之を理想とす。通常動物の知識が未だ器具を製作するにも到らず、また之を使用するにも至らずと雖、自然より賦與せられたる本能に種々の變化を及ぼす事によりて、此の方向に進展しつゝあるを示すものなり。若夫れ人間の知識に至りては、機械的發明が當初其が本來の出發點たりし事や、今日に至りても吾人の社會的生活は器具の製作と利用との中軸として動きつゝある事や、文明の進路を標示する發明も亦此の方向を辿り來りたる事などの事實は、世人の未だ充分認めざる所なり。吾人の之を看取するに困難なる所以は、人間性情の改變が其の器具の改良進步に遲くるゝを常と

すればなり。吾人の個人的及び社會的習慣は其の因て起りたる周圍の事情の一變したる後にも、尚永く依然として留存するが故に、一の發明の深大なる効果は、其後幾年月を經過して、最早新奇の觀を失ひたる時に至りて漸く之を認む。蒸汽機關の發明以來早や既に一世紀を經過したり、而して吾人は今初めて其の吾人に深甚の影響を與へたるを感識す。然れども同發明の工業界に行ひたる革命も、人類相互間の關係を悉く顚覆したりと云ふこと能はず、今や新思想は續々起りつゝあり、新らしき感情も發生の途に在り、今後幾千年を經て、過去の推移が單に其の大局のみを概觀せしむるに過ぎざる時には、現時の戰爭や革命は、設令尚記憶せらるゝと假定しても、決して重大視せられざるべし、然れども蒸汽機關は、之に伴ふ各種の發明と共に、一の時代を劃するに至るべけれ

ば、恐くは青銅時代若くは石器時代の如く吾人の口碑に上るべし。若し吾人が自負の念を一切脫去することを得て、有史以前より今日に至るまでの歷史が、永久に人間と理知との特性となれるものとして之を吾人に示す所のもののみを取り、之によりて吾人々類を定義すれば、吾人は恐くは『明知の人』と言はずして、『製作の人』と言はざるを得ざるべし。要するに、理知は其の原始的形態に就て考へ得る所のものより之を觀察すれば、人工物、特に器具を造くる爲め器具を製作して、之が製作を無限に改良し行く能力と謂ふべし。』（『創造的進化』原書一四九、一五〇、一五一頁）

五　理知の批判

果して然りとせば、吾人は動作の點より說き起して、理知は最初

製作を目的としたることを原則とせざるべからず。製作は單に無機物に限りてのみ行はる、有機物を使用することありても、之を無機物の如く取扱ふものなり、無機物に於ても固形物をのみ採用し、其他は流動性なるが爲に製作に上らず。是を以て理知が製作を目的とすと云ふも、實際物の中其の流動的のものは半ば理知の作用を脱するを豫想すべし、隨て生物中本來の生活的のものは、全く其の作用を脱するを見るべし。實際知識的能力を檢覈するに、理知は無機物、特に固形物を取扱はざれば、何となく物足らざるが如き感をなすを知るに難からず。無機物は、少くも之を吾人の知覺より見れば、截然區劃ある特立物（不連續のもの）に分つべし、而して理智は其の特立物をのみ明に識認す。吾人の知識作用を發揮せんとするには、目標と支點とを必要とす、而して之を提供するものは無機物中に於

ける固定性及び不動性なり、是を以て理知の明に識認する所のものは、殆ど不動性に限れり。吾人の知識作用、就中製作を目的とする作用は、吾人をして自然物の現實形態をも、人爲的に假形態の如く見做さしめ、吾人の思索をして、其の觀照する對象（有機物及び生物なりとするも）より、其の內的構造を外部に示す線を除去せしめ吾人をして其の物體を其の形態に無頓着なるが如く思惟せしめんことを要求す。是を以て理知は如何なる法則に依りても物を分解し、如何なる體系にも再び之を綜合せんとする無定限なる能力の特性を示すものなり。又理知が自己發表の手段とする言語の如きも、亦事物を指示するが爲に作られたるものなり。然れども言辭は其の事象を包むや、亦之を事物に變ず。されば理知の作用は無機物の上に行はれざる時にも、當時の作用に於て馴致したる習慣に從ひ、無機物

の形態と同じ形態を之に當嵌むるものなり。蓋し理知は此種の作用の爲に作られたるものなれば、此種の作用のみ之に區別と明快とを與へて、其意を充分に滿足せしむるものなり。

是故に理知は分明に思當するが爲には特立物の形態の下に意識せざるべからず。實際各種の概念は相互に無關係なること、猶空間に於ける各個體と相異ならず、又實際之と同じ個體性を有して、之に像られて作られたるものなり。それが總合して一種の知識的世界を構成し、同世界は本來の性質上固體の世界に類似すれども、既に理知が取扱ふに於ては最早物の認識にはあらずして、物に固定する理知の作用の表現なり。されば最早意象にはあらずして、一種の符號(象徴)なり。

然れども理知は抗抵すべからざる傾癖によりて物の全體を槪觀せ

んと欲するものなり、されど生物界と心靈界は無機物と相異なるのみならず、之と相反する特性を示しつゝあるに、理知は其の勢力を飽迄も己が領域外の新らしき事象に適合せしめんとす是れ從來學者が物に臨みし態度なりとす。さればベルグソンが古來哲學史に滿載せらるゝ議論の多くは、最初其提出法を誤りたるが爲に解決することと能はざるものとなり、而して其の提出法を誤りたる所以は、理智が其の永く物質と相親みて馴致し來りたる習慣に司配せられたるが爲なりと喝破して、而も能く之を立證するを得たるは、千古の卓見なりと謂ふ可し。然れども氏は單にこれのみに止まらす、尚此の純然たる批判的論題の上に哲學的思索の實證的研究法を建設したり。

吾人は次章に於て先づ之を定義し、次に之を實證せんと欲す。

第九章　ベルグソンの新研究法

一　演繹法の無力

ベルグソンは心理上及び倫理上の事實を取扱ふ科學に於て演繹法の力の如何に薄弱なるかは、世人未だ充分之を認めざることを述べて、此場合證明し得べき結論を、事實に據りて證明せられたる命題より引出すことは、或點まで、又或一定の程度に於てのみ可能的なり。演繹法によりて引出されたる結論を生命の屈曲に當嵌めんとするときは、直に之を常識即ち實相の間斷なき經驗に訴へざるべからず。演繹は道德的（精神的）の事物に於て言はゞ單に譬喩的に成効するに過ぎず、而して其成功の程度も件の精神的事物が物質的に置

き換へらるゝ即ち空間的符號に飜譯し得る程度に限らるゝ也、而して譬喩と本質との接觸は曲線と其切線との如く僅に何等かの一點に過ぎざる也、演繹法の力の斯く薄弱なりと云ふ說に對し、人或は奇異の感を抱き、之を以て逆說と見做し、語て曰はん、演繹法は精神の力のみによりて行はるゝ一種の精神作用にあらずや、その作用が若も自由自在に進展する所ありとせば、そは精神の領域に於て精神の事象に於て然るべきにあらずや云々と、然れども事實は之に反して此の場合に於てこそ理知は直に其能力を窘束せらるゝものにして却て幾何學や、天文學や、物理學など凡て物質的現象を取扱ふ科學の場合に於てのみ萬能力を發揮する事、吾人の前條に述べたる如し。概して言へば、科學が生物に對して、無機物に對すると同樣の勢力を占むることあるは、偶然の機會に因るものなり。生命が理知の自

然的作用に投合することあるは、間接の道、迂回の策に依りて然るなり。果して然りとせば生物は無機物と根本的に其の種性を異にする事、隨て之を適當に把握せんとするには、一種の新らしき概念を作り、恐くは一種の新らしき思索法を案出せざるべからざる事は、之を上記の事實に徵して明に推知するを得べし。

二　新らしき概念と新らしき思索法

然れども此の如き概念は如何なるものなるか、又此の如き思索法は何れに存するか。先づ第一知識的概念以外に他の概念果して之あるか、知識的思索法以外に他の思索法果して可能的なるか。此の場合に於て在來の難問は必ず起らん、曰く、一切の知識は理知の作用にあらずや。理知は己れ以外如何なる能力に向て自ら超越する方法

を求め得べきや。假りに理知が生命に就ては必然的に人爲的及び象徴的表現のみを示すに過ぎずとするも、吾人は畢竟此の表現を以て甘ずべきにあらずや云々と。此の難問は一見勢力あるが如くに思はるれども、ベルグソンは之に對して全く斬新なる解答を下したり。先づ第一吾人の自我は直接自ら知覺せらるゝや明なり、之と比較し得べきものは、吾人の感覺が外物に就て吾人に與ふる覺識あるのみ、之を稱して直覺若くは直觀と云ふ。吾人が吾人自身に對して有する直觀に對しては、吾人の理知は直に之が思索に從事す、然れども此の如き思索は無論、事の眞相をあるが儘に吾人に示すものにあらず。されば意識の直接與件を原始の純潔なる狀態に恢復することは、是れ哲學者の第一の天職なり。而して直觀は内生の領域を超越して、生命の全體を包容するまで之を擴充し得べきやと云ふに、若し宇宙

も人類も直觀と本來の理知との外に他に何等の知識をも示さゞるときは、無論此の如く之を擴充すること能はざるべけれども、實際は然らずして、本能なるものありて直觀と理知との爲す能はざる所を能くす。本能は物質に適合せざれども、生物に適合するものにして、理知的知識とは根本的に相異なる一種特別の知識を附帶するもなり、此事を知らんと欲せば、動物に於ける本能の作用を公平に觀察するを以て足れり。此の知識は動物に在りては思索となるよりも、寧ろ生命となり、動作となりて現はるゝものにして、これが人間に在りては意識的となり、反省的となることを得るが故に、之によりて吾人の追求する心理的直觀の擴充も可能となり來るなり。

吾人は茲に於てベルグソンの思索法の主要なる點に達し、其の絶大なる創見に接す。ベルグソンは初めて直觀の觀念に積極的及び確

定的內容を與へんことを試みて、成功したり。在來の形而上學は其の主要なる議題たる『自由論』『靈性の不滅論』及び『神の存在論』等を確立するが爲には、常に之を直觀に訴へたれども、此の能力それ自らを定義することも、又之を他の能力に關聯せしむることも爲し得ざりき。是を以て多くの場合に於て濫用の弊を生じ、其濫用は折衷主義によりて益々甚しくなり、爲に其の信用を失はしめ、其の存在をも危うせんとするに至れり。人は能く『理知的直觀』の語を使用すれども、論爭の點は正さしくこゝに在り、理知の科學に於ける作用を見るに、其が取扱ふ對象相互間の關係と形式のみを鉤出するに過ぎずして、其の對象、其の內容及び其の實質等は之を經驗のみより受く。若し直觀が理知の種類に屬すとせば、其の所謂對象が、如何なる經驗に於ても提供せられざる時には、畢竟客觀的保證なき

單純なる精神の概念たるに過ぎざるべし。之に反して若し理知の種類に屬せずとせば、如何なるものとなすべきや。今理知的知識以外に他種の知識、即ち内部よりの知識にして、外部よりの知識にあらざるもの、對象の知識にして、關係の知識にあらざるものを見出さんと欲すれば、之を本能の方面に求めざるべからず、初めて此事實を發見したる者は實にベルグソンなりとす。

三　理知と本能

先づ第一本能が知識を附帶すると云ふ事は、本能的作用を一應研究するによりて直に之を知るを得べし。『馬蚼が馬の脚又は肩に其卵を產むときには、其の幼蟲が馬の胃の中に生長すべき事や、又馬が身體を甜めて、幼蟲を其の消化器の內に入るべき事を知りつゝ之を

行ふが如し。胡蜂が其の餌食とする生物を打たんとするや、正さしく神經中樞の在る點を刺して之を麻痺せしめ、殺さずして單に動くこと能はざらしむる狀、宛も博識なる昆蟲學者に加ふるに堪能なる外科醫を以てするが如き方策に出づ。更にシタリスと稱する小甲蟲の如きは、アントフォールと稱する一種の蜜蜂の掘る地下道の入口に其卵を產みてより、遂に成蟲に化する迄悉く、其蜜蜂の移動に依りて發育の階段を經るものなるが、其狀宛も、シタリアスの幼蟲が、其の孵化の當時より、雄なるアントフォールの先づ第一地下道より出で來らんとする事や、結婚飛翔が雌に飛移る方法を與へんとする事や、雌が幼蟲の變態するとき之を養ふに足るべき蜂蜜の庫に伴ふべき事や、又斯く變態するに至るまでアントフォールの卵を少しづゝ食して以て己を養ひ、蜜の表面に身を支へ、且卵より出て來るべき敵

を滅し得べき事などを知悉するが如く、又シタリス自身も其の幼蟲が此等の事を知悉することを豫知するが如く見ゆ。此の場合に於て若し知識ありとせば、その知識は包意的たるに過ぎず、又意識として內心に行はれずして、正確なる行動として外部に現はる。』（『創造的進化』原書一五九頁）。此の如く理知は形式及ひ關係の外、何等生得（天賦）のものを有せずと雖、本能は或一定の物象に關する生得知識の型式を示すものなり。理智は感官を以て接觸する所のもの丶みを知り、外部より知るに過ぎずと雖、本能は距離を置て、內部より知る。此の如き知識は明に理智の範圍外に屬すと雖、爲に精神作用の範圍外に屬すと云ふべきか。理智的のものにあらざるが故に、理知を以て解す可からざるものと見做すべきか。吾人の研究は本能の說明に行詰りて、宛も不可測の深淵に逢着したるが如く思ふべき

や。

四　本能の説明

否之を日常の心的作用の現象に參照すれば容易に解說を得べし。「感情の現象、即ち反省を用ゆることなき同感又は反感の現象の中に、吾人は、假令其形式は、昆蟲の場合に比して漠然且つ理知の作用を蒙ること遙に多大なりとは云へ、本能によりて動く昆蟲の意識作用に屬する或現象を吾人自らの中に認むべきにあらずや、本能は語原的意味に於ける同感同情なり。今玆に膜翅類と其の餌食となる生物との間に一種の感應と稱する心的作用ありと假定せんに、膜翅類は此の感應作用の爲に內部より敎へられて、餌食となる毛蟲の被害性を感識するものなるが、此の被害性の感識は決して之を外部の知覺

に歸すべきものにあらずして、此の二蟲が相接すれば直に起り來るものなり、此の場合に於ては二蟲は最早二種の有機體にあらずして寧ろ二種の活動と考へらる、此れ即ち相互の關係を具體的に表明するものなり。」(『創造的進化』原書一八九頁)本能とは生が物質を有機化する仕事の繼續と見做すべく原始的本能の最重要なるものは即ち生活の過程なり、故に吾人は有機作用が何處に終りて本能が何處より始まるやを知る能はず例へば雛鷄の嘴を以て卵の殼を破るときには、本能によつて動くものなれども是れやがて、胚子生活中雛鷄が經由し來りし運動を辿るに過ぎず。之と反對に胚子生活の經路中にも、本能に歸すべき幾多の動作行はるゝものなり。生物體に於て幾千萬の細胞が共通の目的に歸向しつゝ、各々分業的に働き、他の爲に生活しながら、各々己の爲にも生活し、自ら存續し、自ら給養

し、自ら生殖し、危難に際する時は適宜の防衛的反動に出づる等を見るときは、如何に本能の多きを想起せざるを得んや。尚之と同時に同巣の群蜂が極めて親密に組織せられたる一種の體系を組成して個體としては他のものと相離るゝときは、設令食住を供せらるゝと雖、一定の時間以上生存すること能はざるを見れば、一巣の密蜂は、比喩的にはあらで實際唯一の有機體を成して、各峰が見えざる紐によりて他の密蜂と結合せらるゝ細胞の如きものなりと認めざるを得ず、然らば蜂を生かす本能は細胞の生かさるゝ勢力と區別すること能はざるもの、若くは其力の延長に外ならず、此の如き場合に於ては本能は有機作用と同じ。吾人は動物の本能の場合に於ても、細胞の特性の場合に於ても、同じ知識と同じ無知との現はるゝを見る。即ち各細胞は他細胞に就て己に關係する所のみを知り、各動物は他

の動物に就て己に利益する所のみを知りて、自餘の事は毫も之を關知せざるが如く思はる。生命が結晶して或一種屬となるや生命の仕事は此新生の種屬の死活に關する重要なる一二の點を除きて消滅するもの丶如し、此の場合生命は一般意識又は記憶の如く行動するものなり。吾人は不知不識吾人の過去全體を背後に牽きつゝありと雖、吾人の記憶が現在へ注入するは吾人の現在狀態を全うする二三の追想のみなり。されば或種屬が他の種屬の或特殊の點に就て具有する本能的知識は、生の單一即ち古代哲學者の語を借りて言へば、「己れ自らに感應する一の全體」に其の根據を有するものなり。』(『創造的進化』原書一八〇、一八一頁)

此の如く本能は生命の形其ものに象らるものなり。若し本能の裡に眠れる意識が覺醒するならば、又本能が動作となりて外に現はれ

ず、知識となりて内に意識し、吾人の問に對して自由に答ふることを得べしとせば、必ず生命の深奥なる秘義を吾人に傳ふべし。本能は哲學的思索上極めて重要なる問題を解決し得べきものを具せん、然れども本能は、自ら其の問題を提起せず。問題を提出する所の理知は、之を解決するに必要なる物質性を有せず。されば眞正なる唯一の思索法は本能と理知との親密なる協力に在り。然れども此の如き協力は果して可能的なるか、若し果して可能的なりとせば、その効力如何、其の限度如何。

五　本能と理知との協力

ベルグソンの説に據れば、『此の如き努力は不可能にあらず、此は人間には普通の知覺の外審美的能力の在るあるに徴して知るべし。』

吾人の眼は生物の形容を集合的に見て、有機的に見ず。此等の各形容を結合し、且此等に意義を與ふる運動なる生命の意向は人の眼を逸す。然るに藝術家は斯る意向を把握せんと欲して、一種の感應によりて對象の內面に入り、直觀の力によりて己とモデルとの間に介在する障壁を撤す。勿論此の審美的直觀は、外物の知覺の如く、個體を觀得するに過ぎずと雖、之と同じ方向に進み、生命一般を對象とする研究を期し難きにあらず、恰も彼の物理學が外物の知覺に劃せられたる方向を終りまで追究して、個々の事實を普遍的法則に延ばすが如し。勿論哲學は其の對象より、科學の如く精確にして且完全なる知識を求め得ることは不可能なるべし。』（『創造的進化』原書一九二頁）『されば理知は依然光明（知識）の中心となりて、本能は、設令擴充せられ、淨化せられて直觀となるとしても、斯る光明の周

邊に閃きつゝある星雲の如きものたるに過ぎず。然れども直觀は、純然たる理知にのみ歸すべき本來の知識の代りに、此の場合理知の與件の不充分なる所を把握して、其の缺點を補ふ方法を供するものなり。實際直觀は、一面に於て理知の機械的作用をも利用して、理知の鑄型は此の場合に於て的確に適用さるゝものにあらざることを證し、他の一面に於ては直觀固有の働きを以て、理知の鑄型に代はるべきものゝ感念を少くも朧ろげに暗示するものなり。斯の如く直觀は理知をして、生命は『數多』の範疇にも、『單一』の範疇にも適合せず、又機械的因果性も、終局性も生命の過程を充分に解釋せざることを認めしむべし。次に直觀は吾人と自餘の生物とを感應的に交通せしめ、吾人の意識を擴充せしめ、以て吾人を導いて生命の內奧に入らしむべし。』（『創造的造化』原書一九二、三頁）、直觀の吾人

を伴ひ行くところの觀望は勿論不完全にして且不充分なるべけれども、相對的にはあらざるべし、吾人は之によりて直に實在に面接し、實在と吾人との間に何等の隱蔽するものもなかるべし。

されば理知の爲に轉換せられ、解說せらるゝと雖、理知に超越する『生の直觀』なるものあり、之を『超理知的直觀』若くは『理知以上の直觀』と稱し、在來哲學者の『理知的直觀』に代はるべきものにして、此の直觀は生の問題に於て科學に從ふ方法を哲學に供して以て、科學的眞理に形而上學的知識と稱し得べき他種の知識を添加するものなり。此の如くにして理知は實驗と協力して、物理學を生ずると同時に、物質の形而上學をも生ず。尙理知は直觀と協力して、生の知識を生じ、之には特別に哲學と云ふ名稱を附すべし。

六　ベルグソンの哲學觀

此の如き哲學觀は確に獨創の見なるに相違なく、理知の力の足らざる所を補ひて、生命を解決するに理知以外の力即ち直觀の援助を藉らざるべからずとすれば、其は在來哲學者の所謂理知的直觀にあらずして、ベルグソンの解說するが如き直觀ならざるべからず。即ち測深力の強さと深さとによりて、實在の深奥なる內面に滲透するを得たるが爲なり。然れども前代の創見者は主知論の先入に誤られて、此の知識の泉源の性質及び效力を多少輕侮し、此の知識の彼等に提供したる流轉物（生命問題）を悟性の嚴密なる範疇に直接流し込まんとしたるが故に、連續性のもの、可動性のもの即ち生命其のものを、人爲的に斷絕し、不動化し、死物化したり。彼等は各種の

主義を組立てゝ、冥想することの直觀することとなるを忘却したり、是を以て其の組立てたる主義は直觀に等しき効力を有すること能はず。彼等は實在の上に、吾人の概念と稱する人爲的衣服を着用せしめて、實在の衝動の下には、吾人の概念の瓦解することを看取せざりき、假令看取したる者ありたりとするも、之を人間の精神（知性）の弱質に歸して、其の研究法の誤まれるを覺らざりき。是に於て乎異論雜揉して、殆ど其の底止する所を知らざるに至れり。ベルグソンは玆に天才的の努力を以て、哲學の益々深入りする舊轍を脱出し、斯學が原始より踏み來れる道を逆轉したり。氏は諸説の因て分るゝ分岐點に逆り、其の分岐の理由を追究して、其の原因は諸説に共通なる主知論に在ることを看破したり。是に於て乎在來の主要なる哲學説を一々研究して、主知論の爲に謬想を生ぜしめられたる點や、

哲學者の天才の爲に精確なる實證的知識の加へられたる點などを識別したり。其後此の如く選り分けたる斷片的眞理を渾然たる全眞理に成全する方法を追究し、理知の光明と直觀の微光とを區別し、先哲の如く之を混同せざらんことに注意して、先づ第一生命と云ふ廣大なる領域に於て兩者の類似點を認めんことを努めたり。ベルグソンの說によりて本能は直觀の微光を支持し、增加し、結合する方法を供し、直觀は理性に基きて、實證的及び確定的內容を受け、玆に哲學全體が其のメトードに於ても、其のプログラムに於ても深大なる變化を遂ぐるに至れり、さればベルグソンは實證形而上學の開祖と稱して可なり。實際哲學は氏によりて、哲學固有の特色を保持しつつ、否、寧ろ發揮しつゝ、實驗的となりたればなり。ベルグソンの新哲學に指定したるメトード及びプログラムは實に此の如し。吾人

は是より氏の斯學に寄與したる實際の効果を研究せんとす。

第十章　ベルグソンの自由意思論

一　ベルグソンの取扱ひたる三大問題

哲學者は科學者の如く問題を列次して、各問題に特別の解決を下さざるべからず。ベルグソンは今日まで此の如き特別の努力を三回まで試みたり、即ち自由問題、物心相關問題及生命問題是なり、尤も氏の之に下したる解決は相互に關聯せずと云ふべからず。吾人は哲學の目的とする所は生命に限りて、生命は差別的及多樣的なれども、尚之と同時に單一性なることを忘れつゝあり。宇宙に於ける生命の歷史を概括的に達觀するときは、持續の裡に進展しつゝある唯一の增成の如く考察するを得べし。而して此の生命の增成に固有な

る形式の直觀は即ち持續にあり、此持續はベルグソンの思想の一切の進展を司配する主腦思想にして、氏の新説の全體を一貫するものなり。

二　自由問題と宿命論

自由問題は一見特別問題の如く思はる、何となれば此の場合主觀客觀一となればなり。又人は意識を公平に觀測して、其の證明にする所を見れば、直に己の自由なるを覺識して、之を確認することを得ればなり。然るに在來の哲學者は多く自由に對する意識の明確なる證明を棄却し、結局宿命論に歸着すべきものと思へり。其故如何と云ふに、ベルグソンの説によれば、主知論と其の主要なる論證は種々の假裝の下に、主知論者の謬想を踏襲し、其の原則はいつも同

一にして、内面の生命に物質界の科學より藉り來れる形式、概念及び表現法、推理法を應用するに在ればなり。

三　心理的宿命論

心理的宿命論は其の形式極めて單純にして、一切の意識狀態は過去の意識狀態を以て說明し得べしとなし、必至的に之によりて決定せらるゝものと論斷す。例へば吾人が一の決意をなさんとするときには、先づ第一熟考するを以て始む、詳言すれば、此の如き決意をなさしむる爲に辯護する理由と他の決意をなさしめんか爲に辯護する理由とを想起するを以て第一とし、次に此の二種の理由を兩々相比較し、最後に最も强き理由が殆ど自動的に勝を制する結果、吾人の決意は玆に必然的に定まるものとす。決意を此の如く分解するこ

とは、實際に適合するが如くに思はるれども、其實左の二事を示すものなり、第一は心理的生命を極めて不精確に表現する事、第二は因果律を極めて任意的に應用する事是なり。

　實際理由と理由との爭閲に就て云々するは、自我を以て、各々異なる心的狀態の單純なる集合の如くに想像する結果なり。此の如き想像は吾人が自ら反省するとき、殆ど自生的に吾人の腦裡に浮び出づるものにして、其の理由極めて單純なり、吾人は外界的生活の習慣に馴致せられ外界に於て種々雜多の物象を目擊しつゝあるが如く自己の精神裡にも種々雜多の心的狀態（憎惡、欲望、希望等）あるが如くに想像するが爲なり。然れども物質的外界は空間に延長し、心理的生命は持續の裡に進展するが故に、二者全く其趣を異にす。例へば我今器の內に數個の石を投ずれば、石は各々差別的に留存し

て、之を包容せる器の單一性は、石と全く關係なく存在して、外部より之に添加せられたるものに外ならずと雖、內部の生命界に於ては、容物もなく、被容物もなし、又吾人の意識狀態と吾人の自我との關係は、實質と形式との關係の如きものにあらず。例へば我今薔薇の香を嗅ぎ、幼時の朧氣なる記憶を呼起すとせん。その記憶が薔薇の香によりて呼起さるゝと言ふことは、都合好き言ながら、不精確の言たるを免れず、實際は我は香其物に於て記憶をも嗅ぎたるものにして、其の香は我には斯々に香へども、他の人には全く之と異なる香となるやも知れず。人或は曰はん、貴下の嗅ぎたる香は誰にも同じ香なれども但だ相異なる思想と聯想せられたるまでなりと。然れども論者は先づ第一薔薇の各人に與ふる各種の印象の中よりその個人的印象に關する部分を排除して、客觀的方面即ち薔薇の香の

中萬人共有の部分、隨て空間に屬するもののみを保留せり。尤も此くするに依つてのみ薔薇とその香とに名を附することを得たるものなれども、同時に吾人の個人的印象を區別せんが爲には、薔薇の香の普遍的概念に各個的特性を添加せざるべからざりき。然るに今となりて吾人の種々の印象、吾人の人格的印象は、吾人が薔薇の香に種々の記憶を聯結するが爲に夫より出で來ると言ふ。然れども其の所謂聯結なるものは論者が己れ自ら加ふる一種の説明なり、一種の構想なり、一種の象徴なり、要するに吾人は是に於て根本的に相異なる二種の多數性を區別せざるべからず、外界の特徴を帶ぶる並置の多數性と內性の特徴を帶ぶる溶解若くは滲透の多數性即ち是なり斯々の感情、斯々の觀念と云ふときは、意識事實の無定限なる多數性を含むと雖、斯の如き多數性は、空間の如き等質的環境に於ける

一種の展衍によらざれば斯の如く現はれざるものにして、其時吾人の認むる所の外項は、意識事實それ自らにはあらずして、其の象徵なり、切言せば、之を表明する言辭なり。抑々意識狀態なるものは之を研究し、之を分解せんとすれば、極めて人格的狀態なるものも忽ち變じて非人格的要素となり、其要素は各〻相異りて、各〻一の概念を呼起し、一の言辭を以て表明せらるゝものなり。然れども吾人の理性が一の完體より多數の要素を分離する能力を具するの故を以て、諸ろ〳〵の要素が本來完體の裡に包容せらると云ふべからず何となれば其等の要素は完體の裡に於て空間をも占めず、象徵をも求めずして、相互に滲透し、相互に溶解すればなり。されば心理的宿命論は幾多の謬想を生ずるものなれども、其第一の謬想は、精神裡の具體的現象に代ふるに、皮想的哲學の人爲的模象を以てし、事

實の說明を事實其物と混同するに在り。然れども事實と事實の說明とは、生物と解剖標本との如き差別あり。『要素』こそ存す、生命はなし。生ける思想は言語には測定すべからざるものなり。

果して然りとせば、精神が如何にも其の精神を壓する力によりて決定せしめらるゝが如く說く心理的宿命論の如きは、言語の爲に誤るゝ粗笨なるものと云ふ可し。個々の感情は相當の深さにさへ達すれば、各々精神全體を表現するものなり。何となれば精神の內容は悉く此等の各感情に反映すればなり。精神が此等の感情の孰れかの影響を受けて自ら決定すと云ふときは、最早そこに精神の自ら決定することを認むるものなり。然れども自我を以て主となし、自我全體を表明する行爲にあらずんば、焉ぞ之を自由行爲と稱するを得んや。されば自由問題を正證するにはその自由なるものを、決定と

決定以外の或何物かの關係に求めずして、決定それ自らの或特性、即ち吾人の人格の徵候を具する行爲として、又吾人の自我が主權を握れる行爲として定義せらるゝ自由行爲に求めざるべからず。

四　宿命論者の言論

然れども宿命論者は已に此の如き態度の缺如するを感じて、問題を他の領域に轉じ、其の議題を左の如き新らしき形式の下に述べんとす。曰く、或行爲は自我全體を表現し、或行爲は之を表現せざるも、彼此の行爲が孰れも其の先行條件によりて嚴密に決定せしめらるゝとせば、此の如きは多く關する所にあらず。勿論吾人は今日の如き心理學によりて人の未來の決意を精確に豫見すること能はず、恐くは此の如き複雜なる問題に就ては、人間の理知は斷じて蓋然的

豫見以上に出づること能はざるべし、尤も此の如き豫見なれば、廣き意味に於て最早既に之に達せりと云ふべし。然れども神ならば萬事を永遠の現在に於て洞見し得るにあらずや、又超絶非凡の智者ならば、或一定の時期に於ける我が行爲を豫言し得ること、猶ほ彼の天文學者が日蝕を豫言し得るが如く爲し得るにあらずや」と。果して此の如んば、吾人の豫見の不確實なるは本來的にはあらずして、偶然的なりと云ふべし、問題其物の性質の爲にはあらずして、其の要素に就て吾人の有する知識の不充分なるが爲なりと云ふべし、隨て一切の要素を悉く完全圓滿に知悉すれば、吾人の豫見をして誤りなく事實とならしむるを得べしと云ふ議論なり。

五　ベルグソンの解答

此の假定說の價値如何に對しては、吾人玆にベルグソンの精緻深邃なる解答を其儘引用せざるべからず

『思想を確定するが爲に吾人は重大なる場合に於て一見自由なる決意をなす人物ありとして、之をピエールと名けん。偖玆に研究する問題は、ポールなる哲學者がピエールと同時代若くは數世紀以前に生存し、ピエールの行爲の一切の條件を悉く知悉すとすれば、ピエールの自由行爲を精確に豫見することを得るかと云ふ事なり。

抑も或る人の一定の時期に於ける心的狀態を忖度するには數種の方法あり。例へば吾人は小說を讀むに當り、之をなさんと試むるものなり、而して作者が作中の主人公の感情を描寫するに、又其過去の行動迄も作說するに、如何程綿密に注意するも、其大團圓

は必ず吾人が豫見せしと否とに拘らず、吾人の主人公に就て抱ける思想に何等か添加する所のものあるべし、故に吾人が主人公の性格を知ること、甚だ不完全なりきと云はざるべからず。實を言へば、吾人の深き心的狀態即ち自由行爲によりて表現せらるゝ心的狀態は、吾人の過去の歷史の全體を表明して且之を總計するものなれば、若もポールがピエールの行爲の一切の條件を知悉すとせば、吾人はポールがピエールの性行の委曲を究盡して、其の想像の上にピエールの歷史を再び組立て、再び經驗するものと推測せざるべからず。然れどもこゝに區別すべき重要なる事あり、我若し自ら或心理狀態を經由するときには、その狀態の强弱の程度と其が他の狀態に對する重要の程度とを精確に知悉す、しかもそは測定若くは比較に依て善く然るにあらずして、例へば或深き感

情とすれば、其の強度は其の感情それ自らに外ならざればなり。之に反して、我若しその心理狀態を人に說明せんとするときには精確なる數學的性質の記號によらざれば、其の強弱の程度を理會せしむること能はず、或は其の輕重の程度を測定し又は之を過去の狀態と未來の狀態に比較し、その終局の行爲に於て演ずる役目を確定せざるべからず。而して終局の行爲が其の狀態に依りて解釋せらるゝと其の狀態を要せずして解釋せらるゝとに從て、我は其が強弱の程度と重要の程度とを言明するならん。之に反して斯る內部の狀態を覺識せる我が意識に取りては、此の如き比較の必要なし。強弱の程度は狀態其物の說明す可らざる性質として、我が意識に映ずればなり。されば他人の意識狀態を同化するには二方法を區別せざるべからず、一は動的方法にして、我自ら他人の

意識狀態を經驗するに在り、他は靜的方法にして他人の意識狀態の認識に代ふるに其の心象、否、寧ろ其の知識的象徴たる觀念を以てするに在り。此の場合に於ては他人の意識狀態を再起せずして想像するものなり。但だ後者の場合に於ては心理狀態の心象に加ふるに、同狀態の强弱の程度を指示せざるべからず、何となれば他人の心理狀態は之を腦裡に畫く人の心に作用を及ぼさず、隨て其人は之を實感しつゝ其力の强弱を覺識する機會なければなり然れども此の如き指示は其の性質として必然的に分量的特性を帶ぶべし。例へば或感情は他の感情に比して尚一層力ある事、尚一層重要視すべき事、尚一層大なる役目を演了したる事等が指摘せらるべし。然れども若も其人の今後の歴史を此の如き多樣の狀態若くは傾向が歸着したる行爲と共に豫知せずんば曷ぞ之を認むる

を得んや。故にポールが適當にピエールの生涯中の或時期に於ける意識狀態を忖度せんとするには次の如く二者其一に出でざるべからず。即ち、小說家が作中の人物をして如何に其の終局を告げしむべきやを知れる如く、ポールもピエールの終局行爲を旣に知悉して、ピエールの經由すべき繼起的狀態の心象を補足するにピエールの歷史の全體に對する同狀態の價値を指示することを以てせざるべからず、或は、想像に依らずして、實際に於て此等の種種の狀態を己れ自身に經由することを甘ぜざるべからず。然るに此の二種の假定說の中第一は之を排せざるべからず。何となればポールが他人の過去の狀態のみを知悉して、其の終局の行爲を豫知し得べきや否やは、正さしく是れ研究問題に屬すればなり。是に於て乎吾人はポールに就ての觀念を根本的に改めざるべからず

ポールは、最早吾人が初めに思惟したるが如く、將來を洞察する一種の觀測者にはあらずして、ピエールの役目を己れ自ら豫め勤めつゝある一種の役者なり。斯る場合にはポールが其の役目の委曲を盡して如何なる細事をも苟もせざることを記せざるべからず何となれば人の歴史中には如何なる平凡なる事も其意味を有す。假に意味なしとするも終局の行爲に照合せざれば之を瑣細なる事なりと斷定すること能はざるものなり、然るにその終局行爲は、假定によれば、未だ知れざる所のものなり。ポールがピエールより先きに經由すべき各種の意識狀態は、人は一秒たりとも之を短縮すること能はず、何となれば例へば同一の感情とせんに、其の結果は、持續中刻々に相加はりて、其の强度を增すものにして、且此等の結果の總額は、終局の行爲に對して感情全體の重要程度

を知らずんば、一擧にして之を經驗すること能はざればなり、然るにその終局行爲は正さしく知れざる所のものなり。さりとて若しピエールとポールが同一の感情を同一の順序に經驗して、二人の心が同一の歷史を有すとせば何を以て二人を區別することを得んや。其心の宿れる身體を以て之を區別せんとするか、其時には二人の心は何れかの點に於て必ず相異ならん、何となれば其の經歷中何れの時に於ても同一の身體を示さゞるべければなり。其心が時間の裡に占むる位置を以て之を區別せんとするか、其時には二人の心は同一の出來事に遭際することなかるべし。然るに假定によれば、同一の經驗を有するが故に、同一の過去、同一の未來を有する譯なり。是に於て乎論者は左の如く決するより外なし、ピエール、ポールは畢竟同一の人にして、行ふときには、之をピ

エールと稱し、其の歷史を復說するときは、ボールと稱す』と、（『意識の直接與件』原書一四一頁より一四四頁）

是に由りて之を觀れば一切の先行條件を悉く知るときは、行爲を豫知することを得べきや否やと云ふが如きは、畢竟無意義の問題なり。何となれば此等の先行條件を同化するには動的靜的の二種の方法ありて、動的方法に於ては人は知らず識らず轉化して豫見さるゝ人と一致し、同系の狀態を經由し、因て以て行爲の遂げらるゝ時に歸着するに至るが故に、之が豫見問題の如きは其の存在の理由を失ふべし。靜的方法によりて之を同化すとすれば、此等の狀態を指示する以外に、其の重要程度の分量的評價を示すが故に、此の一事終局の行爲を前提するものなり。隨て一方は行爲が遂げられたる時には遂げられたる也といふ結論にして、一方は其將に遂げられんとす

る時には未だ遂げられたるに非ずといふ結論に歸着するなり、即自由問題が當に解決に着手すべき時早く既に之を去るものなり。

六　宿命論の反駁

吾人は少くも此の議論の中に宿命論の不合理なる點を見出すを得たり。要するに吾人が宿命論に誤らるゝは自然界に於て豫見を可能的とする理由を以て、直に自由行動より出づる事實も之と平行的なる者と誤解するが爲なり、科學が種々なる點に於て未來を豫見する事實を見て、兎に角吾人の行爲の未來も何等かの方法に於て豫見し得べしとなすが爲也、所謂時間に屬する現象を持續に屬する現象にて類推するが爲なり。然るにベルグソンに據れば斯かる時間と持續とは根本的に區別あり、時間は等質的なる且空虛なる環境にして、

物質的現象の進展する純粹分量性の世界に屬し、其等の現象には何等の影響をも與へずして留存するものなり、持續は吾人の内部生活の本質、隨て純粹異質性にして、生命それ自らの如く純粹なる特性なり。實に科學例へば天文學に於て日蝕を豫言するが如く、將來を豫見することを可能ならしむる理由はやがて是れ吾人の自由行動より出づる行爲の豫見を不可能ならしむる理由なるなり。

今此の區別を明に知らしめんが爲に、假りにデカルトの案出したるよりも更に有力なる惡靈ありて、宇宙の運行に二倍の速度を加へしむるとせん。而も之が爲に天體現象には、少くとも之を豫見せしむる方程式には何等の變化をも與へざるべし、何となれば此等の方程式に於て象徴T（を或る現象の生起より次の生起に至る距離とせば）は持續を示さずして、二つの持續の關係、時間の單位の若干、

要するに若干數の同時性を示すものなれはなり。此の同時性生起の度數は依然として運行が二倍とならざりし以前と同じかるべく、唯各個の同時性相互の間隔は減少すべし、然れども此種の間隔は毫も計算に上らざるものなり。然るに此種の間隔が正しく生活せられたる持續にして、意識の覺識する所のものは即ち是なり、是を以て若し吾人が日出と日沒との間の持續が平素の量と異なることを經驗せば意識は直に其日の短縮を吾人に知らしめんとす。勿論意識はその減少を測定せざるべく或は直下に分量の變化として之を認めざるやも知らず、然れども何かの形式の下に、經驗の恒例的蓄積に於ける減少、即ち實在が常に日出日沒間に遂行せらるゝ過程の變化を實驗すべし。

然るに天文學者が月蝕を豫言するが如き時には、彼は吾人が前記

の悪靈に歸したる權力を施行するなり。彼は時間をして十倍、百倍千倍の速度を以て推移せしむる權利あるなり、何となれば、此の如きは意識的間隔の性質を變ずるのみに過ぎず。假定によりて此種の間隔は計算に上らざればなり。是を以て數秒間の心理的持續の内に天體上の時間の數年又は數世紀を持續せしむるを得べし、彼が天體の軌道を豫想する時又は之を方程式に現はす時の作用は、實に此の如く彼此兩天體若しくは數天體の同時的現象の關係を測定するに過ぎず。

然るに生活する持續を成す所の時間の單位、(天文學者の度外視することを得べき生ける持續)は、正さしく是れ心理學者の取り扱ふ所のものなり、何となれば心理學の取扱ふ所のものは間隔それ自らにして、その兩極にあらざればなり。勿論、純粹意識は時間を持續

の單位の總額として認めず、意識それ自らのみにては時間を測定する方法もなく、理由もなし。意識の狀態は進歩なり、物にはあらず吾人は之等を各〻唯一の語を以て示すと雖、此は言語上の便宜の爲のみ。意識狀態は生きつゝあり、又生きつゝ不斷に變ずるが故に、其中より一瞬間を拔き去るも、之を貧弱にして其の品性を變ぜざるを得ず。……一切の豫見は實際に於て一種の觀望なり。而して此の觀望は未來の間隔を益〻短縮して、其の部分の相互的關係を保存すること、猶彼の天文學上の豫言に於けるが如き場合に行はるゝものなり。然れども時間の間隔を短縮すると云ふことは、其間に繼起する意識狀態を空虛ならしめ若くは貧弱ならしむるにあらずして何ぞや尚天文學上の時期を短縮して觀望するの可能的なる事も、亦心理的系列を之と同一の方法によりて變改するの不可能的なる事を暗々裡

に證明するにあらずや。何となれば此種の心理的系列を不變的基調の如く見做すによりてのみ、天文學上の時期を、持續の單位に於て任意的に變更せしむることを得べければなり。

是を以て將來の行爲を豫見することを得べきや否やと云ふか如きは、純粹分量なる科學的時間と、純粹品質なる現實的持續とを無意識に同一視する議論なり。科學的時間は無限に可分的なれども、將來の持續に至りては、其の斷片を豫見するが爲に之を短縮することは、如何程少許にても不可能なり。此種の持續は、其進展するに伴れて、之を生活し得るに過ぎず。要するに心理界に於ては未來は本來的に不可豫見的なり、此は吾人に取りてのみ然るにあらず、其の性質として然り。偶有的に然るにあらず、本有的に然り。而して此の不可豫見性は即ち是れ吾人の所謂自由なるものゝ別名に過ぎざる

なり。

七　ベルグソンの自由觀

今や吾人はベルグソンの自由觀を精確に叙說することを得べし。ベルグソンの言に曰く、『具體的自我と其の遂行する所の行爲との關係を自由と稱す。而して此關係を定義するとは不可能也、其故は吾人は自由なれば也。實際物ならば之を解剖することを得べきも、過程は、之を解剖すること能はず。擴張（廣袤）は之を切斷することを得れども、持續は之を切斷すること能はず、强て之を解剖せんと欲すれば、知らず識らず過程を變じて物となし、持續を變じて廣袤となす、具體的時間を切斷せんとすれば、此の一事直に其諸瞬間を等質的空間に展舒し、現に遂げられつゝある事實に代ふるに、旣

に遂げられたる事實を以てす。謂はゞ自我の活動を固定せしむるが故に、自生性は變じて惰性となり、自由は變じて必然性となるを見る。是れ即ち自由を定義すれば、宿命論を是認するに至る所以なり』(『意識の直接與件論』原書一六七頁より一六八頁)一言以て之を蔽へば、自由には之を感識し得べしと雖、之を說明するを得ずと云ふに在り。ベルグソンの辨證的努力は、常識の自然的證明を理性に基かしめて、之を鞏固にするに至れり。尚之と同時に其の自ら企圖したるプログラムを完成したるものなり、そのプログラムは古來哲學者の紛々たる諸說中に、各々含蓄せる眞理の要素を集大成するに在りたり。宿命論は絕對に自由を否定し、精神主義は絕對に之を肯定す。然るに意識の直接檢覈は不可誤にして、宿命論に對しては、吾人の自由を肯定し、精神主義に對しては、吾人の自由に極限あり、差等

あるを言明す。然り而してベルグソンの說明は如上の二說が實際何れの點に於て又如何にして理非相半ばするかを理會するの方法を吾人に示したり。前にも述べたるが如く、行爲が自我全體を表明するときは、自由なり。然れども斯の如き場合は屢〻之あるかと云ふにベルグソンの有名なる解剖的說明に據れば、一切の意識狀態は其が同類のものに混化すること、猶ほ雨の水が池の水に混化するが如くならざるべからずと云ふ。自我は、外界に接觸する點に於て、一種の外面を呈し、其の外面の上に獨立の生長作用の起るを見るべし。例へば催眠狀態中に受け得たる暗示は意識事實を概括的に同化せずして、却て固有の生動力を具し、時機の來るときは、人にも代ることあり、何等かの偶然的事情の爲に挑發せらるゝ激しき憤怒や、人心の暗き奥底より忽焉として意識の表面に湧き出づる遺傳的惡德な

どは殆ど催眠術暗示の如き作用をなすべし。此等の獨立的心事の外に尚一層複雜せる系列ありて、其の要素は相互に滲透すれども、自我の密體に全く溶鑄するに至らず。誤解せられたる教育即ち判斷よりも寧ろ記憶に對して施さるゝ教育より出で來る感情及び觀念の總體は實に此の如きものなり、此の場合基本的自我の裡に一種の寄生的自我を生じ、後者は間斷なく前者を蠶食す。人は多く此の如くにして眞の自由を知らずして生死す。然れども自我全體が之を同化すれば、暗示は勸誘となるべし。極めて嚴苛なる教育と雖、若し全心に浸漸し得る觀念及び感情をのみ吾人に傳ふれば、一毫も吾人の自由を損せざるべし。何となれば實際自由決意は全心より流れ出づるものなればなり。又行爲の關聯する動的系列が益々之を基本的自我と合致するに從つて、行爲は益々自由となるべし。

八　宗教界の言論

ベルグソンの自由觀は實に以上述ぶるが如し。學者多く主知論に誤られて、自由を蔑視し、自由は人の品位を失墜すと主張すれども、ベルグソンの說によれば、人間の品位を高むるもの、自由に如くはなしと云ふ、何となれば自由の吾人に提供する所のものは、勇敢なる生活のプログラムに外ならざればなり、即ち吾人の全心と共に間斷なく生活する事なり。若しベルグソンに對して有力なる論難を揭げ得べしとせば、そは宗敎界の言論に止まるべし。宗敎界の主要なる言論によれば、吾人の心的進境（完全の域に進む事）と、及び吾人の救靈とに必要缺く可からざる支點及び槓桿は、吾人之を唯だ神に於てのみ認め得べしと云ふ、換言すれば、吾人の衷に之を認む可

からず。吾人の外に之を認め得べしと云ふ言論なり。然るにベルグソンの自由觀は、假令明々地に神を排除せざるまでも、此の如き假定說を成立せしむるものにあらず。ベルグソンの哲學は勇學に就ては絕えず之を語れども、聖德に就ては語らず、ベルグソニスムは一種の自然主義なり。勿論偏狹なる自然主義にはあらず、その原理は展伸自在にして、無限に張開し得べきものなり。彼の廣大なる未墾の原野とも云ふべき默意識と無意識は、明意識と同じく此の原理に屬するものなり。ウィリアム・ジェームスの說によれば、默意識が宗敎的心理學上如何なる職能を有するかは、人の能く知る所なり。默意識は神人間の仲介者にして、神の人を動かし、人の神に隨喜する實に之に因る、然りと雖ベルグソンが恆久の更新創造の如くに描寫したる心的經驗は思索家及び藝術家のそれに適合すと雖、神祕家の

それとは吻合せざるが如し、蓋し神秘的狀態は、神秘家の既往の經驗に對して更新すと雖、神秘家の能動的に行ふ所の創造の如くに現はれ出でずして、受動的に受くる所の啓示の如くに現はれ出づればなり。遮莫、ベルグソンの心理學と神學との間に一種の契合點あり得べしとせば、そは內在の神學ならでは融合すること能はざるや明なり。實際明に超絕的なる加特力敎の定理にベルグソニスムを利用したるの試みは、宗敎家と哲學者との疑懼心と不快の情とを招くに至りたり。

第十一章　ベルグソンの心身相關論

一　心身平行論

ベルグソンは自由問題を肯定的に解決したれば、そが自然の順序として心身相關問題を提唱して、之が解決を試みざるべからざるに至れり。げに若し果して意識は單に頭腦作用に過ぎずと立證し得べしとせば、意識の自由を肯定する證明の如きも何の効か之あらんや。自由は之を頭腦や人體に歸し得べきものにあらざればこそ其効あるなれ。抑々心身相關問題は精神主義者の難問題にして、同主義者が極力之を論證せるにも拘らず、純粋持續の哲學者（ベルグソン）の眼には、益々難問に難問を誘起するの觀を呈したり。

抑〻心身相關論の提唱者としてはデカルトが嚆矢にして、近世の哲學界に於て同問題を取扱ひたる者は、直接又は間接に、之をデカルトの手より繼承したるものなり、但し十七世紀時代に在りては同問題は『本體相通問題』として取扱はれたり。往昔希臘の哲學者は此問題に對しては殆ど之を意にも留めざりき、そはプラトーンの說によりて、物質は本體的に思想より成立てるものと見做し、結局之を精神に歸したればなり、尙アリストテレスの說に據りても、一面に於ては物質に心理的性質の屬性を具せしめ、他面に於ては純精神と純物體との間に仲介物を立てゝ、兩者の交涉は不知不識の間に行はるゝものと見做したればなり。然るにデカルトは、物質を定義するに、延長を以てし、精神を定義するに、思想を以てして、二者の相互作用を不可解ならしむるに至れり、是に於て乎兩者の相互關係

を解釋するの必要上、『心身平行論』なる一種の假定說を案出するに至れり。ベルグソンは乃ち深くその心身平行論を解剖し、例の精緻なる辯證法を以て、同論の妄誕を論證したり。在來の哲學思想の唯一の道を此の如く閉鎖したる上、在來の延長非延長の對立に加ふるに、新たに特性と分量、自由と必然性との對立を以てし、物質と精神、心靈と身體との溝渠を深く穿開して、故さら踰ゆること能はざる溝渠を作らんとしたるの觀なきにあらず。然れども實際は同問題を根底まで究盡したる後、獨創の見を以て、之が解決を下さんとしたるものなり。

先づ第一思考のみを以て精神を解釋し、延長のみを以て物體を解釋せんとしたる在來の哲學思想は之を根本的に廢棄せざるべからざりき。こは在來の哲學思想は一面の眞理をも藏せずと云ふが爲には

あらず、何となれば思考は精神の一作用にして、延長は物體の抽象的極限たることは明瞭なればなり、但だ本問題に於て其の一面の眞理は正しく利用すべからざる方面にして、唯だこれのみにては有害なりと云ふが爲なり。實際物質と精神とを全く相異なる形態の下に攝取せんとするが如きは、精神と物質との交渉を任意に不可能ならしむるものなり。翻て他の一方より觀察するに、若し實驗上拒否すべからざる事實ありとせば、そは心身の相互作用なり、少くも此の事實は於重大なる理由あるにあらざれば、容易に否定すべからざる事實なりとす。されば眞の研究法は一面に於ては此の相互關係を實際のものと見做し、他の一面に於ては心身の合致し若くは協力する點に於て、其の關係を知覺及び記憶に於て把握せんとするに在り。

二　經驗論者の知覺及び記憶論

經驗論者はコンディヤックよりテーヌに至るまで此の如き方法を執らんとしたれども、彼等もまた主知論者の先入に浸染したる上、其の分析法の未だ深く徹底せざりしが爲め、知覺と記憶との性質に就ては甚しき謬想に陷りたり、隨て其の研究は既に出發點に於て方法を誤れり。最も流行せる經驗論者の知覺論に據れば、人は外界の物象より出づる機械的性質の刺擊を受くるや、それが神經系統を通じて、頭腦に入り、そこに不可思議なる過程によりて意識狀態に變じて、主觀狀態となり、それが復た逆戻して矢張り不可思議なる過程によりて外部に出で、茲に客觀性を受くると云ふ。又記憶相關論の說く所に據れば、頭腦の刺擊は永く繼續して、知覺の可能性を保持し、

それが現實となりて顯はるゝには、同一若くば類似の知覺の機會を待つに過ぎずと云ふ。然るに此の二種の知覺論記憶論は、在來の心身平行論と同じく經驗の要求に對應せざるのみならず、精神に關しては後者よりも尙更に不滿足なるを覺ゆ。我が頭腦狀態、我が神經系統、我が身體全部は皆形像なり、外界を組織する外物もまた形像なり、されば後者の形像が前者の形像の或變化より生ずると斷定するが如きは、毫も理義の通ぜざる議論なり。主觀的知覺が、如何なる方法によりて出で來るかは知らざれども、一種の假定的空間と再び結合して以て客觀的世界を成立せしむと云ふが如きは、是れまた理義の通ぜざる議論なり。知覺論を成立せしめんとするには全く之と反對に出で、物より心に到る順序を取るべし、心より物に到る順序を取るべからず。是を以て吾人は形像全體を提出し、吾人の身體

をも其中に加算して、虚心坦懐に之が説明を直接的實驗と生理學とに待たざるべからず。實驗は形像全體と形像の典型たる吾人の身體との關係によりて變化するを示し、生理學は吾人の身體の内、就中吾人の神經系統の内に一種の勢力を變形するもの、一種の豫見すべからざる、又決定せざる、一言以て之を蔽へば、自由なる活動中樞のあるを知らしむるものなり。

　吾人の知覺は、純粹の狀態に於ては、物の一部分に屬し、唯物論者の説くが如く、結果にもあらざれば、唯心論者の説くが如く、原因にもあらずして、物と合致するものなり。若夫れ實際に於て知覺が、成人の意識の提供するものゝ如く、極めて客觀的特徴を呈するあらば、此は記憶の寄貢多きを占むるが爲なり、吾人の知覺は記憶に富み、記憶の爲に吾人のものとなるなり。

三　ベルグソンの記憶説

然れども若し純粹知覺が吾人に物質の凡てを示し、少くも其の主性を示して、爾餘は記憶より出で來りて、物質に添加するものとすれば、記憶は原則上物質に關係なき獨立的能力たらざるべからず、實際知覺は吾人を導きて物質に入らしむる如く、記憶は吾人を導きて精神に入らしむるものなり。吾人は是に於て經驗論者の第二の謬論に接す。如何にも頭腦を以て記憶を物質的に蓄藏する受容器の如くに見做すことは、人の欺かれ易き説なり。然れども其實心理學上の觀照も、生理學上の與件も此の如き假定説を吾人に强要するものにあらず、否、推奬するものにもあらず。げに記憶は啻に心理學上の觀照に精神の事實として映ずるのみにあらず、生理學の與件を驗

密に檢覈するときも、頭腦の過程は記憶の微弱なる部分にのみ適應し、其の原因と云ふよりも、寧ろ其の結果なるを實證し得べし。他の一方に於ては、凡て一たび意識に現はれたる所のものは、設令無意識的なりとするも、有りの儘記憶に保存せらるゝと云ふ事は、眞に近き說なり。若し知覺の記憶なるものが、知覺其物の微弱となりたるものに過ぎざることならば、微なる響の知覺は激しき響の記憶の如くに思はるゝが如き事もあるべしと雖、此の如き混同は斷じて起らず。

記憶は決して現在より過去に逆行するものにあらず、却て過去より現在に進歩するものなり。吾人は過去には一躍直に身を取りあぐるものなり、然れども『潜在的狀態』より發足するときには、各種の意識圖案の系列を經由して、同狀態が現在の知覺に物質化する境

地まで、即ち現實的及び活動的狀態となる點まで徐々に潛在的狀態を導き來るものなり。何となれば吾人の現在は、吾人の上に作用を行うて吾人を動す所のものなり。吾人の過去は之に反して最早作用を行ばざれども、作用を行ひ得べき所のものなり。詳言すれは、現在の感覺の中に入り、その活動性を假りて作用を行はんとする所のものなり。此の如く頭腦狀態は記憶を創造せずして、之を繼續し、現在に物質性を供して之に手掛を與ふるものなり。要するに『記憶は頭腦作用とは別物にして、知覺と記憶との間には程度の差別なくして、性質の差別あり。』記憶に依りて吾人は實際精神の領域に入るものなり。

四　ベルグソンの心身結合說

然れども若し記憶と知覺との區別にして此の如く絕對的なりとせば、心身相關の問題は、遂に之を提出すること能はざるか、吾人は之に對して先づ第一凡て實在は意識と一種の親族性、一種の類似性一種の關係を有することを記せざるべからず、此は如何なる哲學說と雖、之を承認せざるを得ざるなり。吾人は初より之を承認して、物と吾人自己の身體とを『形像』と呼びたり。他の一方に於て普通二元論の困難とする所は、精神と身體とを區別する點より來らずして、如何にして二者の一が他に結合するかを知ること能はざる所より出づ。されば玆に研究すべき問題は、如上分析し來りたる所のものが、果して精神と物體との接合、記憶と知覺との綜合を理會せしむるに必要なる資料を供給して、延長物と非延長物、分量と特性、必然性と自由との三種の對立を徹去するに、若くは緩和するに足れ

りやと云ふに在り。

若し一方に於て微分子に分割さるべき延長を有する物質を假定し他の一方に非延長性の感覺を有する意識を假定すれば、斯る物質と斯る意識との間に、身體と精神との間に何等共通的のものを見る能はざるや明白なり。然れども知覺物質間の此の區別は、悟性が其の習慣と其の法則に從て分解し、再構成する人爲的所業にして、直接的直觀の與件にあらず、その與件は、如何にして空間と結合し得べきやを知る能はざる底の非延長的感覺にもあらざれば、意識と關係を結ぶこと能はざる獨立的部分に分割されたる延長にもあらずして分割されたる延長と純粹非延長との或る何等かの中間物なり、即ち擴張性のものの是なり。語を換へて之を言へば、物質の可分性は物質其物には屬せずして、吾人が此の物質を捕捉するが爲に其下に張り

亘す空間に屬するものなり。延長せる物質は、之を其の全體に於て觀測すれば、吾人の知覺の不可分性を呈し、又之と逆に、吾人の知覺は物質の延長を分受す。此の如く、吾人は次第に悟性の動作の偏見を脫去するに從て、知覺と物質の二者が互に相接近し、知覺は再び擴張を獲得し、具體的延長は自然の連續性と不可分性とを再び恢復するを見るべし、是に於て乎具體的にして不可分的なる延長は毫も精神の單一性と適合せざる所なきが故に、精神は純粹知覺の作用に於て物質に居を据ゑ、隨て之と結合することを得るなり。然れども其時にも精神は記憶たるの故を以て、物質とは根本的に差別あることを記せざるべからず。

實に所謂純粹知覺即ち瞬間的知覺は單に一種の觀念、一種の極限に過ぎず、實際上の各知覺は此と殊なり、持續の或深さを占めて過

去を現在に延長し、隨て記憶を分有す。而して吾人の知覺の裡に繼起する異質的特性と、科學が空間に於て此等の知覺の背後に在りと假定する等質的變化との區別は、果して何くにか存する。前者は不連續にして相互に推引すること能はず、後者は之に反して計算に上れども、之を計算に上ほすが爲には必ずしも之を純粹なる分量とするの必要なし。その異質性をして充分稀薄ならしめて、吾人の眼には實際上遺棄すべきものとなすを以て足れりとす。然るに一切の具體的知覺は、無數の繼起的純粹知覺が記憶によりて綜合せられたるものに外ならざる以上、可感的特性の異質性は、同特性の吾人の記憶に收縮したるものに起因し、客觀的變化の相對的同質性は、同特性の自然の弛張に起因すと考ふべきにあらずや。果して然りとせば吾人の腦中に顯現せられたる可感的特性と可算的變化の如く見做さ

れたる特性との間には、内的緊張の區別あるのみに過ぎず。此の如く、緊張の觀念は吾人をして分量と特性との對立を撤去せしむること、猶擴張の觀念が延長物と非延長物との對立を撤去せしむるが如し。

此の漸進的緊張の歷史は、之を生物界に觀れば、其高尚なるに隨て益〻複雜となる神經機關を以て象徵せられ、宇宙に在りては生命と自由との歷史となる。抑〻生物は一種の活動中樞にして、即ち可能的活動の或分量也、而して其分量は個性就中種族によりて變ず、動物の神經組織は屈伸し易きものにして、活動は其上を辿りて流通す、その神經中樞は其の發達と其の形狀とによりて多少延長的選擇作用を示し、多少複雜せる動作の間に行はるゝものなり。されば身體や、頭腦は活動の機關に過ぎず、如何なる程度に於ても、如何な

る意味に於ても、又如何なる方面に於ても、意識狀態を準備するに資するものにあらず、況や之を說明するをや。

然れども他の一面に於て生物に於ける意識の覺起若くは再覺起は擴大なる選擇作用の範圍の之に提供せられ、多大なる活動の總量の之に分配せらるゝに從て、益〻完全となるや瞭なり。故に吾人は繰返して言ふ、意識的とは活動的と同義語なり、隨て意識の發達は神經中樞の發達によりて律せらるゝが如く思はると。尙凡て意識狀態は、或一面に於て、發動的活動性に提出せられたる一種の問題なると同時に、之が解答の端緖なるが故に、心理的事實として頭腦の機制の運用を附帶せざるものはなし。是を以て何事も意識が頭腦より出で來るが如くに行はれ、意識的活動の細目は頭腦の活動のそれに適應するが如し。然れども其實意識は頭腦より出で來らず、頭腦と

意識と適合するは、一は其の構造の複雜せるにより、他は其の覺起の強度なるによりて、二者均しく生物の施行する選擇作用の分量を測度するが爲なり、然れども此の適合は決して同樣のものにもあらざれば、平行のものにもあらず。頭腦狀態は單に當該心理狀態に於ける初發的活動のものを表明するに過ぎざるが故に、心理狀態は無限に頭腦狀態に超越するものなり。ベルグソンは此の如き意識と機官との特種的聯合作用を示す爲に比喩を掲げ、頗る妙を極む。今其の一二を引證せんに、曰く、『牝螺旋を入るれば、器械は運轉し、拔けば、停止す、故に牝螺旋は器械に必要なり、然れども必要なるの故を以て、牝螺旋は器械と同樣なりとは謂ふ能はず。然るに意識と頭腦との關係は牝螺旋と器械との關係の如きものなり』と。又曰く『生物の意識と其の頭腦との關係は、尖れる小刀とそが尖端との關

係と同じ。頭腦は鋭き尖端にして、意識は之によりて事績の緻密なる織目に滲入するものなり、然れども頭腦と意識との共延長的ならざるは、尖端と小刀の共延長的ならざるが如し』と。要するに意識と頭腦との實際的相互關係は自由を保全して、尚其の實現を許すものなり。是を以て物質界を司配する必然性は、人間行爲の宿命論を生ぜしめざるのみならず、人間の自由は如何にして其の支點を必然性に取りて、之と密接に織り成さるゝかを解し得るなり。『精神は物質に知覺を仰ぎて、その知覺より己が養料を取り、運動の形式の下に再び之を返還して、その運動に己が自由を印刻す。』(『物質と記憶』原書二七九頁)

第十二章　ベルグソンの生命進化論

一　機械論

宿命論者は前章述ぶるが如き解決には滿足せず、心理的領域より轉じて、生物學上より攻勢を取り、再び人間の自由に反對する論證を反覆して曰く、吾人が生物の活動性に認むる自發性と不可豫見性は畢竟吾人の無知に起因す、生物界の現象と雖、所詮之を理化學的過程、切言すれば、機械學的過程に歸するを得べし、隨て玆に優秀の知者あらば、現在の作用を見て有機界の過去未來をも、無機界のそれの如く打算することを得べしと。嘗てラプラスは此の假説を明確に述べて曰く、『自然界を活動せしめつゝある一切の勢力と、自然

界を組織する萬有の相互狀態とは、若し之を或一定の時刻に於て知ることを得る知識あらば——但し其の知識が此等一切の與件を分析に附するに足る程絕大なるものなりとせば——宇宙間の最大物體の運動をも、最微原子のそれをも同一の公式に包括するを得べし。此の如き知識に取りては何等の不可知のものはなかるべし、其の眼前には未來も過去の如く歷々指示せらるべし。』ハックスレーは此の思想を尚一層具體的形式の下に言明して曰く、『若も進化の根本命題が眞ならば、即ち生物無生物の全世界が、宇宙の原始的雲霧狀態を組成したる諸分子の具有する勢力の、一定の法則によりて、相互に作用したる結果に外ならずとせば、吾人の今現に目擊する世界が宇宙的雲霧の中に潛勢的に伏在したることも、亦眞なるべく、また完全なる知識が、此の雲霧の諸分子の特性を知悉して、例へば千八百

六十八年に於ける大英國現動物界の狀態を豫言し得ること、宛も冬の寒き日に人の吐出す氣息の蒸氣が如何に成り行くべきかを語る時の如くなることも亦眞なり。』と、

此の如き斷定は一切の自由を嚴密に排除するものにして、心理的自由をも否定し去るものなることを記せざるべからず、何となれば吾人の微細なる行爲と雖、其の存在が劫初より現象の隙間なき織目の中に指定さるゝことを語ればなり。げに有機物を先天的に無機物に比して、機械論を採用するときは、機械論は益々浸入し來りて萬事を占領するに至らんとす。之に反して初より有機物と無機物とを明に區別して、有機物に於て自由に向ふ第一歩を認むるときは、必ずや、少くも假定的の二元論の難問に逢着して、茲に人間の自由と品位とを理解し、建設せんとする方法を取るならん。此に對して決

裁を與ふるものに、獨り科學あるのみ。因て吾人は今茲に如何なる形而上學にも留意せず、科學を公平に研究して、科學は果して吾人をして生の本性を物質界に置かしむるや、將又之を精神界に置かしむるやを究盡せんと欲す。

二　物象と生命

上來力說したるが如く、ベルグソンの物質界の事象に關する信念は凡て、時間は其等を嚙まずと云ふ觀念に基くものなり。凡て物象は變化せざるものにして、若し何等かの外力の作用によりて變化することありとせば、その變化は分子の轉換のみにして、分子それ自らに至りては毫も變化せず、而して分子が其の位置を去りたるときは、何物も之を再び舊位置に復するを妨ぐるものにあらず。隨て一

團の要素が或一の狀態を經過したる後にも、何時にても亦再びその狀態に復することを得るものなり、故に物象は老衰することなし、隨て歷史なるものを有せず。心理的の生命は之に反して一種の歷史あり、其の本有は其の歷史と混同す。自ら同一に留存しながらも、不斷に變化して、暫くも停止せず、その過去はその現在に延長し、その現在はその未來によりて增大す、然れども之と同時にその現在は過去の上に新設し、その未來は現在の上に新設す。

然るに偶〻一の生物を取り、先入に誤られざる眼を以て之を注視すれば、その生物は物質界の無機界よりも、寧ろ、心理的生命と類似すること多きを認むべし。即ち先づ第一に一種の歷史を有して老衰し持續す。唯一の衝動、一種の間斷なく連續する發展は胚子を導きて發生せしめ、老成せしめ、死亡せしむ。生命は出生前の進化の

延長に外ならず。その證據は吾人の目擊しつゝあるものは、果して老衰しつゝある有機物なるか、將た進化を繼續しつゝある胚子なるかを識別することは往々不可能なるを見て之を知るべし。例へば昆蟲及び甲殼類などの幼蟲として初て孵化する時の形狀の如き之が好箇の適例なり。尚又吾等人類の如き有機體に於ても、彼の個體をして全く一變せしむる所の發情期の如き危機は、胚子生活の過程中に行はるゝ諸變化と全く相類するものなり。而も此の如き危期は吾等の老衰過程の一部分を成すものなり。設令此等は一定の年齡に於て、而も極めて短期間に於て起ると雖、誰も此等は單に一定の年齡に達したるが故に外部より突然生起するもの、例へば滿二十歲に達したる者が遽に兵役に服する如きものなりと主張する者なかるべし。發情期の如き變化は誕生以來、否、誕生以前より刻々準備され來りたる

ものにして、此の危期に至るまでの生物の生長は、少くも其の一半は、此の漸進的準備に存したるや瞭なり。要するに老衰に於ける本來の生活現象なるものは、形態變化の不知不識の間に、無限に分れて連續したるものに外ならず。生物の進化も胚子の進化も、持續の間斷なき記錄、過去の現在に於ける存續、隨て少くも一種の有機的記憶現象を示すものなり。

斯の如く生物は、變化の連續や、現在の裡に於ける過去の存續や、眞の持續などの屬性を意識と共に共有するが如し。更に一歩を進めて生命は意識的活動の如く創意にして、且つ不斷の創造なることを肯定し得べく、特に個體の發達の考より、變態論の說くが如き宇宙に於ける生命の發達の考に移るときは、更に然るが如し。けに變態論は極めて著しき生命の流れが、或一定の時、或一定の方處に發生

して、生物體の中を貫通し、交る〲之を有機體となし、年代より年代に推し移り、諸ろの種族の間に分れ、諸ろの個體の間に散じて毫も其力を失はず、寧ろその進み行くに從て、益〻其勢を强むるの事象を說けばなり。此の如き見地より觀察すれば、一般に生命なるものは、實際現實なる、唯一なる又連續的なる一種の潮流にして、發育せる有機體の媒介に依りて胚種より胚種に移り行くものとして現はる。其狀恰も有機體それ自らが新胚種を以て、我種を續けんと欲する舊胚種によりて發生せしめらるる一種の萠芽に外ならざるが如し。主要なるものは無限に流轉する進歩の連續にして、その進歩は不可見的なれども、可見的なる有機體は各〻其の賦與せられたる命數の繼く間之に乘じて推移す。然るに此の如き生命の連續を愈〻深く注意すれば、有機體の進化が意識の進化に類して、その進化の

中には過去が現在を督促して、新形態を發生せしめんとするが如き事象を次第に明に認むることを得べし。植物にしても、動物にしても、其の種屬の發生するときには、それ〴〵特殊の原因あるべきことは、誰も拒否せざる所なれども、此は事後に至りて其の原因の詳細を知るとき、かの新たに生起したる形態を同原因によりて說明し得るに至るべしと云ふ意味にして、その形態を豫知することは、到底不可能なりとす。その形態の生ずる一切の條件を詳しく知悉すれば、之れを豫知することを得べしと言ふ者あれども、此等の條件は形態と一體となり、形態と同一物を成して、生命が其の歷史を得る時の特徴を示すものなれば、如何にしてか一種獨特にして、未だ生起せざる、否、或は永久生起せざるやも知れざる狀態を豫め知悉するを得んや。此の場合吾人の言ひ得べき所は、其の形態の一たび生

起したる上は、其生起は其中に認めらるゝ分析し得べき要素によりて説明せらると云ふ事のみ。以上は新種屬の發生に就て觀察したる事實なれども、此の事實は新個體の發生、又は尚廣く如何なる瞬間、如何なる形態の生物の發生に就て觀察しても眞たるを失はず。是故に生命は、意識の如く、刻々く何物かを創造すと謂ふことを得べし。要するに生命は確に精神界に屬するものなり。

三　目的論

茲に精神界と稱して、知識界と稱せざることに注意せざるべからず、何となれば知識は精神の一部分にして、物質に適合せしめられ、物質の型に嵌まるものなればなり。此はベルグソンの哲學の根本的に區別する所のものにして、ベルグソンは之を生命に應用したるが

故に、在來の哲學者の反對に相岐れたる二種の生命論即ち機械論と目的論とに遠く超絶することを得たるものなり。實際機械論と目的論は吾人の智識が生命の現象を理解せんと努むるとき自然に案出する所の假定說なり。然れども此の自然案出の事が既に吾人の疑を生ずべき點なり。元來智識は、生命の進化によりて變調せられたるものとして、吾人の行爲を照らし、吾人の事物に對する作用を準備し、或一定の場合に取りては爾後起るべき事件の有利なるか否かを豫知する等、此等を其主要なる職司となすものなり。是を以て或場合に於ては始ど本能的に、既知の事實に類する所のものを選り分けて、それと同じきものを追求し、『同一のものは同一のものを生ず』と云ふ原則を應用せんとす。常識によりて未來を豫知すると云ふことは、實に玆に存す。科學は此の作用を能ふ限り精確適切にするものなれ

ども、その主要なる特性は之を變ずるものにあらず、因果の法則の嚴密に適用せらるゝは蓋し此の條件に依るものなり。されば吾人は機械論者となるには吾人の精神の自然的傾向に從ふを以て足れりとす。然れども他の一面に於ては、同一の原因を同一の結果に結び付けんとする吾人の習性は、常に志向より鼓吹せらるゝ行爲を指導するを以て目的とするものなり。語を換へて之を言へば、一種のモデルを實現せんと欲する目的によりて策せられたる行動を指導するを以て目的とするものなり。吾人は生來技術家なること、猶ほ生來幾何學者なるが如し、否、吾人は技術家なるが故に幾何學者なり。されば人間の智識は、人間の行爲の必要に應ずるが爲に作られたるものとしては、志向によりて動くと同時に打算によりて動き、目的に應ずる手段を適用して動くと同時に、機械學的形式の機械を案出し

て動く所のものなりと謂ふべし。是を以て機械論者の如く、宇宙を以て數學的法則によりて支配せらるゝ廣大無邊の機械の如く想像するも、將又、目的論者の如く、之を以て一種の設計の實現の如く見做すも、二者何れも、同じ生活上の必要より起りて、互に相待ち相扶くる精神作用の二傾向に終りまで從ふに外ならざるなり。

されば目的論は、多くの點に於て、機械論と酷似す。二論共に生命の發展に於て形態の豫知すべからざる創造を認むることを拒否す。機械論は實在に就て唯だ類似若くに反復の方面をのみ考察するが故に、自然界に於ては同じものを生ずる同じものあるのみと云ふ法則に支配せらる。是を以て吾人は幾何學者としては、豫知すべからざるものを排斥し、技術家としても亦之を排斥す。何となれば凡て製作はモデルを模して、之を再現せんとするものにして、發明の場合

ならば、既知の要素を新たに配列するの道に出づるものなればなり。其の原則は同じ結果を生ずるには、同じ原因を要すと云ふに在り。要するに目的観の原則を嚴密に適用すれば、因果の原則を適用すると同じく『一切のものは既に與へられたり』と云ふ結論に歸着す。

目的論も機械論も時間若くは持續を排除する點に於て相一致す。

然れども吾人は吾人の知識的習慣の狭き圏内を脱却して、自由に吾人の意識を叩けば、持續が吾人の本有の根抵をなし、吾人の交渉しつゝある物の實體の如くなるを見ん。眞の時間若くは持續は物に喰込みて、其歯の跡を印す。尚適切なる語を以て之を言へば、物と同質なり。吾人の知識は單に同一のものが同一のものを生ずることをのみ取扱ひ、反覆せらるゝ事にのみ專心するが故に、持續を避け、流動するものを嫌ひ、その接觸する所のものを悉く固體化せしむ。

吾人は眞の時間を思考するものにあらず、之を生活するものなり。何となれば生命は知識を超越すればなり。隨て吾人が之を思考せんことを努めざる間は、時間ほど直接にして且確實なる實在はなし。是故に學者は場合に依りて說明の爲に機械論若くは目的論を利用することを得べきも、哲學者は此の二論を拒否せざるべからず。

ベルグソンの生の哲學は目的論機械論の兩者を超越すとするも、何れかと云へば機械論よりは寧ろ目的論に近し。吾人はベルグソンが其說の何れの點に於て目的論に類し、何れの點に於て之と異なるかを精確に述べたる所を其儘左に紹介せんとす。

『吾人の哲學は、極端なる目的論の如く――設令形式は彼よりも漠然たるも――有機世界を渾然たる調和の完體と見做すものなり。然れども此の調和は目的論者の說きたるが如く完全なるものとな

さず、吾人の哲學は其間に幾多の不調和を認む、何となれば各種屬や各個體は、宇宙的生命衝動中より唯だ幾分かの活躍力を保持して、之を自己の利益の爲に利用せんと欲するものなればなり、順應と稱するものは乃ち玆に存す。種屬や個體は自己のことのみを顧慮す、是に於て乎他の生命形態との間に闘爭起る。故に調和は事實上に存在するにあらずして、寧ろ原理上に存在す、即ち原始の活躍は共通の活躍にして、愈〻源流に遡れは、愈〻各種の傾向の互に待相ち相扶くるものなるを見るべし。街頭の風が、各方面の方向に吹き分るゝも、もとは皆同一の氣流に過ぎざると一般なり。調和、否寧ろ『相互補塡』は狀態に於けるよりも、寧ろ傾向に於てのみ現はる。特に（而も此點は目的論の最も甚しく謬りたる所なるが）調和は前方に存するよりも、寧ろ後方に存す。過

去の衝動の同一性に屬して、將來の共通的向上に屬せず。生命に普通の意味の目的を指定せんとするが如き何の益かあらん。目的に就て云々するは、單に向後實現せらるべき、豫め存せるモデルに就て考ふることにして、結局は、『萬事既に定まる、未來に現在に於て之を讀み得べし』と前提することとなり。是れ即ち生命を以て其の運動及び其の全體より見て、吾人の智識（理知）と同一の行動に出づるものと信ずるものにあらずや、然れども吾人の智識は生命に對する一種の不動的及び斷片的見解に過ぎずして、自然いつも時間の外に立つものなり。之に反して生命は時間の中に進展し、且持續す。勿論一たび過ぎ去りたる後には、その辿り來れる路を回想して、其の方向を指示し、之を心理學上の言辭を以て解說し、宛も一の目的を追求し來りたるものゝ如くに語ることを

得べきや必せり。吾人も亦居常斯の如く語りつゝあるものなり。然れども是より將に發展し行かんとする路に就ては、人の精神は秋毫も言及する能はず。何となれば其路は之を辿る動作に伴れて創造せらるゝものにして、動作そのものゝ方向に外ならざればなり。されば進化は如何なる瞬間に於ても心理的解説を許すべき、而して吾人の見る所に於ては此解説は最良のものなれども、但だ遡行の意味に於けるにあらずんば價値なきものなり。吾人の提唱する意味の目的論的説明は、之を未來に對する豫測の意味に解すべからず。此は唯だ現在の光（知識）に照らして、過去を知見するに過ぎず。要するに在來の目的觀なるものゝ要請する所は、餘りに多きに過ぐると同時に餘りに少きに失す。然り、同目的觀は餘りに廣きに過ぎて、而も又餘りに狹きに失す。生命を説明する

に知識を以てして生命の意義を餘りに縮少す。智識――少くも吾人の衷に認めらるゝ智識は、經過の途すがら進化によりて作り上げられたるものにして、より大なる何物かより截切せられたるものなり、否、寧ろ高さと深さとを有する立體的實在の必然的平面投射（平面上に投射されたるもの）に外ならず。眞の目的論が再び構成すべきは否、出來得べくんば同一の見解中に攝取すべきは一層包容的なる這般の實在なり。然れども他の一方より觀れば、此の實在は、正さしく同じ物を同じ物と結合して、反覆を是れ事とする能力たる智識の圏外に出づればこそ、疑ひもなく創造的卽ち現在の狀態以上に自ら展開超絕する結果を生起する力あるものなれ。されば此の結果は、豫め與へられたるものにはあらず、此等の結果が一たび生起したる後に於てはそれに就て、モデルの再

現したる製作品の如く一種の合理的說明を加へ得べしとするも、さりとて實在は此等の結果を目的としたるものとは言ふべからず。(豫め目的として與へられたるものとする能はず)要するに目的論は、若干の知性を自然界に附與するに止まるとすれば、未だ至らざる說にして、未來が思想の形式の下に現在の裡に豫め存在すと前提するときは、餘りに過ぎたる議論と謂はざるべからず。尤も過ぎたる議論は及ばざる說の結果なりとす。本來の智識に代ふるには於包容的なる實在を以てせざるべからず、智識は其の包容的實在を小縮したるものに過ぎず。是に於て乎未來は現在を展擴するものとして現はる。隨て未來は目的論者の說くが如き形式の下に現在の裡に包含さるゝものにあらず。然れども其の一たび實現せらるゝや、現在を說明し得ること、嘗て現在が之を說明したる

如くなるに至らんとす、否、それ以上にも出でんとす。其時未來は現在の結果と云ふよりも、寧ろ目的の如くに見做さるべし。吾人の智識は未來を其の常習的見地より抽象的に考察すべき權利あり、智識それ自らがその因て出づる源流（生命）を抽象したるものに外ならざればなり。』（『創造的進化』原書五四頁――五七頁）

四　進化論

前節はベルグソンがライプニッツの目的論に對する批判なるが、此意義を明に理會すれば、同時に普通の進化論即ちスペンサーの進化論に對するベルグソンの態度如何を推知するに難からざらん。實際スペンサーは、生の史實の與件に從て、智識を以て一種の行動能力の附屬、生物意識の存在要件に對する一種の順應として説かんと欲

したり。尤も其の順應は屈伸自在にして、益〻複雜に赴くとなせり。其の結果狹き意義に於ける智識は生命の眞正なる性質、進化運動の深遠なる意義を推想すること能はずと謂はざるべからず。蓋し特定の事情の下に特定の事物に作用するが爲に生命より創造せられたるもの（智識）が如何にして生命を包擁することを得んや、智識は生命の一流出、一現相に過ぎざればなり。此の如き議論は分は全に等し、果は因を含むと主張するに異ならず。地下道に掲ぐる燈光の如きものに過ぎざる智識を、宇內遍照の天日に變じて、觀想力のみを以て萬有を、否、生命までをも理想的に再構成せんとするが如き云爲に出でたればなり。論者或は曰はん、生命の法則は等質（單純なるもの）より異質（複雜なるもの）に移る過程なりと。果して然りとせば、吾人は實に進步したる者と云ふべし。斯くて吾人は進化の

一頂點に立てる譯なり、勿論此の頂點は主要なるものには相違なかるべきも、乍然唯一の頂點とは云ふべからず、此點に立てりとても、此點に在る全體を捕捉するものにはあらず、何となれば智識によりては進化を言表する一二の概念のみを收め得るに過ぎざればなり。而も此の部分の部分（進化の一部分なる智識の部分）を以て全體を表現するものと言明す、否、具對的全體を超越する或物即ち此の全體を以て一種の現實相のみに過ぎずとなす進化運動を表現するものと言明す。

生命の全體を表現すとは、生命が其の進化の途すがら吾人に殘したる單純なる思想を相互に結合するの謂にあらず。實を言へば、これには智識一切を盡すと雖尙未だ足らざるべし。若し生命が、果して近代生物學の說くが如く、一般的には脊椎動物の方向に、特殊な

る機構様式（人間及び智識）と相容れざる幾多の要素を途中に拋擲して、之を他の進化系統線に寄託せざるべかりしとせば、吾人は須らく此等要素の完體を追求して以て、生命活動の眞相を把捉するが爲に本來の智識と融合せしめざるべからざるべし。少くも之を豫知するが爲に然せざるべからざるべし。何となれば吾人は一種の成果たる進化したるものゝみを取扱ひて、未だ此の成果を獲得する行爲たる進化それ自らを取扱はざればなり。若し又吾人が此の行爲そのものに達せんと欲し、進化運動を生活するが爲に同運動に投ぜんと欲すれば、主知論の謬想は再び吾人を要擊す、スペンサーも尚此の謬想に陷りたるが故に、進化したるものゝ斷片を以て進化を再び構成し得べしと信じたり。若し進化にして空文字にあらずとせば、そは單に捲きたる物の展舒にはあらずして、潛在的なりし物の漸進的實

現なり。豫て切り置きたる圖畫の斷片を以て再び之を組み合せる事象は、描寫の行爲と何等の關係もなし。生命の眞哲學は内部より働くものにして、外部より働くものにあらず。人間の意識を其の源流なる生命と極めて密接に合致せしめて、之を漸進的に展開せしめ、強き同情の努力によりて、創造的活動の多形的發展を海濶の胸中に抱擁せしめざるべからず。生命の眞哲學は、世界的增成の直觀を得る以外に、於多きをも求めず、於少きをも欲せず。於多きを求めざるは、自由そのものを本性とする此の增成に法則を提供せんと欲せざればなり、於少きを欲せざるは、萬有皆精神に類すれば、精神の入る能はざる領域はなければなり。是を以て普通の進化論に對するベルグソンの態度を定義するには、左の言を以てすべし。彼は珍らしき努力の批判を以て、生の史實の與件より十九世紀の之に添加し

たる、又之と一體となりたる如くに思はれたる機械的及び宿命的觀念論を引離して後、絶えず實驗學にいそしみて、新形而上學の基礎を築き、大綱を作り、在來の形而上學の大望を制限すると同時に、之を精確ならしめて、其の遺業を繼承したるものなりと。此の如く憑據する科學と實證的とも稱し得べき哲理とを密接に調和せしめたるものが即ち是れ『創造的進化』と題する書となりてあらはれたり、此書は實に千古の大作雄篇なり。請ふ吾人をしてその重要なるものを語らしめよ。

五　生命進化の分岐

先づ吾人は、生命の潮流若くは生の飛躍が、其の本性唯一にして連綿として流轉存續しつゝあることを述べたれば、そが自然の順序

として茲に左の問題を提出せざるべからず。何故此の潮流、此の飛躍は、無限に進化したる唯一物體を活かさずして、種々の種屬や個體に分岐したるか。惟ふに生命が此の如く斷片的に分碎したるには二種の原因あり、一は無生物の抵抗にして、他は生命の心的特性即ち是なり。

無生物の抵抗は先づ第一着に排すべき障碍なりき。而して生命は謙遜の力によりて茲に成功したるが如し、即ち自ら己を小にして、巧に身を容れ、(滲入して)物理的及び化學的勢力に屈從し、其の勢力と同行を甘んじ、宛も彼の轉轍機が軌道を轉ぜんとするとき、暫時其の軌道の方向に順ふが如くなせり。生命は此の如く無生物の習性に入り、無生物をして磁氣を傳へられたるものゝ如くになして、徐々と之を他の方向に引入れざるべからざりき。故に最初に現はれ

たる有機體は極めて單純なる形式のものにして、而かも其中には後來最高の生命形式を採るに至らしむる衝動力を含みたるに相違なし、而して此衝動の爲に、有機體は能ふ限り生長せんと努めたるが如し。然れども有機物質は、或程度に達したる上は、生長するよりも、寧ろ分化するを常とす。生命が此の新障碍を排し、分化せんと欲する幾多の要素を分業によりて離れ難く結合せしめて、巧に一致せしめ、遂に有機體と云ふ珍らしきものを創造するに至らしめたるが、それまでには幾星霜の努力と異常の機智とを要したるや言を待たず。

然れども分裂の深き眞原因は生命の自から包み居たるものなり、何となれば生命は傾向にして、傾向の本質は藁束の形狀に發展して、それが生長增大することによりて、其の衝動の分岐すべき種々の方向を作るに在ればなり。此は吾人の性格と稱する特殊なる傾向の進

展に於て、吾人自身の上に實地目撃しつゝある現象なり。吾人の歴史を顧みるに、誰しも己が幼時の性格が不可分的なるにも拘らず、種々の人格を含有し、其等の人格は初生の狀態に在るが爲に、雜然として相互に混同するを認むべし。然るに此の如く雜然混同する性格も、生長するに從つて、互に相容れざるに至り、斯くて吾人は唯だ一つの生活を生活する（途る）ことゝなるが故に、勢ひ一定の選擇を行はざるべからざるに至るものなり。勿論吾人は絕えず選擇しつゝ、而も絕えず遺棄する所のものも亦多し。然れども無數の生物を取扱ひつゝある自然は、此の如き犧牲を拂はずして、生長に從つて分岐したる種々の傾向を保存し、其等の傾向によりて種々樣々の種屬を創造すれば、此等の種屬は各〻別々に進化を遂ぐべし。但し此等の系列は各〻其の價値を異にす。生命進化の途上には分岐多端

なりしが、本街道となるものは、二三あるのみにして、多くは皆袋小路に過ぎざりき。尚此等本街道の中にも、脊椎動物を經て人類に達する街道のみが廣濶なる大道にして、大生命をして自由に通過せしむるを得たり。されば進化の運動を研究するときには、斯く種々に分岐したる方向を説明し、各方向に於て行はれたるものゝ價値を評價し、一言以て之を蔽へば、互に分離したる傾向の性質を確定し、之を定量し、特に吾人に取りては先づ人類と動物界全體との關係を、次に有機界全體に於ける動物界そのものの位置を規定することが仕事なり。

六　植物と動物

先づ第二の點より考察せんに、元來植物と動物とは明確なる特性

によりて截然區別あるものと云ふべからず。如何なる植物的生活の特性と雖、或程度に於て、或動物の中に認められざるはなし、之を反對にして考ふるも亦然り。故に或生物學者は直截簡明に、兩界の區別は畢竟人爲的に過ぎずと說きたり、此說は若し數學や物理學の場合に於けるが如く、或一定の物象に具はりて、他の物象に具はらざる或屬性によりて、一定義を下さゞるべからずとせば、或は正當なるやも知るべからざれども、生命科學に適當する定義は之と全く其の性質を異にす。如何なる生命表現と雖、他の多くの生命表現の具する本有的特性を潛在的若くは伏能的に具有せざるものは殆ど之なし。但だ其の割合に於て區別あるのみ、即ち個々の種屬が進化するに從て、益々其の特性を著明ならしむる點に於て、之が强弱の區別を見るべし。此の如き見地より觀れば、植物と動物とを明に定義

し且區別することを得べし。要するに植物と動物とは生命の進展に伴れて相分れたる二種の潮流に屬するものと云ふべし。

第一植物と動物の區別は如何にして之を知り得べきかと云ふに、植物は、空氣、土、水より直接に其生を支ふるに足る要素殊に炭素窒素を礦物の形に於て攝取するに反して、動物は此等の要素が植物によりて、若くは直接又は間接に之を植物に仰ぐ動物によりて有機質中に於て既に已の爲に固定せしめられたるに非ざれば、此等の要素を攝取すること能はざるによりて、之が區別を知ることを得べく、同時に此の區別に關聯して、更に深き區別あり。即ち動物は前述の如く、自ら養ふが爲には、此等の要素を攝取したる植物、若くは之を植物界より取りたる動物に待たざるべからざるにより必然的に可動的なり。之に反して植物はその養料を求むるが爲に位置を換ふる

必要なきが故に、不動的に固着す。然れども固着性と可動性も亦更に深き傾向の外見的徴候に過ぎず。可動性と意識との間には明に一種の關係あり。劣等なる動物は、自ら自由に動く程度に伴れて意識的なり。運動に對しては意識は原因たると同時に結果なり。意識の職能が運動を指導するに在るを見れば、原因なり、運動作用が意識を支持して、同作用の消失するや否や、意識が萎靡し若くは昏睡するを見れば、結果なり。果して然りとせば、地上に固着して、居ながら食糧を攝取する植物は、如何にして意識活動の方向に發展するを得んや。動物は感性と覺醒的意識とを以て其の特徴となし、植物は昏睡的意識と不感性とを以て其の特徴となすは、蓋しこれによりて解釋すべし。

然れども表面上動物界と植物界を區別する差異此の如くなるに拘

らず、動物細胞と植物細胞が、共通の本源より出で來るとせば、如何なる理由によりて此の如く分岐したる發展を遂ぐるや。

吾人は生命の奥底に最大可能量の不決定を物的勢力の必然性に接合せんとする努力ありと假定したり。此努力はエネルジーを創造するには何等の力なく唯豫め存せるエネルジーを利用する力あるのみ、此の努力が其の目的を達する途は唯だ一なり、そは物質より潜勢力を收めて、之を多量に貯へ置き、一定の時刻に、引金を引けば、直に動作に必要なる爆發をなさしむべく準備する事即ち是なり。然るに地上に於て利用し得べきエネルジーの主要なる本源は太陽なり。されば問題の歸する所は左の如し、『生命の底なる努力は太陽より絶えず撒布せらるゝエネルジーを取りて、その一定の量を適宜なる貯蓄所に貯へ置き、其所より任意の時、任意の場所、任意の方向に引

出すことを得しむる事なり。

動物の食量は正さしく此種の貯蓄所なり。抑ゝ食糧は極めて複雑なる成分子より成るものにして、此等の成分子は多量の化學的エネルジーを潜勢的狀態に保存するが故に、食糧其物は一種の爆發物となりて、之に火を點ずれば、直に貯へられたる勢力を發散するものなり。生命は當初爆發物の製造と之を利用する爆發とを同時に行ひたるものゝ如し。此の場合日光のエネルギーを直接に貯へたる有機物が即ち是れ空間に於ける自由なる運動に於て其貯へたるエネルジーを使用したると同一なる有機物なり。此理由に依りて吾人は、最初の生物は、一方太陽より借りたるエネルジーを蓄積し他方不連續爆發的方法に於て之を費消することを求めたりと推定せざるべからず、而して動植兩界の分岐して發展したる所以は、此兩界が各ゝプロ

グラムの一面を忘却したるによるか、或は生命が物質の抵抗に接して二つの傾向が相共に長く同一の有機體の中に發展すると能はざるに起因するが如し。而して植物界は貯蓄の方面に、動物界は費消の方面に傾きたるとは事實也。遮莫、若し最初より爆發物の造られたる目的が爆發その事の爲なりとせば、大體に於て生命の基本的方向を示すものは、植物の進化よりも、寧ろ動物の進化なりと謂はざるべからず。

前にも述べたる如く、動物性を構成するものは、能ふ限り多量に蓄積したる潜勢力を爆發的動作に變ずる爲め同潜勢力の放散機關を利用する能力に在りとす。最初に於ては斯る爆發作用は偶然的に行はれて、其の方向を一定すること能はざりしならん。彼のアミブが其の僞足を同時に何れの方向にもさしのばすが如き之が一例として

見るべし。然るに高等動物に至るときは、身體の形狀までも、エネルジーを放散する一定の方向を示しつゝあるを見る。此等の方向は彼の端と端と相接する複雜なる神經要素の系列によりて示さる。最劣等なる無核蟲より最高等なる動物に至るまで、生物の進化は主として神經系統の發達に在りき。若し神經系統に加ふるに一方より感覺機官、他方より運動器官とを以てせば、神經系統は實に有機物の主腦機關なりと云ふべし。隨て高等有機物とは、畢竟消化、呼吸、循環、泌尿等の諸器官を具備せる感覺運動系統を指すものなり。而して此等の諸器官の職能とする所は、感覺運動系統を修理し、保護し、清淨にして、且之が爲に不變の內部構制を創造し、特に任意に運動に變じ得る潛勢力を之に供給するに在りとす。生命衝動の主力は、此等器官を創造するに傾注せられたる事は、有機界全體を一瞥

すれば、直に之を認め得べし。然れども此の生命の衝動に就ては更に之を說明せざるべからず。

七　生命の衝動

有機界を橫斷して進化しつゝある勢力は、限りある勢力にして、間斷なく自己を超絕せんと欲しつゝも、常に其の行はんとする事業に適せざるものなるや明なり。人間の天才の事業に至りては、その成績の大小如何を問はず作品と作業との間には完全なる適合の在るあるを見るべし。然るに生命の進化に至りては、之に反して、動作と結果との間に於て驚くべき不釣合あり。劣等有機體より高等有機體に至るまで、一大努力の不斷に其間を貫通しつゝあれども、多くの場合此努力が忽にして休止する所以は、或は反對の勢力の爲に消

磨せられ、或は其の行ひたるもの〻爲に其行はんとするものより引き離され、自ら造らんと努むる形の爲に吸收せられて、昏睡狀態に陷るが爲なり。其の最も完全なる事業と雖も、往々降伏せしむべかりし物質性の爲に反對に致さる〻事あり、外來の抵抗力に克ちたる如く思はる〻時に於ても亦然りとす。此は吾人が自ら省みて實驗し得る事實なり。吾人の自由性は自ら主張を通さんとする場合にも、種々樣々の習慣を生起するが故に、不斷の努力をつづけて自ら持するにあらざれば、その習慣の爲に覆さるべし、蓋し是れ無意識作用の爲に要擊せらる〻が爲なり。概して言へば、生命は活動性そのものなり。然るに個々の生命顯現は容易に此の活動性を甘受せずして、絕えず遲疑す。全生命の進化は直線的に勇往邁進せんと欲するも、個々の進化は一種の循環的行進に過ぎず。ベルグソンは譬喩を以て

此事象を說明して曰く、『宛も塵埃が吹き荒む疾風に煽られて渦巻くが如く、生物も亦生命の大噓に煽り立てられて盤渦旋轉す』と。されば絕えず新形態を創造し行かんとする生命の働と、此の個々の形態の出現する作用とは、二者全く相異なる活動にして、往々相矛盾するを常とす。是を以て生命に關する吾人の判斷は、前者の見地に立脚すると後者の見地に立脚するとによりて、相背反するに至ることあり。生活態とは其の文字の示すが如く生活し得べき形態なるが故に、各種屬は、之を其の順應す可かりし、又順應するを得たる環境に比すれば、生命の贏ち得たる成功を表明するものなれども、觀察點を轉じて、各種屬と其の途上に殘したる活動とを商量すれば、不成功を以て原則とし、成功は寧ろ異例にして且つ常に不充分なりと謂はざるべからず。

動物界の最初の努力は、今よりも單純なる、然れども幾分の活動性を具したる、特に將來如何なる形態にも進化し得る不定形の有機體を創造するに歸したることは、事實に近し。此種の動物は今日の蠕形動物に類したるべく、但だ其の異なる所は、今日の蠕形動物は、彼の原始動物が棘皮動物、軟體動物、節足動物及び脊椎動物等の共通始源として、無限の應化性を具し、又無限の未來に富みたるに反して、此種の形態及び特性を缺如したる固定的種屬たるに在りとす。是れ蠕形動物には一の危險なる障害之を待ちて、動物生命の躍進を遮斷せんとしたるに依ると疑を容れず。原始時代の動物を瞥見するに、一種特別の現象あり、そは多少硬ばりたる外被の中に籠りたる事象にして、此の一般的事象は、彼の軟體動物か出來得る丈け他の呑噬を免れんが爲め自ら防禦せんとする傾向ありて、種屬が愈々可

動的なれば、その防禦法の必要愈々切迫するを見て、之を說明し得べきが如し。然れども此の如き鎧は動物を保護したる代りに、その運動を束縛して、時としては身を動かすこと能はざるに至らしめたり。然り而して彼の植物が細胞膜を纏ふが爲に意識を失ひたるが如く、動物も斯かる城寨又は甲冑に身を固めたるが故に、半ば昏睡狀態に陷らざるを得ざるに至れり。現に棘皮動物や軟體動物は、今仍此の昏睡狀態の中に生息しつゝあり。節足動物及び脊椎動物も亦此の危機に遭際したるや言を待たず。此の危機を遁るゝことを得たる時は、實に幸運の機會にして、彼等が今日の如く生命最高の形態に進化するを得たるは、偏に此の幸運の機會に際會したる賜なりと謂はざるべからず。

實に吾人は生命の衝動が二つの方向に於て優勢を示すを見る。魚

類は硬鱗質の鎧を捨てゝ鱗を備へ、昆蟲の如きは疾より其の祖先を擁護したる鎧を脱捨てたり。かく彼等の防衛的甲裝の不充分となりし代りに、敏捷性は著しく發達するに至れり。之を人類武裝の進化に徴するも、亦古代希臘の重裝兵滅びて、古代羅馬の歩騎兵起り、甲冑を着けたる騎士滅びて、輕裝自由なる歩兵の起れるを見る。一般生命の歴史に於ても、人類の歴史に於けるが如く、最も偉功を奏したる者は、最も大危險を冒したる者なりき。是を以て脊椎動物と節足動物の進化したる二途を顧みれば進歩は主として感覺運動的神經系統が發達して、活動變化の屈伸自在なる性を漸進的に保確したるに在りと云ふべし。然れども其の茲に達する道行は種々の方向に於て行はれたり。節足動物に於ては、その身體は多少長系列の環節より成る、隨てその活動力は、各々特殊性を有する種々樣々の環節

の間に分附せらる。脊椎動物に在りては、活動力は唯二對の肢體のみに集中せられ、且此等の機官は必ずしも形態に束縛せられず、自由にその機能を營みつゝあり。此の自由は人間に至りては完全となるが故に、人間の手は如何なる種類の働きをも遂ぐることを得るなり。

表面に見ゆる所實に以上述ぶるが如し。然れども此の見ゆるものの背後には、尚推測すべき所のものあり、即ち生命の裏に内在して、初は混同せるも、發達するに從て分離したる二勢力是なり。若し節足動物の進化が昆蟲に於てその頂點に達しつゝあること、猶ほ脊椎動物の進化が人間に於てその頂點に達しつゝあるが如きことと、又昆蟲は本能的活動の異常なる發展によりてその特徴を示すこと、猶ほ人間が知識的活動のそれによりてその特徴を示すが如き事とを檢

點するときは、人は直に此二勢力の一は本能にして、一は理知（智識）なることに心付くべし。

八　本能と理知

本能は有機的要具を利用し又は構成する能力、理知は無機的（人爲的）器具を製造し又は使用する能力にして、此の二者は生命が無生物に對して作用を行ふが爲に採用する直接間接の二方法を示すものなり。此の二種の活動の得失利害は一目瞭然たり。本能は適當なる要具を近く手許に有す、此の要具は自然に製造せられ（賦與せられ）且修理せらるゝものにして、其の爲すべき業を何時にても、直に、些の困難なく、多くは驚くべき程完全に遂げ得るものなり。その代り其の構造には殆ど何等の變化もなく、其の機能も亦非常に特

殊なり。

之に反して理知の製造する道具は不完全にして、努力の結果漸く求め得られ、殆ど常に取扱ひ難き缺點あり、然れども其の材料の無機物なるが故に、如何なる形にも作り變へられ、如何なる目的にも使用され、之を利用する者に無限の力を與ふるの長所あり。就中之を製造したる者の性質に影響を與ふる力あり、自然の有機體を助長する人爲的機官なれば、謂はゞ之に一層豐富なる有機組織を與ふるものなり。生物の一要求を滿たせば、更にまた新要求を造り、隨て本能の如く動物の機械的に動く活動範圍を鎖す代りに、活動に無限の範圍を開きて、益〻之を深く進ましめ、益〻之を自由ならしむ。吾人は玆にも亦繰返して言はんとす、最も大なる危險の存する所は最も偉なる成功の贏ち得られたる所なりと。

九　宇宙に於ける人間の位地

吾人は茲に最も重要なる問題に逢着す、宇宙に於ける人間の位地問題是なり。進化論者は多く連續の原則と又人間と猿の或種屬との類似性を無差別に應用して、人は高等の猿に過ぎず、人と猿との間には進化程度上の差別あるのみ、性質上の差別あるにあらずと結論す可しと云ふ。而して此の如き結論を排斥せんとする論者は、初より斯かる原則を蔑視して、意に介せざる風を裝へり。されば世の精神主義者は一般進化論者の言論に反對して、人間を猿の種屬と區別するが爲に意識の證明を揭げて、飽迄進化論の排擊に努む。ベルグソンの哲學も亦此點に於ては觀照の事實に基きて、意識の正當なる證明を極力貫徹せしめんとするものなり。其說下の如し。

先づ第一人間の腦と猿のそれとは非常に相類似すと云ふの故を以て、兩者の意識も亦之が爲に相類すと論結する能はず。前にも述べたるが如く、意識と腦との關係は、恰も銳利なる小刀と其の刄とのそれの如きものなり、腦は刄にして、意識と云ふ小刀は此の刄より事件若くは現象の織目に斬込むものなれども、刄が小刀全體にあらざると同じく、腦は決して意識と全部合致するものにあらず。されば人間の腦と猿のそれとは、世の皮想なる論者の假定するが如く、相類するものにあらざるが如し。例へば左の事實の如き如何にして之を說明するを得んや。人間は如何なる運動をも練習し、如何なる器具をも製造し、又如何なる動的習慣をも馴致し得るに反して、動物は如何に天稟の能を具するものと雖、即ち猿の如きものと雖、その新らしき運動を組立つる能力は非常に制限せらる。而して人間の

腦の特徴は正に玆に存す。人間の腦は幾多の起動的機關より成り、如何なる時に於ても、其等の機關中に自由の選を行ふことを得て、その運用せんと欲する所のものを、引金を引きて直に動かすことを得るが如くに組織せらるゝが故に、他の動物の腦とは左の點に於て相異なり、即ち人間の運用し得べき機關の數と又其中より選用し得べき支動機の數とは無限にして、而して此の無限と有限との相違は、乃ち是れ開放と閉鎖との相違なり、玆に於ては最早程度上の差異にはあらずして、性質上の差異なり。之に就てベルグソンは人間の意識と動物の意識とは如何に相異なるかを描寫して曰く、

『是故に如何に怜悧なる動物と雖、其の意識と人間の意識との間には根本的の差別あり。何となれば意識は生物の選擇力と正比例するものにして、現實の動作の周圍を飾る可能的動作の縫と同一延

長のものなり。意識は創意と自由との同義語なり。然るに動物に在りては、創意は習慣の一變形に過ぎず。勿論種屬の習慣に鎖されつゝも、その個性的創意によりて之を擴張することありと雖、機械的運動を逸脱する間は僅に一瞬轉にして、そは正さしく新らしき機械的運動を創造する時のみに過ぎず、その囹圄の門戸は開けりと思ふ間に早くもまた閉ぢらる。之を押さんとするも、單に門戸防止の鎖を延ばすに過ぎず。人間に至りては、意識は直に其鎖を破却す、獨り人間に於てのみ意識は自由となる』云々。(『創造的進化』原書二八六頁)、次にベルグソンは人間が斯く意識の自由を贏ち得たるは、腦の優越なるが爲なり、言語の爲なり、社會的生活の爲なりと述べて後、尚語を繼で曰く、然れども腦や、言語や、社會生活やは、唯一の內的優越性をいろ〳〵に外部に表徵す

るものに過ぎず。此等は生命が進化の或時期に贏ち得たる唯一無比の成功を各〻其の様式に從て表明するものなり。此等は人間と爾餘の動物とを區別する程度の差異のみにあらず、種性の差異をも表彰するものなり。此等は吾人をして左の如き比喩を想起せしむ、生命が大なる跳踏板の末端より飛び跳ねたるとき、他の動物は悉く墜落したるに引き換へて、獨り人間のみ高く垂れ下れる繩に縋り付きて、危害を避くることを得たり。（同上二八七頁）

此の如き意味に於てベルグソンは古來の精神論者の常套語たる、『人は萬物の靈なり、人間は萬有の目的なり。』と云ふ言を、多少新らしき意味に解して『人間は進化の終局なり』と云へり。勿論生命は物質を貫いて流るゝ潮の如きものなれば、吾人に目的又は設計の跡を示す者にあらず。勿論爾餘の萬有は尙未だ人間に歸向せしめら

れざれば、吾人人類も亦、他の種屬の如く競走せざるべからず、又實際他の種屬と競走し來れり。勿論人は進化運動の目的と見做されたるものにあらざれば、若し生命の潮流が今日のものと相異なる障碍に逢着して、之が爲に別樣に分岐したりとせば、吾人々類は生理的にも、又心理的にも現在と大に相異なる者となりしならん。然れども人間の形態は、生命の廣大無邊なる持久的努力によりて贏ち得たる自由を表示するものたるや明なり。人間以外何處に於ても意識は袋小路に入りて行詰まりしが、獨り人間のみ自由に進むことを得たり。されば人間は設令生命の全體を悉く引率せずとするも、生命の運動を無限に繼續するものと謂はざるべからず。他の進化線上には生命の他の傾向も進み來りて、人間はその幾分を保存すること、之を彼の一切の傾向の互に相滲透融合するの事實に徵して明かなれ

ども、乍然人間の保存したるものは極めて僅少なり。凡て事の行はる丶、宛も一種の漠然たる無定形の實在が、自ら實現せんことをのみ努め、途中自己の一部分を棄却したるが爲に、漸く實現の目的を貫徹するを得たるが如き觀あり。而して此の如く棄却せられたる部分と云ふは、自餘の動物及び植物之を表示す。

十　創造的進化の哲學

『創造的進化』は生の哲學にして、一種の道德にはあらず、又此の如くならんと欲するものにもあらず。然れども人若し哲學を樂天的と厭世的の二つに分くれば、ベルグソンの哲學は樂天的哲學にして人を發奮興起せしめ、活動飛躍せしむるが爲に益々勢力を與ふるものなり。何となれば此の哲學によりて吾人は人類と絶緣したる孤立

者にあらず、人類も亦其の司配する自然界と絶縁して孤立する者にあらざればなり。至微の塵埃と雖、太陽系全體と結合する如く、一切の有機物は劣等より高等に至るまで、生命の始源より吾人の現狀態に至るまで、如何なる方處に於ても又如何なる時代に於ても、唯一不可分の衝動力を著明ならしむるものなり。

『一切の生物悉く相結合し、悉く驚くべき同一の衝動力に動かされつゝあり、動物は其の支撐點を植物に取り、人間は動物の上に騎行す。而して人類全體は、空間に於ても、時間に於ても、宛然一大軍隊の如く、吾々各個人を前後左右に引率しつゝ疾驅驀進して如何なる抵抗をも傾倒し、如何なる障碍をも突破し、死の勢をすら突破する力あり』（『創造的進化』原書二九四頁）

是れ實に世界の哲學界、就中佛蘭西の哲學界に於て一新機軸を開

きたるものにあらずや。從來佛蘭西の哲學は過激に流るゝほど主知的なりしかば、生命に對してはいつも困難を感じたり。而して生命は理知を以て之を解釋すること能はずとて、概して之を純物質に放棄することに決したり、然るにベルグソンは理智それ自らに於ても生命の流れを示して、先哲の失墜せしめたる生物世界を隆興せしめ因て以て一切生物の一如同胞の觀念を復し、近代生物學の與件に依りて之を道理に基かしむるを得たり、此の觀念は一切の印度哲學を貫くものにして、之をベルグソンと同じ程度に認めたる者は、歐洲の哲學者中獨りショペンハウエルあるのみ。但だその相異する點はベルグソンは歐洲思想の過度の傲岸性を避くるを得たるが如く、印度思想の過度の卑屈性をも脱することを得て、人類に其が萬有の上へに超絕するの優越性と一切動物を或條件の下に其が固有目的の爲に

使役する權利とを保持せしむるに在り。斯の如く、ベルグソンの生命哲學は泰西の主要なる言論を綜合すると同時に、東洋の思想をも結合して、之を其の最善なるものに成全せしむるものなり。

『附錄』

一、ベルグソンの略傳

アンリ・ルイ・ベルグソンは千八百五十九年十月十八日佛京巴里に呱呱の聲を揚ぐ。父母の經歷は詳ならざれども、ベルグソンの猶太人の出なること丈けは明なり。猶太人は古來多く天才を出せり、宗教界には世界の大聖基督を出し、音樂界には樂界の雄鎭メンデルッスンを出し、經濟界には世界の富豪ロチルドを出し、哲學界には形相主義の開祖スピノザを出し、今日も仍ほ佛國に於ては科學、哲學及び道德學等に於て嶄然頭角を顯はす碩學鴻儒は、多く猶太人の出なるは奇と謂ふべし。猶太人は太古より神の選民と稱せられしが、基督

を磔刑に處してより以來、天より咀はれたる民として、國もなく、法もなく、天涯淪落の生活を送りつゝあるに、古往今來、此の如く偉人を出し、天才を出すは何ぞや、これには必ず理由の存するならん。吾人は固より今茲に之が理由を穿鑿するの必要なし、單に同じ哲學界に於て、殆ど同じ思想系の天才を出したる事のみを、特に注意することゝせん。即ち彼のスピノザが「永劫の相」に於て宇宙萬有を觀じたると、吾がベルグソンが「持續の相」に於て一切萬事を觀ぜんとしたると、又此の二人の哲學者が其の文章に於ても、優に世界の文豪を凌ぐに足るとは、人をして何等かの因緣あるかと疑はしむ。兎に角此の兩哲學者の文想は密接の關係類似を有するが故に、スピノザに親みたる者はベルグソンに親み易く、ベルグソンに親みたる者はスピノザに親み易し。

ベルグソンは千九百六十八年より千八百七十八年に至るまで、前後殆ど十ケ年間「リセー・コンドルセ」中學に登校して教を受け、特に科學に趣味を有し、屢競爭試驗に應じて賞を受く。古來佛蘭西の哲學者中には初め科學就中數學に非凡の才の發揮したる者多し。彼のブレーズ・パスカルの如き、其の一例なり。吾がベルグソンも亦夙に數學に長じ、千八百七十七年の競爭試驗には首席を占め、難解の數學問題を解いて賞を受けたりと云ふを見れば、彼が如何に數學に傑出したるかを知るべし。其の解答が『數學年報』に登載せられて發表せられたるとき、時の元帥マクマオン之を讀み、『斯の幼年科學者にして、斯の名譽を贏ち得たるか』とて、激賞措かざりしと云ふ。彼が數學に長じたるの證は、今尙彼れの著書に歴然たり、特に「意識の直接與件論」に於て著しく顯はる。

ベルグソンは初め機械學の研究に沒頭し、斯學を以て志を立てんかとも思ひしが、頓てスペンサーの學說に意を傾けてより、哲學を以て身を立つるの意を起したり。彼れの著書には機械論就中スペンサーの進化論を駁擊せる節多し、是れ彼が最初熱心に研究したるものゝ結果を發表したるものと見て可なり。

彼は數學にも滿足せず、機械學にも滿足せず、進化論にも滿足せず、一生の計を立つるが爲に如何なる科學を取らんかの選擇に迷ひたるが、畢生の大事業たる「生」の問題を解決するに於て、此等の科學の無能無力なるを悟るに至つて、斷然意を決して文學に從事することに定め、千八百七十八年遂に高等師範の文科に入學し、特に哲學に志し、目出度く三年の業を卒へて、千八百八十一年哲學講師の資格を得たり。卒業後直に「リセー・ダンゼ」の教授となりて、哲

學を講ぜり。千八百八十三年より同八十八年に至るまで「リセー・クレルモン」に教鞭を執れり。此時彼は其の三大作の一なる『意識の直接與件論』を草し、之を博士論文として提出し、千八百八十九年博士の稱號を受く。時間問題と自由意志問題とに於て一新機軸を開きたるものは實に此の著作なりとす。これより先き時間問題の研究に名を揚げたる者、千八百八十三年にはピヨンあり、千八百八十八年にはギヨーありて、孰れも獨特の卓見を發表したりと雖、最も嶄新奇拔なるものは、ベルグソンの論文なりと云ふ。(吾人はベ氏の時間論に與せずと雖、其論の嶄新奇拔なる事は之を看取せざるを得ず)

彼が千八百八十九年「ソルボンヌ」校に於て、此博士論文即ち『意識の直接與件論』を主張したる時には、宗教界の名士(モンセニウール・デュルスト、モンセニウール・ファルジュ等)や、哲學界の大家等多

く出席す。此等の名士及び大家の眼にはベルグソンは一見直に獨創の思索家として映じたるが、その所論の精細緻密、非常に複雜を極め、明快を缺くの點に於て、カントに酷肖せりとの評を受けたり。されど比喩の絕妙なると、佛人特有の機智に富みたるとの點に於ては、カント及び當代哲學者に於て見るを得ざる所なりと取沙汰されたり。此時聽衆は殆どベ氏の辯に醉はされたるが、試驗委員の一人なるラウエソン氏聽衆の感動を代表し、滿面に微笑を湛へ、例に依りて讚辭を呈したり。然れども其の讚辭の中に『余は必ずしも貴下の言を悉く解し得たりと言ふ能はざれども、貴下自身は定めし能く解せられたるならん』との言ありたるを、聽衆之を聞き一齊に拍手喝采したりと云へば、ベルグソンの所說の難解なるは、此の一事に徵しても知るべし。當時の聽衆は前述の如く佛國宗教界幷に哲學界の

名士及び大家なりしに　而も尚且難解の意を表したること、此の如し。然るに之を他國の人々が明に理解し得るが如く云々するは、吾人の甚だ合點し難き所なり。特に佛語の特性を知らざる徒のベルグソン論の如きは、甚だ如何はしきものと謂ふ可し。

ベルグソンは地方の各種中學に教鞭を執りて後、即ち千八百八十八年頃より巴里に來り、初めは「コレージュ・ローラン」に、次に「リセー・アンリ・カツル」等に於ても教鞭を執りたるが、千八百九十八年より千九百年に至るまで、母校なる高等師範の講師となり、千九百年に至り初めて古來有名なる佛蘭西學院（フランソア第一世の創立したるものにして、大學校とは全く獨立なり）の教授となり、是より名聲日に月に高まり、越えて一年即ち千九百一年博士會員に推薦せられたり。

ベルグソンの名が世界一般の學者間に知らるゝに至りたるは、主としてその名著の飜譯に原由するは明なれども、氏が各國に於て開催せられたる萬國哲學會や、又は海外の大學講堂などに於て講演したる事も亦之が一因たりと云はざるべからず。即ち千九百四年にはジェノアに於て開催せられたる第二回萬國哲學會に出席して講演し、千九百十年にはボロニアに於て開催せられたる第四回の萬國哲學會に出席して講演し、千九百十一年には英國オックスフォド大學の講堂に於て講演し、近くは米國に渡りて講演したるが如き、是れ皆彼れの名聲をして益〻世界的ならしむるに與つて力ありたるものと云ふべし。本國なる佛蘭西に於ては彼れの講堂が如何に盛況を呈し、彼れの講演が如何に歡迎せらるゝかは本書屢〻之を記したれば、玆には蛇足を添へず。又彼れが時世の寵兒として、將た思想界の革命

見として、本國なる佛蘭西に於て彼の哲學の如何に歡迎せられつゝあるかは、吾人本書第二章に於て詳に之を述べたれば、これ亦茲に贅するの要なし。

終りに莅み、ベルグソンの風丰面影に就て一言せんに、之を氏の自筆に就て見るも、(其書を見て、其人を知る)、また之を氏の寫眞に就て見るも、氏は實に溫厚篤實の君子、質朴眞摯の學者なることを知るべし。學を衒はず、才に誇らず、ペダンチスムの風もなく、セクタリスムの貌もなく謙讓以て自ら持し、恭敬以て人を待ち、今日の哲學者に有り勝ちの傲然高く自ら標置して以て一世を睥睨するが如き風貌は更になく、『宗教は愚夫愚婦の信ずる所、哲學は賢者學者の味ふ所』などゝ云ふが如き口吻に出づることもなく、その恭謙の美德は反對論者までも深く之に敬服す。其の語調の重々しく、其

の確信の深きにも拘らず、其の精巧なる藝術家の技術、其の高妙なる詩人の風韻は、優に人を魅するに足る。其の所說の往々普通の常識に戻り、在來の學說に反する所あるを以て、一部の學者より逆說と呼ばれ、詭辯と叫ばるゝにも拘らず、其の學者ぶらず、先生ぶらざるの點に於ては、反對論者と雖深く之に感嘆を拂ひつゝあり、吾人も亦遺憾ながら氏の所說を悉く信ずる能はずと雖、氏の人格に對しては深く敬服する者の一人なり。

二、ベルグソンの著作

吾人は飜譯によりてベルグソンの眞意を解し、眞價を認むることは甚だ困難なりと信ずるものなり。眞にベルグソンの心を讀みて、氏の所謂『生の核心に觸れん』と欲せば、須らく氏の原書に就かざるべからず。英譯と云ひ、獨譯と云ひ、いづれも皆佛語の特性を失へり、邦譯に至りては尚一層甚し。若夫れ英譯若くは獨譯を重譯するものに至りては、最早ベルグソンを殺したるものと云ふべし。吾人は本書に於て直接原書に就て譯したりと雖、ベルグソンを殺したるの罪は、深く讀者に向て謝せざるべからず。因て左にベ氏の原著作の主要なるものを紹介せんとす。

Introduction à la Métaphysique（形而上學序論）（右は千九百三年一月『形

而上學と倫理學』雜誌に掲載せらる、後ち單行本となる。)

La Perception de changement (變化の知覺)(右は千九百十一年英國オックスフォード大學講堂に於ける二回の講演)

Essai sur les données immédiates de la conscience. (意識の直接與件に關する論文)(千八百八十九年巴里『フェリクス・アルカン』書肆に於て出版、千九百十四年に至り版を重ぬること實に四十版の多きに至る。)

Matière et Mémoire. (物質と記憶)一名 Essai sur la relation du corps avec l'esprit. (心身相關論)(千八百九十六年前記書肆に於て出版、千九百十二年に至り九版を重ぬ。)

L'Évolution créatrice (創造的進化)(千九百七年巴里出版、千九百十四年に至り前記書肆に於て十五版を重ぬ。)

Le Rire (笑) Essai sur la signification du comique. (一名可笑味の意義に關する

論文)(千九百年巴里前記書肆に於て出版、千九百十三年に至り十二版を重ぬ。)

其他にも哲學雜誌に掲載せられたるものあれども、今は一々之を紹介するの遑なし。以上の著作中ベルグソンの三大傑作と稱すべきものは、『意識の直接與件論』、『物質と記憶』、『創造的進化』の三書なりとす。本書は主として題材を此の三書より採れり。即ち時間と自由意志問題は之を『意識の直接與件論』より、心身相關問題は、之を『物質と記憶』より、進化問題は之を『創造的進化』より取りたれども、其の他は間々他の著作、講演、就中『形而上學と倫理學』雜誌幷に『哲學雜誌』等に掲載せられたる論文より取りたるものもあり。但だ『笑』より取りたる所は殆ど之なし。蓋し同書は文學上興味ある書なれども、哲學問題に就ては參照すべき所甚だ尠ければなり。

吾人は最後に本書の參考書として取る所最も多かりしものを記さんと欲す。

アルベール・ファルジュユ師の『ベルグソンの哲學』(La Philosophie de M. Bergson)、ルネ・ヂルアン氏の『アンリ・ベルグソンの哲學』(La Philosophie de M. Bergson)、エヅアール・ルロア氏の『新哲學』(Une Philosophie nouvelle)等なれども、『Etudes』誌に負ふ所も亦少からず。

ベルグソン 終

索引

＊「ベルグソン」及「哲學」の二語は餘りに頻出するを以て省略したり

一 人名地名索引

二　事項索引

【ア行】ア

ウ

エ、ヱ

オ、ヲ

キ

ク

ケ

コ(カウ、カフ、コウ、コフ、クワウ)

【サ行】サ

シ

ト(タウ、タフ、トウ、トフ)

【ナ行】ナ

ホ（ハウ、ハフ、ホウ、ホフ）

【マ行】マ

ミ

ム

【ラ行】ラ

リ

ル

レ

ロ（ウラ）

【ワ行】ワ

索引終

大正四年八月二十七日印刷
大正四年八月三十日發行

現代叢書 ベルグソン奥附

編輯者 伊達源一郎

發行兼印刷者 東京市京橋區日吉町 渡邊爲藏

印刷所 東京市京橋區日吉町 民友社

發行所 東京市京橋區日吉町 振替口座一三一〇〇 民友社